財団法人　市原市文化財センター調査報告書　第32集

市原市棒ヶ谷遺跡・永田遺跡・海士有木遺跡・北旭台遺跡
姉崎山谷遺跡・喜多高沢遺跡・辰巳ヶ原遺跡・原遺跡

―不特定遺跡発掘調査報告(1)―

1989

市原市教育委員会
財団法人　市原市文化財センター

序　　文

埋蔵文化財の豊富な市原市では、各種の開発に伴う緊急調査が増大しており、特に、小規模な面積についての調査は、予算や時間的な制約が有り、現在までに数多くの遺跡が調査されましたが、貴重な資料が未報告の状態で眠っております。

本報告書は、それらの未発表の調査の中より、市原市教育委員会が独自で実施した調査などを含め、一括して紹介するものです。

現地発掘調査は、昭和54年から昭和63年までの各時期にわたり、面積や内容も多種多様であります。今回は、市文化課が独自で調査した遺跡(海士有木遺跡を含め6件)、調査会を組織して調査した遺跡(山谷遺跡1件)、(財)市原市文化財センターが県費の不特定遺跡調査事業として、実施した遺跡(棒ケ谷遺跡1件)の計8件の遺跡調査について報告するものであります。

調査自体、小さな内容ですが調査成果は、市原市の歴史を考える上では、必要不可欠となる資料であります。

当報告書は、以上のように各種の遺跡調査についてまとめたものであり、研究者はもとより、広く市民の文化財に対する啓蒙と普及に活用されることを願うものであります。

文末になりましたが、今回の整理･報告に対しましてご指導･ご協力を賜わりました、千葉県教育庁文化課ならびに市原市教育委員会文化課及び関係諸機関に対し、心から謝意を申し上げる次第であります。

平成元年3月

財団法人　市原市文化財センター
理事長　星　野　一　郎

例　　言

1．本書は、千葉県市原市域において、開発に伴なう緊急調査のうち、市原市教育委員会が立合いで実施した調査、調査会を組織して実施した調査及び県費不特定遺跡調査事業で(財)市原市文化財センターが実施した調査で、計８ケ所の遺跡についての発掘調査報告書である。

2．現地発掘調査は、短期間が多く、時期、面積など多様であり、次のとおりである。

（1）棒ケ谷遺跡　（市原市高坂字棒ケ谷225－１地先他）

調　　査　　個人の宅地造成に伴う発掘調査で、工事に先行しての記録保存を実施した。

調査期間　　昭和62年10月８日～同年10月31日

調査面積　　約3,000㎡。担当者　木對和紀･田中清美

（2）永田遺跡　（市原市久保950地先）

調　　査　　個人の宅地造成に伴う発掘調査で、工事に先行しての記録保存を実施した。

調査期間　　昭和59年２月28日

調査面積　　約900㎡。担当者　田中清美、協力者　郷田良一

（3）海士有木遺跡　（市原市海士有木字上葉様1,589地先）

調　　査　　千葉県水道局による水道管埋設に伴う発掘調査で、掘削される部分を工事に先行しての記録保存を実施した。

調査期間　　昭和54年９月18日～同年９月19日

調査面積　　約34㎡。担当者　三森俊彦(当時　県教育庁文化課)･田中清美

（4）北旭台遺跡　（市原市磯ケ谷87－１地先他）

調　　査　　市原交通刑務所による農場造成に伴う発掘調査で、工事に先行して遺跡の範囲、状況を把握した。

調査期間　　昭和59年２月16日～同年３月10日

調査面積　　約13,000㎡。担当者　田中清美

（5）姉崎山谷遺跡　（市原市姉崎字山谷1,655－１地先他）

調　　査　　都ハウス株式会社による宅地造成に伴う発掘調査で、工事に先行しての記録保存を実施した。

調査期間　　昭和56年７月９日～同年９月30日

調査面積　　991㎡。担当者　平岡和夫･八角憲章

（6）喜多高沢遺跡　（市原市喜多字高沢413地先他）

調　　査　　三浦興業株式会社による土砂採取に伴い発見された遺跡の発掘調査で、工事に先行しての記録保存を実施した。

調査期間　　昭和58年12月12日

調査面積　　約12㎡。担当者　田中清美

（7）辰巳ケ原遺跡　（市原市大厩字辰巳ケ原1,790－61地先他）

調　　査　　相互住宅株式会社による宅地造成に伴う発掘調査で、工事に先行しての記録保存を実施した。

調査期間　　昭和58年8月3日～8月11日

調査面積　　1,125㎡。担当者　田中清美

（8）原遺跡　（市原市姉崎字原350－1地先）

調　　査　　野村不動産株式会社千葉支店の宅地造成に伴う一部分についての発掘調査で、工事に先行しての記録保存を実施した。

調査期間　　昭和58年4月18日

調査面積　　約55㎡。担当者　田中清美、協力者　近藤敏

3．整理作業は、平成元年2月1日～同年3月31日まで実施した。

4．本書の執筆は、永田遺跡は、田所真、他については、田中清美が担当した。また、遺物の実測の一部は、木對和紀氏の協力を得ている。

5．現地発掘調査から本書の作成にあたり、次の方々にご指導、ご協力を賜わり、記して感謝の意を表します。（順不同）

千葉県教育庁文化課、市原市教育委員会文化課、永田忠男氏、井沼望氏、千葉県水道局、市原交通刑務所、都ハウス株式会社、三浦興業株式会社、野村不動産千葉支店、相互住宅株式会社。

凡　　例

1．本書に使用した挿図の縮尺は、遺構が、1／30～1／300で、遺物が1／2～1／3で掲載した。

2．遺構挿図内の点線は、推定線、床面内の一点鎖線は、踏み固められた範囲である。

3．遺物挿図内の中心線で一点鎖線は、遺物を半転させたもの、点線は、保存状況の良い部分のみを表わしたものであり、他の点線は、推定線である。

4．挿図に使用したスクリーントーンは、遺構断面がNo.1801、炉跡がNo.320、焼土がNo.1209、粘土がNo.1207、灰がNo.310、遺物の割れ口がNo.1801、炭がNo.787、柱のあたり痕がNo.415を使用した。

5．遺物に註記した遺跡の略式記号は、棒ケ谷遺跡は、「セ65」、永田遺跡は、「N」、海士有木遺跡は、「海有」、北旭台遺跡は、「北旭」、喜多高沢遺跡は、「高沢」、原遺跡は、「原」、としている。

6．本書に掲載した地図は、国土地理院の5万分の1「千葉・姉崎」、2万5千分の1「蘇我・海士有木・五井・姉崎」、市原市地形図2千5百分の1各種を基本としている。

財団法人　市原市文化財センター組織表　　昭和63年度

役　員

理事長	星野一郎	市原市教育委員会教育長
副理事長	大野義規	〃　社会教育部長
常務理事	須田昇三	専任
理　事	滝口　宏	早稲田大学名誉教授
〃	寺村光晴	和洋女子大学教授
〃	海上信久	姉崎神社宮司
〃	根本正夫	市原市企画部長
〃	宮崎芳雄	〃　総務部長
〃	地引希壹	〃　都市部長
〃	安藤隆一	〃　総務部財政課長
〃	元吉末喜	〃　会計課長
〃	河野徳三	〃　教育委員会総務課長

職　員

庶務課

課　長	田丸萬富
主事補	大鐘光江
事務員	秋田晴美
〃	石渡あゆみ

調査課

課　長	石田広美
主　幹	加藤正信
主任調査研究員	宮本敬一
〃	田中清美
調査研究員	大村　直
〃	浅利幸一
〃	近藤　敏
〃	高橋康男
〃	田所　真
〃	木對和紀
〃	田中新史
調査研究員	半田堅三
事務員	高浦貞子
〃	田中裕子

本　文　目　次

序　　文
例　　言
凡　　例
(財)市原市文化財センター組織表
1．周辺の環境 …… 1
2．調査遺跡
（1）棒ケ谷遺跡 …… 3
（2）永田遺跡 …… 40
（3）海士有木遺跡 …… 47
（4）北旭台遺跡 …… 50
（5）姉崎山谷遺跡 …… 53
（6）喜多高沢遺跡 …… 59
（7）辰巳ケ原遺跡 …… 61
（8）原遺跡 …… 64
3．あとがきにかえて …… 67

挿　図　目　次

第1図　調査遺跡位置図
第2図　棒ケ谷遺跡周辺地形図
第3図　〃　調査地区全体図
第4図　第1号古墳実測図(付トレペー図1枚)
第5図　第1号古墳出土遺物実測図
第6図　第1号住居跡実測図
第7図　〃　出土遺物実測図(1)
第8図　〃　〃　(2)
第9図　第2号住居跡実測図
第10図　〃　出土遺物実測図
第11図　第3号住居跡実測図
第12図　〃　炉跡実測図
第13図　〃　出土遺物実測図(1)
第14図　〃　〃　(2)
第15図　第4号住居跡実測図
第16図　〃　出土遺物実測図
第17図　第5号住居跡実測図
第18図　〃　出土遺物実測図
第19図　第6号住居跡実測図
第20図　〃　炉跡実測図
第21図　〃　出土遺物実測図
第22図　第7号住居跡実測図
第23図　〃　出土遺物実測図(1)
第24図　〃　〃　(2)
第25図　第8号住居跡出土遺物実測図
第26図　〃　実測図
第27図　第9号住居跡実測図
第28図　〃　出土遺物実測図(1)
第29図　〃　〃　(2)
第30図　第10、11号住居跡実測図
第31図　第10号住居跡出土遺物実測図
第32図　第11号　〃

目　　次（挿図、図版、表）

挿図目次

第33図　第１号土坑実測図
第34図　〃　内ガラス玉出土状況図
第35図　〃　出土ガラス玉実測図
第36図　第２号土坑実測図
第37図　第２号、13号土坑出土遺物実測図
第38図　第３、５号土坑実測図
第39図　第４、６号　〃
第40図　第７号土坑実測図
第41図　第８、９号土坑実測図
第42図　第10、11、12号土坑実測図
第43図　第13、14、15号　〃
第44図　第16、17、18号　〃
第45図　第20号土坑出土遺物実測図
第46図　第19、20号土坑実測図
第47図　第21、22号　〃
第48図　溝状遺構全体図
第49図　第６、７、10号溝状遺構実測図
第50図　第９、10、11号　〃
第51図　〃　〃　出土遺物実測図
第52図　第６、７、10、11、12、13号溝状遺構実測図
第53図　第12号溝状遺構出土遺物実測図
第54図　その他の出土遺物実測図
第55図　永田遺跡周辺の地形と遺跡
第56図　永田遺跡遺構図
第57図　〃　出土遺物実測図
第58図　海士有木遺跡周辺地形図
第59図　〃　遺構実測図
第60図　〃　出土遺物実測図
第61図　北旭台遺跡調査地区位置図
第62図　調査状況図
第63図　トレンチ土層図
第64図　北旭台遺跡出土遺物実測図
第65図　姉崎山谷遺跡周辺図
第66図　各層の上下関係図
第67図　上下関係図
第68図　姉崎山谷遺跡出土花粉PLATE
第69図　高沢遺跡周辺地形図
第70図　高沢遺跡検出住居跡実測図
第71図　〃　〃　出土土製支脚実測図
第72図　辰巳ケ原遺跡調査地区地形図
第73図　〃　調査状況図
第74図　辰巳ケ原遺跡位置図
第75図　辰巳ケ原遺跡溝状遺構実測図
第76図　原遺跡周辺地形図
第77図　〃　検出溝状遺構実測図
第78図　〃　出土遺物実測図

写真図版

図版１　棒ケ谷遺跡(1)
２　〃　(2)
３　〃　(3)
４　〃　(4)
５　〃　(5)
６　〃　(6)
７　〃　(7)
８　〃　(8)
９　〃　(9)
10　〃　(10)
図版11　棒ケ谷遺跡(11)
12　〃　(12)
13　〃　(13)
14　永田遺跡　(1)
15　〃　(2)
16　〃　(3)
17　北旭台遺跡(1)
18　〃　(2)
19　〃　(3)
20　〃　(4)
21　原、高沢、海士有木遺跡

表目次

第１表　竪穴住居跡名称新旧対照表
第２表　棒ケ谷遺跡土坑表
第３表　第10、12号溝内土坑表
第４表　試料表
第５表　竪穴住居跡ピット計測表

1．周辺の環境

千葉県市原市は、房総半島の中央部から東京湾にいたる南東から北西方向にかけての細長い市域をもち、総面積は、約367km²である。南部地域は、いわゆる房総丘陵を構成し、大福山の285mを市内の最高地点として、丘陵と深い谷を形造っている。また、市域には、それらの丘陵部を源とする養老川と村田川の二大河川が流れ、上流では、川の蛇行によるメアンダーと呼ばれる水路変遷が認められ、(註1)また、下流では、広い沖積低地を造っている。特に東京湾に面した地域は、沖積地が大きく開き、村田川で幅1.5km、養老川で幅6.0kmの広大で肥沃な土地を提供している。さらに、中流域から下流域にかけての洪積台地は、比較的平坦で、その間を樹枝状の小谷が複雑に入り込む地形を呈している。このような環境下において、市原市では、先土器時代より、人々が生活し、多くの遺跡を残している。先土器時代では、瀬又(註2)や根田(註3)など市内のいくつかの遺跡よりユニットや石器が出土し、この頃より、当地に人々が活躍していたことが伺える。縄文時代に入ると、特に、大規模な貝塚が多く存在する。広範囲な調査が実施された西広貝塚(註4)や祇園原貝塚(註5)、馬蹄形や環状を呈する山倉、能満分区、諸久蔵、上高根、山倉天王、多竜台など貝塚は市内に約37基が(註6)確認されている。弥生時代では、環壕集落が南総中学や(註7)根田(註8)、潤井戸西山(註9)などで検出され、集落跡として、天神台(註10)、御林跡(註11)、唐崎台(註12)、菊間(註13)、大厩(註14)などが調査されている。古墳時代は、古墳に代表されるが、市内には現在までに約1500基(註15)が認められている。国造本紀等によると、上海上国造と菊麻国造の存在が知られ、姉崎古墳群を中心とする養老川流域が上海上、菊間古墳群を中心とする村田川流域が菊麻の支配地として考えられている。また、その中間域と思われる国分寺台周辺には、王賜銘鉄剣を出土した稲荷台1号墳(註16)などが存在し、数百基を越える古墳が調査されている。奈良、平安時代には、上総国分寺が設置され、僧・尼寺とも全国屈指の規模をもち、中心伽藍とともに付属施設も確認されている。(註17)さらに、上総国府(註18)、市原及び海上郡衙等の官衙についても、推定地として、その所在が考えられている。中世では、現在までに72ケ所の城郭(註19)が確認され、千葉氏、武田氏、里見氏、北条氏などの勢力による領地交替が著しい。近世になると、旗本による支配が続き、末期には、鶴牧、菊間などの小藩の存在がみられる。(註20)

(註1)「養老川」藤原文夫　昭和54年　『市原市史別巻』 市原市教育委員会

(註2)「瀬又北・瀬又南」横山仁　昭和59年　『千葉外房有料道路建設予定地内埋蔵文化財調査報告書』(財)千葉県文化財センター

(註3)「上総国分寺台遺跡発掘調査概報」 昭和53・54年　上総国分寺台遺跡調査団

(註4)「西広貝塚」米田耕之助他、昭和52年　上総国分寺台遺跡調査団。など。

(註5)「祇園原貝塚」米田耕之助他、昭和53年　『上総国分寺台発掘調査概要Ⅴ』。など。

(註6)「千葉県の貝塚」『千葉県所在貝塚遺跡分布調査報告書』 昭和58年　千葉県文化財保護協会

(註7)「千葉・南総中学遺跡」倉田芳郎、相京建史他　昭和53年　市原市教育委員会

(註8)「根田遺跡の調査」浅利幸一、昭和56年　『上総国分寺台発掘調査概報』 市原市教育委員会

(註9)「潤井戸西山遺跡」鈴木英啓、昭和59年　(財)市原市文化財センター

(註10)「天神台遺跡発掘調査概報」、對馬郁夫、谷島一馬他、昭和50年　市原市教育委員会

(註11) 註3と同じ。

(註12)「唐崎台」(略報)鈴木英啓、昭和54年　唐崎台遺跡発掘調査団

(註13)「市原市菊間遺跡」斉木勝他、昭和49年　(財)千葉県都市公社

(註14)「市原市大厩遺跡」三森俊彦他、昭和49年　(財)千葉県都市公社

(註15)「市原市埋蔵文化財分布地図－北部編－」　昭和63年　市原市教育委員会

「　　同　　上　　－南部編－」　昭和62年　市原市教育委員会

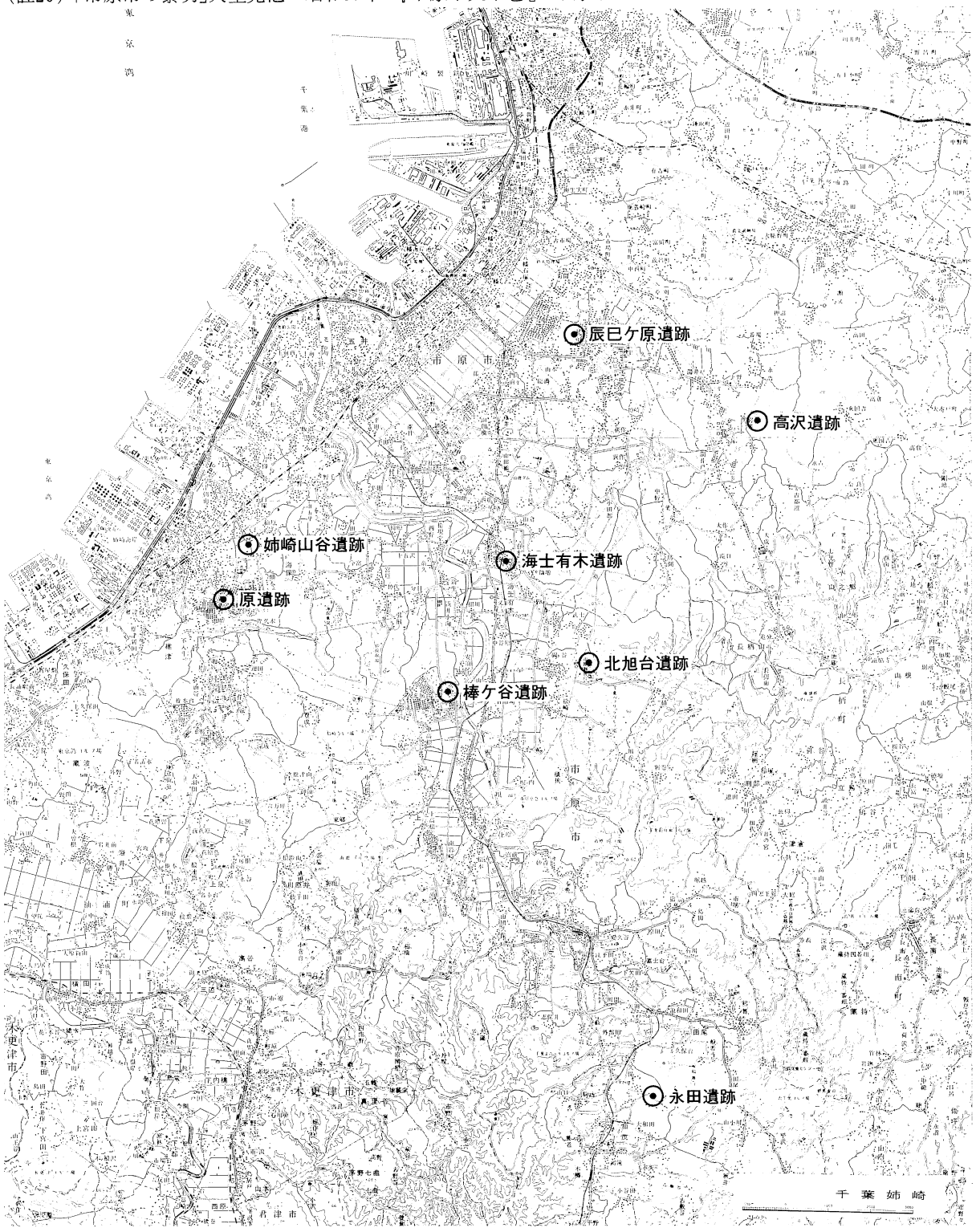
(註16)「千葉県市原市稲荷台1号墳発掘調査概報」田中新史他　昭和63年　市原市教育委員会

(註17)「上総国分寺台遺跡発掘調査概報」昭和55年。　上総国分寺台遺跡調査団。など。

(註18)「上総国府の所在地について」昭和51年。『古代62号』　須田　勉など。

(註19)「日本城郭大系6　千葉・神奈川」　昭和55年　落合忠一他　新人物往来社

(註20)「市原市の黎明」大室晃他　昭和57年　『市原市史下巻』　市原市



第1図　調査遺跡位置図

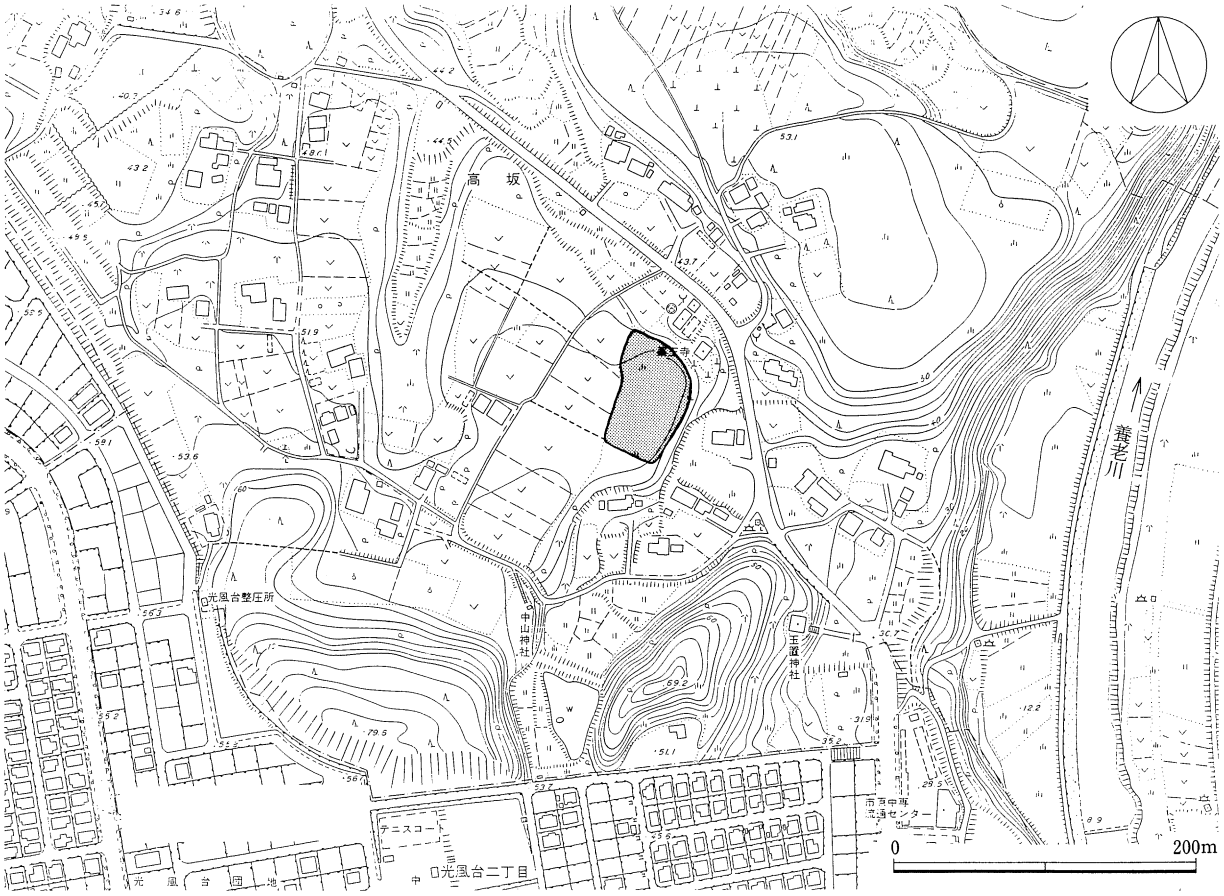
2．調査遺跡

(1)棒ケ谷遺跡

a．遺跡の位置と周辺の環境

棒ケ谷遺跡は、市原市高坂字棒ケ谷225－1地先に所在する。当地は、房総半島の中央部から東京湾に注ぐ養老川の中流域左岸台地上に立地し、東京湾の旧海岸線からは、約10km入った地点である。当台地は、西側、北側、東側の三方に小谷が入り、北側に突出する形態を示し、標高は、約50mである。平坦部は、北側に向って全体的にわずかに下降し、南側隣接地は、段差約30mをもって一段高い尾根が存在し、東側に養老川の沖積地を望むことができるが、光風台団地の宅地造成により、南側は削除されている。周辺には、小谷を挟んで北西側に、縄文時代中期を主とする地点貝塚の瓜ケ岱貝塚(註1)、南約2.2kmに養老川流域の最奥部に所在する上高根貝塚(註2)、北北東約300mの養老川沖積地を望む台地縁辺部に、円墳30基等を含む安須古墳群(註3)、南西約1kmに、前方後円墳1基を含む中高根(金比羅)古墳群(註4)が存在する。また、その西側には、方形周溝状遺構28基等を検出した外迎山遺跡等(註5)もみられる。さらに、北東側の小谷を隔てた台地上には、高坂砦といわれる中世頃の城郭跡が存在する。(註6)

(註1)「千葉県の貝塚」昭和58年『千葉県所在貝塚遺跡分布調査報告書』 千葉県文化財保護協会
(註2)「上高根貝塚」武田宗久、藤原文夫、南総郷土史研究会会報
(註3)「市原市埋蔵文化財分布図－北部編－」昭和63年　市原市教育委員会
(註4)「煙滅しつつある中高根古墳群を悼む」田中新史「伊知波良2号」昭和54年
(註5)「外迎山遺跡」木對和紀　昭和61年『市原市文化財センター年報昭和60年度』
(註6)「高坂砦」『日本城郭大系6　千葉・神奈川』 昭和55年　新人物往来社



第2図　棒ケ谷遺跡周辺地形図　　※スクリーントーン部分が調査範囲

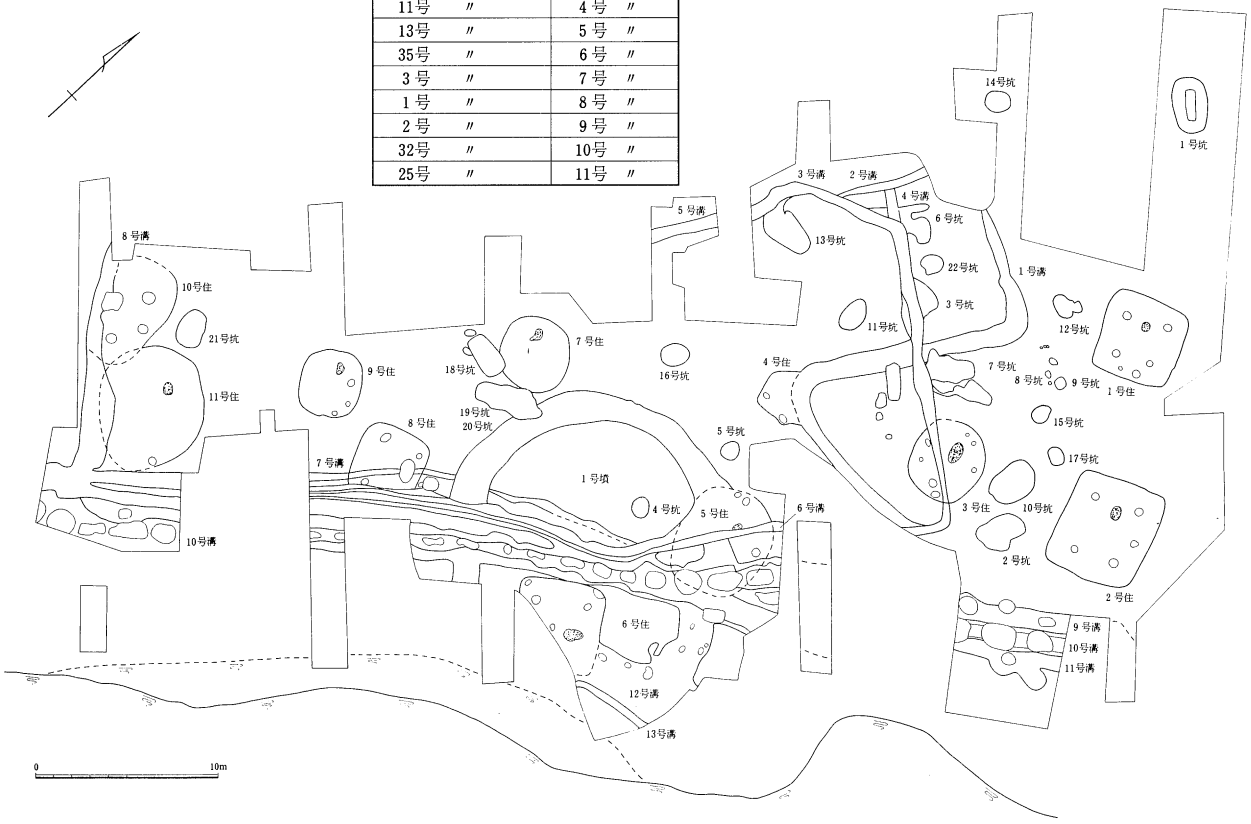
b. 調査内容

発掘調査は、個人による宅地造成に伴ない、昭和62年10月８日～同年10月31日まで実施した。調査地域は、棒ケ谷遺跡の北東端部であり、以前は、畑地に利用されていたが、調査前には、小竹を主とする山林であった。また、東側は、既に土取りにより削除され、北側は、薬王寺という小寺院が有り、約３m程削平され、境内には、室町頃の五輪塔や江戸中期頃の墓石が存在する。調査は、10m間隔に、幅２m長さ約24～43mのトレンチをN－45°－Wの方向に７本設定した後に、本調査に移行した。本調査範囲は、約3,000㎡で確認調査と同様であるが、地形状況などの制約により、全域の調査は、出来なかった。遺構番号については、調査順に番号で統一し、本書の名称とは、別表(第１表、第２表)のとおり違っている。

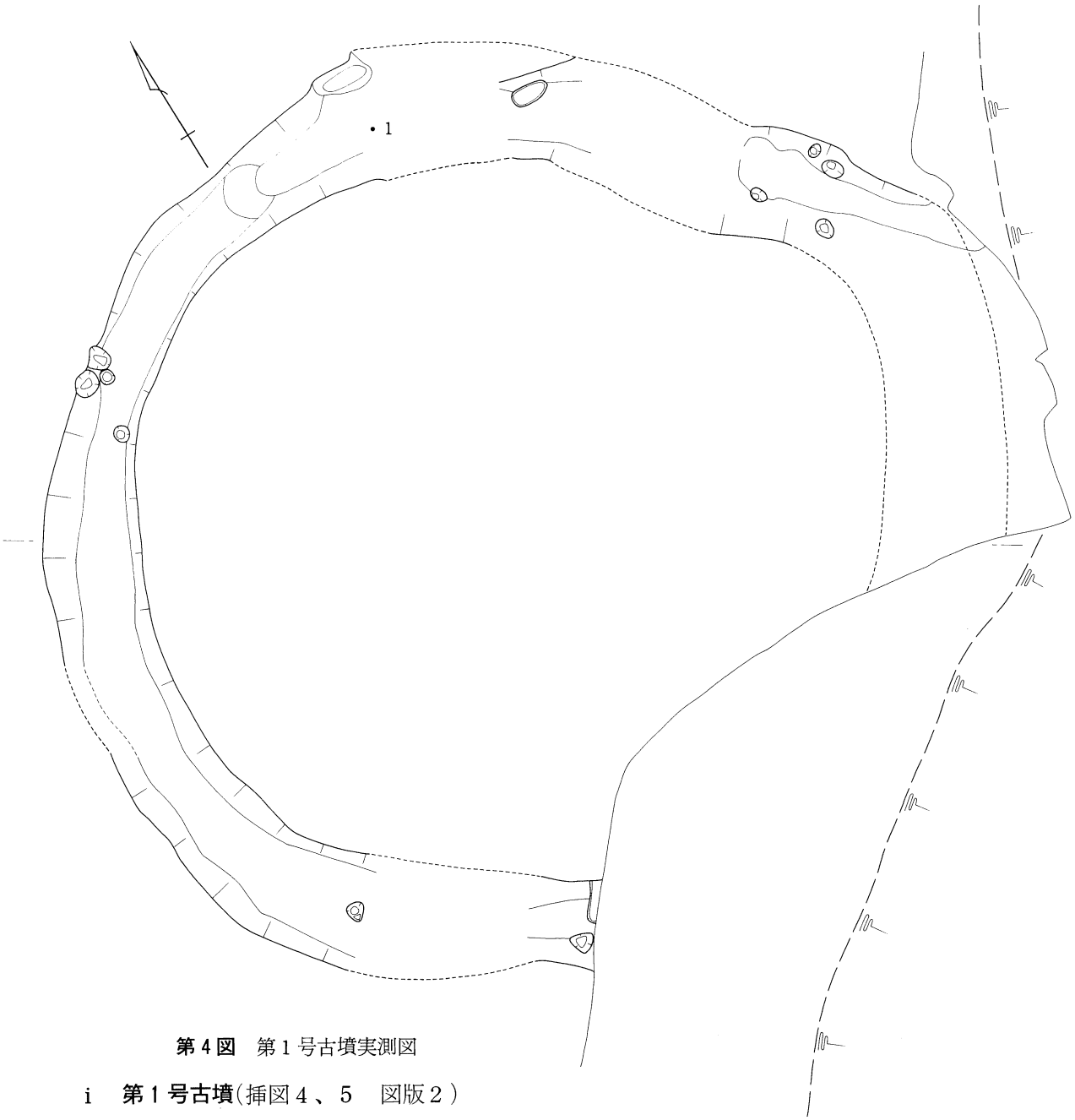
検出した遺構は、下図のとおり古墳(円墳)１基、竪穴住居跡11軒(弥生後期～古墳前期)、土坑22基(縄文後期～現代)、溝13条(中世～現代)である。

第１表　竪穴住居跡名称新旧対照表

現地調査時	本　書
19号遺構(住居跡)	１号住居跡
20号　〃	２号　〃
30号　〃	３号　〃
11号　〃	４号　〃
13号　〃	５号　〃
35号　〃	６号　〃
３号　〃	７号　〃
１号　〃	８号　〃
２号　〃	９号　〃
32号　〃	10号　〃
25号　〃	11号　〃



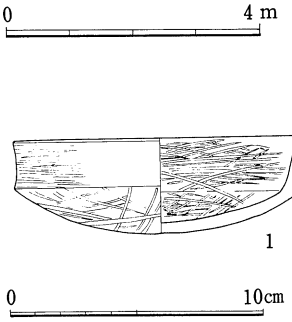
第３図　棒ケ谷遺跡調査全体図



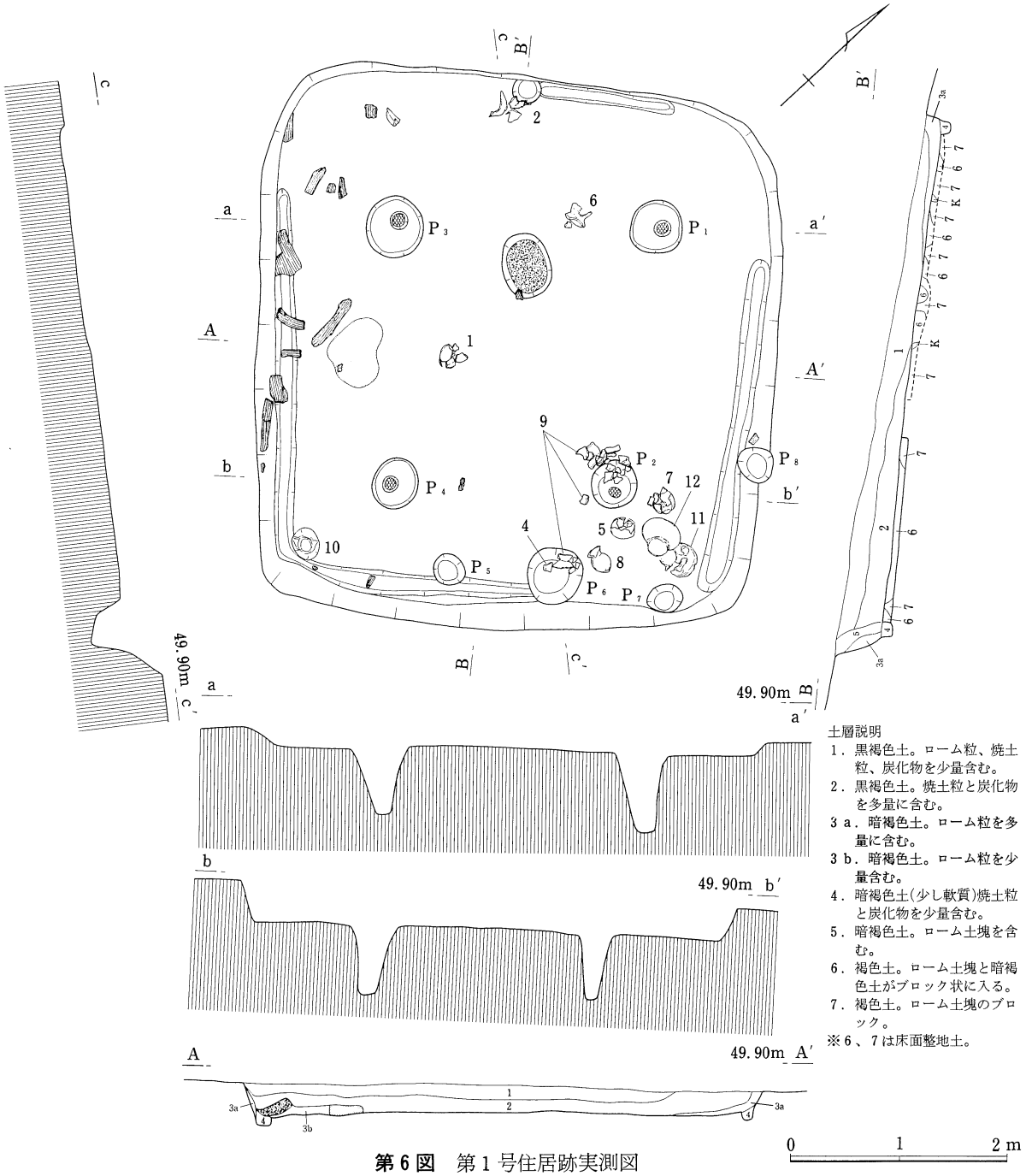
第４図　第１号古墳実測図

ｉ　**第１号古墳**(挿図４、５　図版２)

調査地区の中央南側に位置し、東側は周壕が第５号住居跡を切っている。また、東西方向に第６、７、９、10号溝が各々切っている。南側は、台地がオーバーハングしているため未調査である。したがって良好な残存は、西側のみである。墳丘は検出されず、円形の周壕のみ検出した。規模は、周壕外径18.0m(内径14m)。壕は、浅く最深35cmを測る。主体部は、検出されていない。出土遺物は、No.１土師器坏が北側の壕内覆土中より検出した。形体は、須恵器蓋の模倣坏で、口径は、11.6cm、器高3.7cm。外面の口縁部が横ナデ以外すべてヘラミガキがなされる。茶褐色を呈し、両面に赤彩の痕跡を残す。焼成良好、胎土は緻密である。



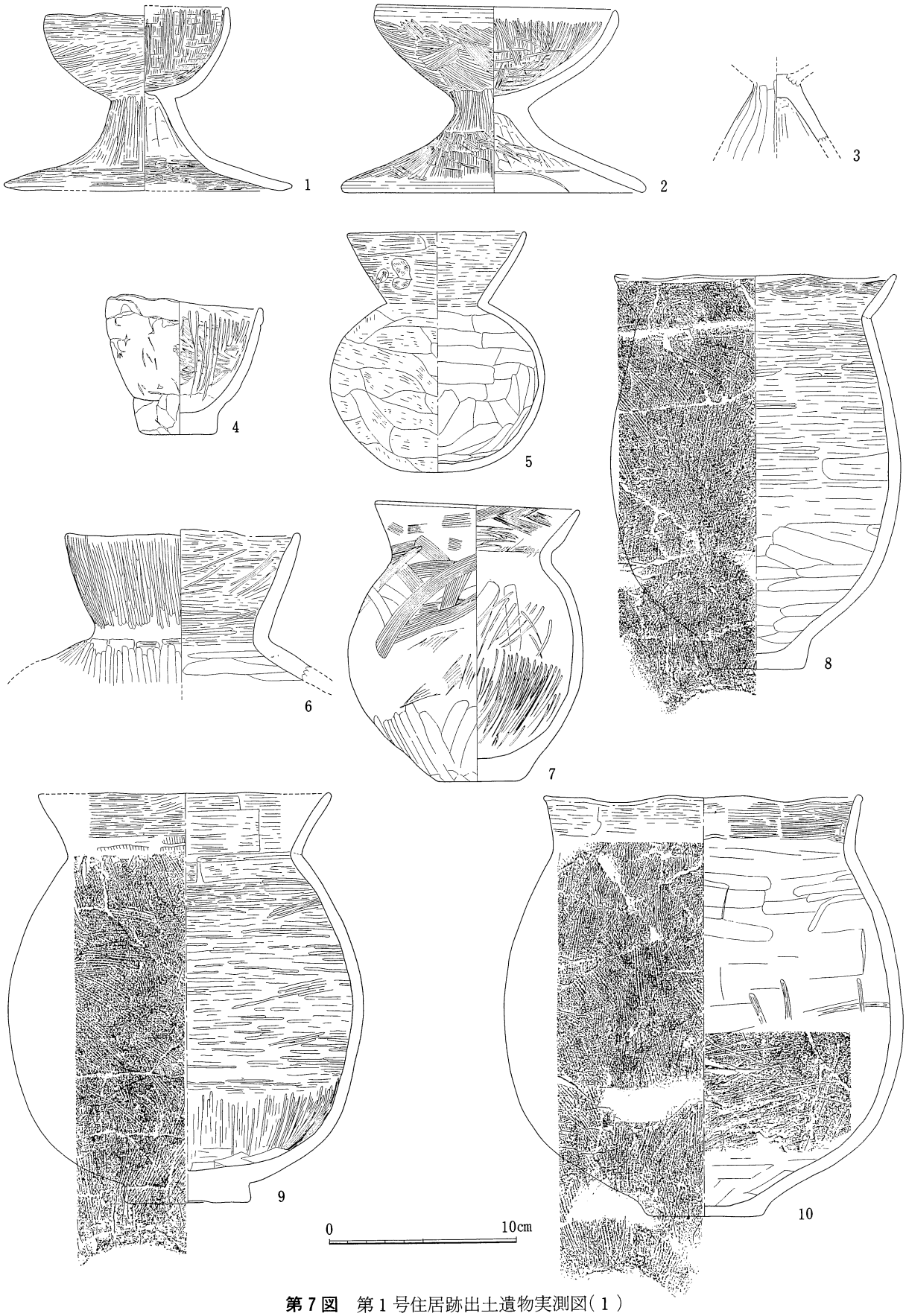
第５図　第１号古墳出土遺物実測図



第6図　第1号住居跡実測図

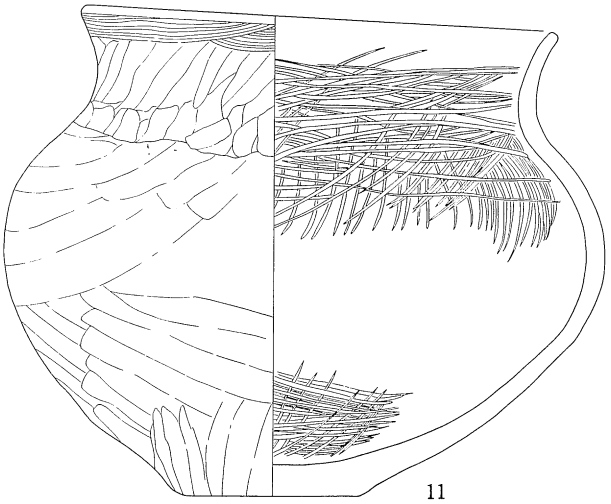
ii　**竪穴住居跡、第1号住居跡**(挿図6、7、8　図版3、6)

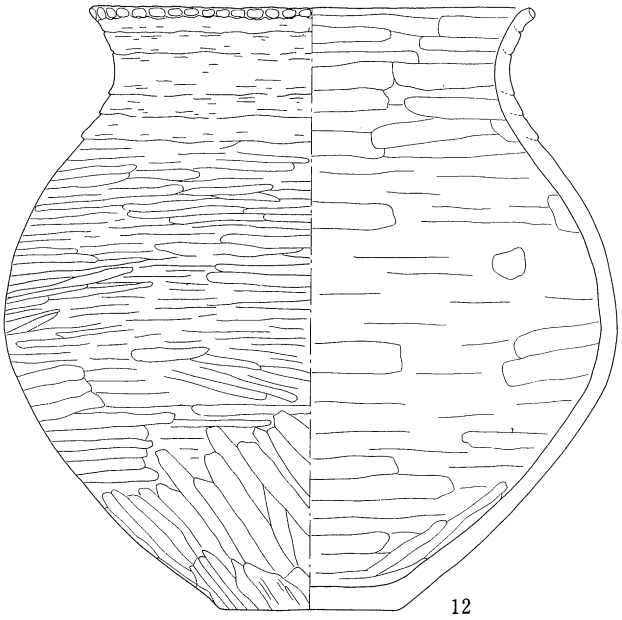
調査地区の北側に位置し、第2号住居跡より北西へ約5.5m離れて所在する。形体は、少し胴張りの隅円方形で、規模は、長軸5.12m、短軸4.80m。主軸方位は、長軸を測り、N－25°－Wを示す。竪穴の深さは、最深部で40cmである。床面は、平坦で、ピットが8本検出され、P_1～P_4は、主柱穴である。P_6は、貯蔵穴とみられる。炉跡は、北側床面中央に存在する。壁溝は、部分的に所在する。竪穴の覆土No.2は焼土や炭化物を多量に含み、火災の可能性が有る。出土遺物は、床面の南東側、南側、北西側より主に検出された。No.1は、高坏で、脚部が60%、坏部が10%の残存である。脚部は、大きく張り出し、坏部は、小さな椀状を呈する。口径は、推定で9.7cm、脚裾部径15.2cm、器高9.8cmを計る。外面の坏口縁部は、横ナデ、体部は、横方向のヘラミガキ、脚部は、上部が縦方向、裾部が



第7図　第1号住居跡出土遺物実測図(1)

横方向の丁寧なヘラミガキ。内面は、坏部が横及び縦方向のヘラミガキ。脚部は、上部がヘラケズリダシ、裾部が横方向のヘラミガキがなされる。胎土は緻密。焼成はやや不良。色調は、両面とも淡茶褐色、一部黒褐色を呈する。No.2も高坏で、大きく開いた脚部をもち、坏部は、やや大きめで口縁部は、わずかに内傾する。口径12.5cm、脚裾部径15.9cm、器高9.9cmを計る。外面の坏口縁部は、横ナデ、体部は、横及び斜め方向のヘラミガキ、脚部は、縦方向のヘラミガキ、裾部は、横ナデ、内面は、坏部が縦方向のヘラミガキ、脚部は、ヘラケズリダシの後、一部がヘラミガキ、胎土は緻密で、焼成は良好、両面とも赤彩がなされる。No.3は、高坏の脚部で、外側に張り出す形体である。外面は、縦方向のヘラケズリ、内面は、ヘラケズリダシである。胎土は緻密。色調は両面褐色である。No.4は、小型の椀で、荒い作りである。両面に粘土紐接合痕を少し残す。外面は、指による雑な整形、内面には、ヘラミガキがなされている。口径8.3cm、底径4.1cm、器高7.1cmを計る。胎土に白色微粒子を含み、また、茶褐色粒も多く存在する。焼成は良好、色調は、茶褐色。No.5は、坩で、底部は丸底。球状の体部をもち、口縁部は、大きくくの字状に外反する。口径9.5cm、体部最大径11.3cm、器高12.8cmを計る。外面は、口縁部が横ナデ、一部に指頭痕がみられる。体部は、横方向のヘラケズリ、内面は、口縁部が横ナデ、体部がヘラナデである。No.6は、壺口縁部片で、胴部は大きな球状で、口縁部は小さく直線的に外反するとみられる。口径12.5cm、外面は、口縁部が縦方向のヘラミガキ、胴部は、縦方向のやや幅広いヘラミガキ、内面は、口縁部が横方向のヘラミガキ、胴部は、横方向のヘラナデがなされる。色調は褐色、胎土は緻密、60%の残存。No.7は、小型の壺で、口径10.9cm、体部最大径12.4cm、底径4.2cm、器高14.7cmを計る。外面の口縁部から体部及び内面の口縁部にかけて刷毛目調整がみられる。外面の体部胴下半部は縦方向のヘラケズリ、内面の体部には、縦方向のヘラナデの後、ヘラミガキがなされる。胎土に小礫や微砂粒を多く含み、焼成は良好、色調は、淡褐色を呈する。No.8は、小型の甕で、底部はやや突出する。胴部は少し長く、最大径を下半部にもつ。口縁部は、くの字状に外反する。口径15.0cm、胴部最大径15.4cm、底径5.2cm、器高20.8cmを計る。外面は、刷毛目調整、内面は、口縁部が刷毛目調整、胴上部が横方向のヘラミガ





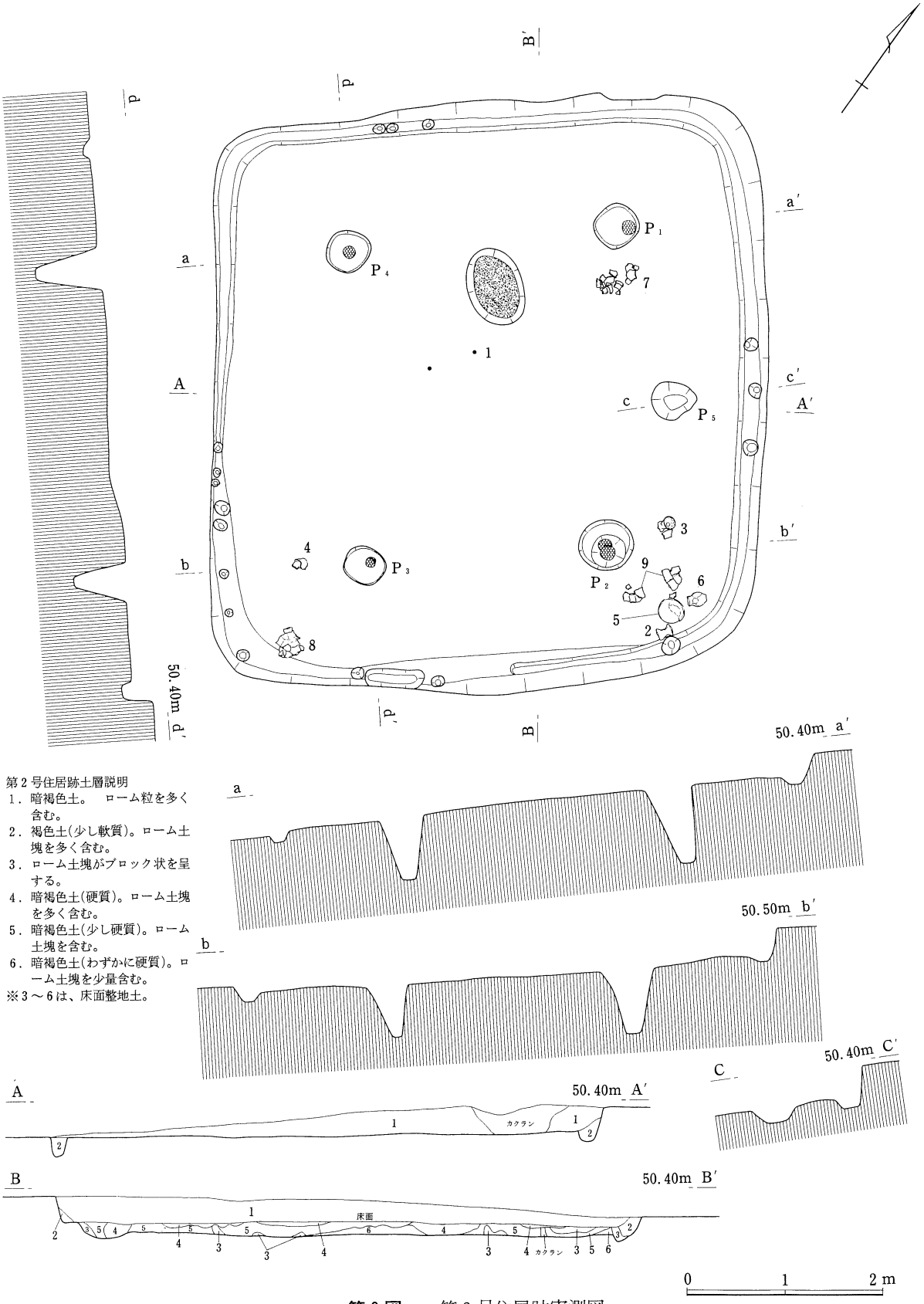
0　10cm

第8図　第1号住居跡出土遺物実測図(2)

キ、下部が横方向のヘラナデ。80%の残存で、胎土に砂粒を含む。両面黒褐色。No.9も甕で、底部は、突出し、球状の胴部で、やや下半部が張っている。口径15.6cm、底径6.6cm、胴部最大径18.9cm、器高21.8cmを計る。外面は、口縁部が横ナデ、胴部は、刷毛目調整、内面の口縁部及び底部は、ヘラナデ、胴部は、横及び縦方向のヘラミガキ。80%の残存で、胎土に砂粒を含む。両面茶褐色を呈する。No.10も甕で、底部は、やや小さく、胴部は、球状でやや下半が張っている。口縁部は、少し直立ぎみである。口径17.0cm、胴部最大径21.1cm、底径6.1cm、器高22.2cm。外面は、口縁部が、横ナデ、胴部は、刷毛目調整、内面の口縁部は、横方向の刷毛目調整、胴部は、ヘラと指頭によるナデ調整である。胎土に2mmくらいの小礫を含む。色調は、茶褐色。No.11も甕で、球状の胴部をもち、口縁部は、ゆるやかに外反する。口径18.9cm、胴部最大径23.7cm、底径7.0cm、器高18.9cmを計る。外面は、口縁部が横ナデ、胴部は、各方向のヘラケズリ、内面の口縁部は、横ナデ、胴部は、ヘラミガキがなされる。No.12も甕で、やや長胴で張っている。口縁部には、粘土紐接合痕を5段残し、口唇部には、押圧が加えられ、波状口縁を呈する。口径17.6cm、胴部最大径24.2cm、底径7.1cm、器高23.8cmを計る。10～20%欠損。色調は、黒褐色を呈する。胎土は緻密で、焼成は、普通である。

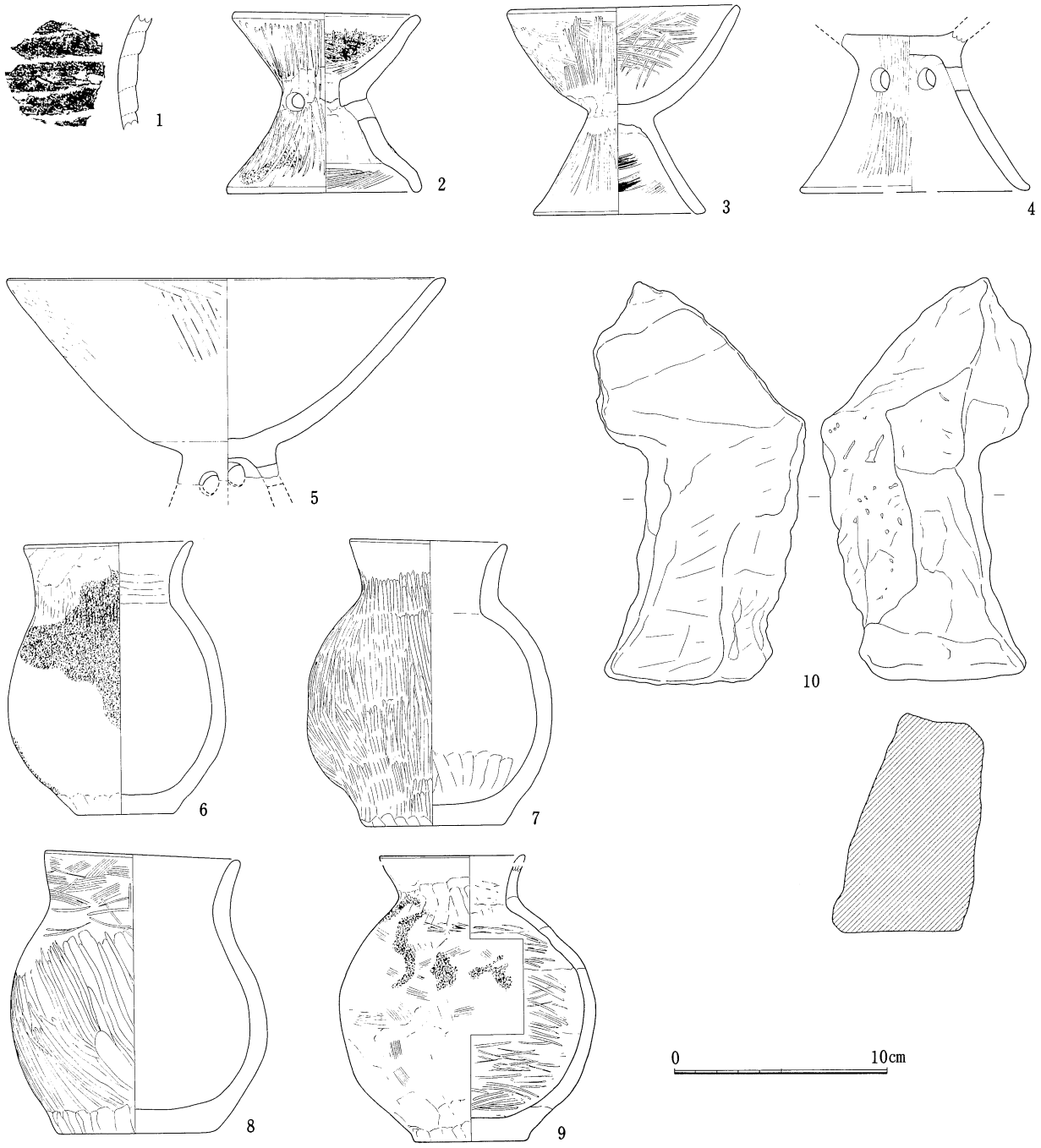
第2号住居跡(挿図9、10　図版3、7)

調査地区の北東側に位置し、第3号住居跡より北東に約5m離れて所在する。形体は、胴張りの隅円方形を呈する。長軸6.08m、短軸5.66m、深さは最大で28cmを測る。主軸方位は、長軸を測り、N－20°－Wを示す。床面は、比較的平坦で、ピットは、5本検出され、P_1～P_4は、主柱穴、P_6は、東側床面中央付近に所在し、出入口施設用ピットと考えられる。壁溝は、全周する。炉は、北側床面中央に位置する。出土遺物は、炉の南側や南西側、南東隅に集中する。No.1は、甕の口縁部で、粘土紐接合痕を5段残している。No.2は、器台で、脚と受部は、同様な形体で、椀状にちかい。脚上部には、3ケ所の穿孔がみられる。口径8.8cm、脚裾部径9.1cm、器高8.4cmを計る。外面は、受部口縁部が横ナデ、体部は縦方向のヘラミガキ、受部と脚部の接合部は、縦方向の短かいヘラケズリ、脚部は縦方向のヘラミガキ、脚裾部は横ナデである。内面の受部口縁部は、横ナデ、体部は、ヘラミガキ、脚部は、ヘラケズリダシ、裾部は、刷毛目調整である。内外面の一部に煤が付着し、また赤彩が認められる。No.3は、高坏で、やや小型、脚部は、ラッパ状で、坏部は椀状を呈する。口径10.6cm、脚裾部径8.1cm、器高9.5cmを計る。外面は、坏口縁部が横ナデ、体部は、ヘラミガキ、接合部は、縦方向の短かいヘラケズリ、脚部は、縦方向のヘラミガキ、裾部は、横ナデ。内面は、坏部がヘラミガキ、脚部は、ヘラケズリダシの後、刷毛目調整。焼成は良好。胎土は緻密だが黒色粒を含む。色調は茶褐色を呈する。No.4は、高坏の脚部片とみられる。脚上部には、3ケ所の穿孔がみられる。外面は、縦方向のヘラミガキ、内面は、ヘラケズリダシの後、ヘラナデ、裾部径10.7cmを計る。胎土に白色粒を含み、焼成は良好、色調は、茶褐色を呈する。No.5は、高坏の坏部で、坏下部は、わずかに稜をもち、体部は丸みをもって大きく開く。外面は、刷毛目調整の後、ミガキにちかいヘラナデがなされる。内面は、ヘラミガキ、脚部には、3ケ所に穿孔が認められる。胎土に茶褐色粒を含み、焼成は良好である。No.6～No.9は坩で、いずれもやや小型、体部に比して、口縁部は小さく短かい。No.6は、やや長く、口径7.9cm、体部最大径10.2cm、底径4.5cm、器高12.7cmを計る。外面の口縁部は、指頭による調整、体部は、縦方向のヘラミガキ、底部周辺は、縦方向のヘラケズリ、内面の口縁部は、横方向のヘラケズリ後、ヘラミガキ、体部は、ヘラナデ、外面の一部に煤付着、両面とも剥離が多い。胎土には、



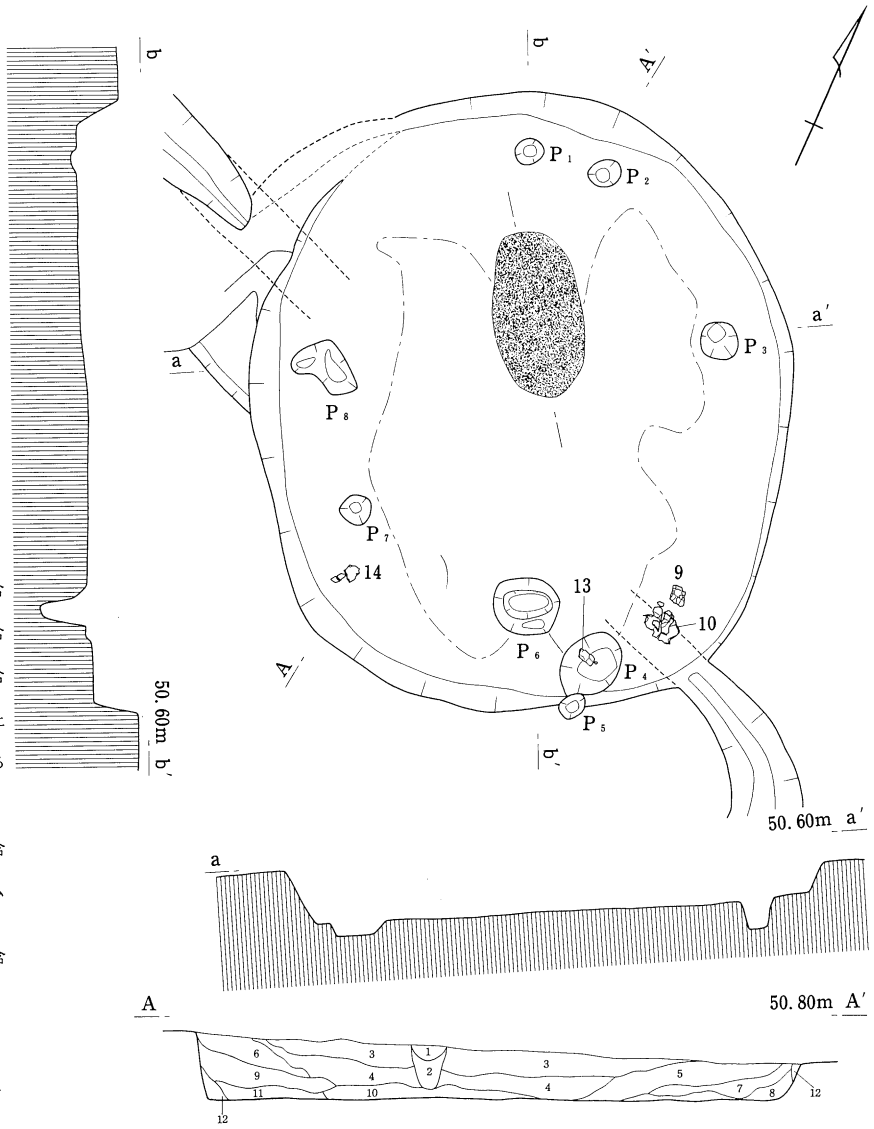
第2号住居跡土層説明
1．暗褐色土。　ローム粒を多く含む。
2．褐色土(少し軟質)。ローム土塊を多く含む。
3．ローム土塊がブロック状を呈する。
4．暗褐色土(硬質)。ローム土塊を多く含む。
5．暗褐色土(少し硬質)。ローム土塊を含む。
6．暗褐色土(わずかに硬質)。ローム土塊を少量含む。
※3～6は、床面整地土。

第9図　第2号住居跡実測図



第10図　第２号住居跡出土遺物実測図

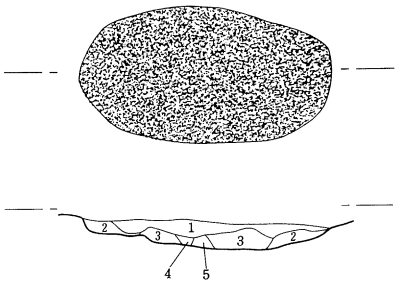
２～３㎜の小礫を含む。焼成は良好。No.７は、体部がやや丸みを帯び、少し厚手、口径7.3cm、底径6.4cm、器高13.5cmを計る。外面の口縁部は、横ナデ、体部は縦方向のヘラミガキ、底部周辺は、縦方向のヘラケズリ、内面の底部は、ヘラナデ、他は剝離が多く不明、胎土は緻密である。No.８は、底部が広く、厚手である。口径9.0cm、体部最大径11.4cm、底径7.5cm、器高13.3cm。外面の口縁部は、刷毛目調整の後、ナデツケ、体部は、縦方向の細いヘラケズリ、頸部にヘラミガキ有り。底部周辺は、ヘラケズリ。内面は、口縁部がヘラミガキ後、ナデ、体部は剝離が激しい。胎土に白色粒が少し入る。No.９は、体部が最も球状で薄手である。口径6.8cm、体部最大径12.0cm、底径5.2cm、器高13.4cmを計



第3号住居跡土層説明
1．暗褐色土(軟質)。ローム粒を少量含む。
2．暗褐色土(軟質)。ローム粒を多く含む。
3．黒褐色土。薄く軟質の褐色土塊を含む。ローム粒を含む。
4．黒褐色土(暗い)。薄く軟質の褐色土塊を多く含む。ローム粒を含む。
5．暗褐色土。4に似るが、全体に明るい。
6．黒褐色土。ローム土塊を含む。
7．黒褐色土。薄いローム土塊を含む。
8．黒褐色土。薄いローム土塊を多く含む。
9．黒褐色土。薄いローム土塊とローム粒を含む。
10．黒褐色土。ローム粒を含む。
11．黒褐色土(少し硬い)。ローム粒を含む。
12．暗褐色土。ローム粒を多く含む。

0 1 2 m

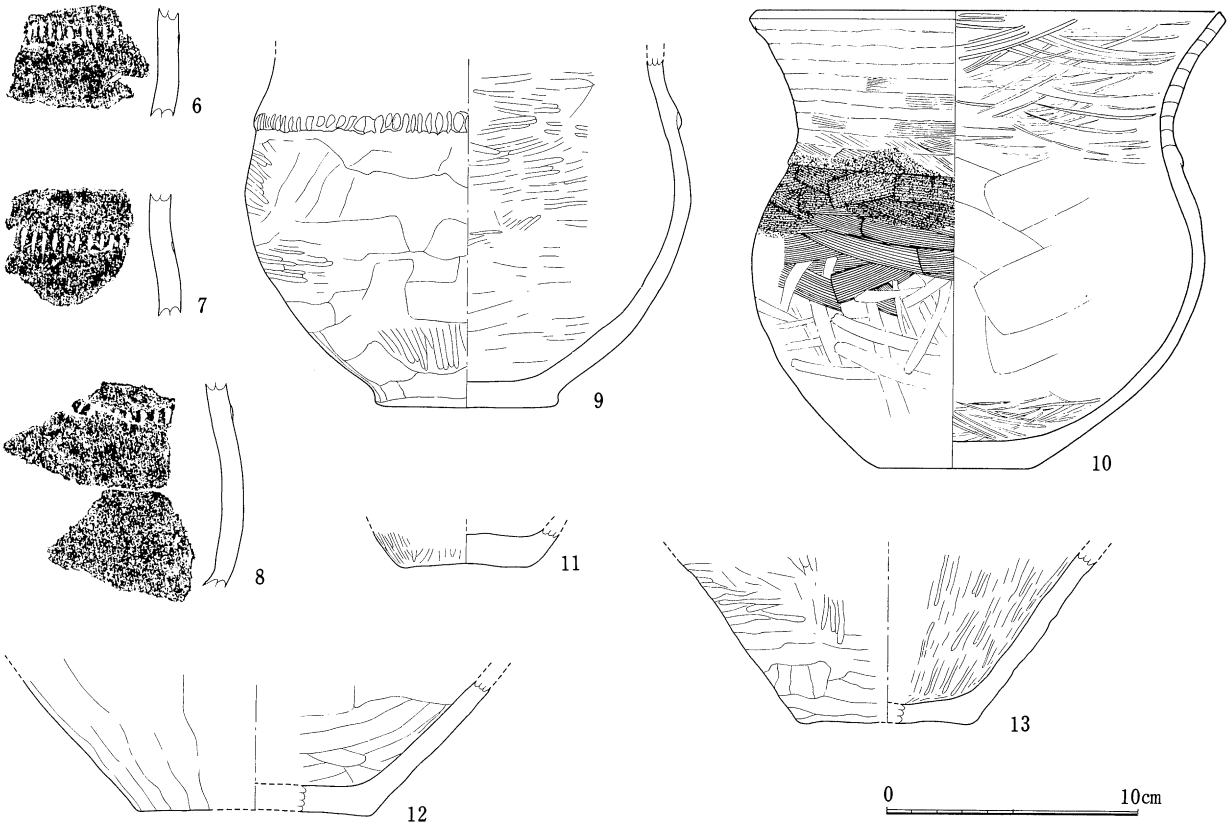
第11図　第3号住居跡実測図



第3号住居跡炉跡土層説明
1．焼土(暗赤色)。ローム粒を多く含む。
2．焼土(暗赤褐色)。ローム土を薄く含む。
3．焼土(暗赤褐色)。硬質
4．暗赤褐色土(軟質)。焼土粒を含む。
5．ローム土塊(軟質で少し暗い)。

第12図　第3号住居跡炉跡実測図

第13図　第3号住居跡出土遺物実測図(1)



第14図　第３号住居跡出土遺物実測図（２）

る。外面の口縁部は、横ナデ、体部は刷毛目調整の後、ヘラナデ、内面は、粘土接合痕を一本残し、口縁部は横ナデ、体部は横方向のヘラミガキ。外面の一部に煤が付着。胎土に５㎜大の小礫を含む。No.10は、砂岩で淡褐色を呈し、軟質、かなり摩耗している。重量915g。使用痕はない。

第３号住居跡（挿図11、12、13、14　図版３、４、８）

調査地区の北東側に位置し、第４号住居跡より約６ｍ東に所在する。形体は、不整の長円形で、規模は、長径4.88m、短径4.30m、深さは最大で23cmを測る。主軸方位は、長径を測り、N－11°－Wを示す。床面は平坦で、踏み固められた面が、北側を除いて、床面中央に広く認められる。ピットは８本検出したが、主柱穴は不明。P_4は、貯蔵穴、P_6は出入口施設用ピットと各々考えている。炉は、大きく北側床面中央に長円形を呈して存在する。第３号溝が西～東に竪穴の覆土を切っている。壁溝は、認められない。出土遺物は、南側床面付近に多く検出した。No.１は、壺口縁部片とみられ、S字状結節文を横位に３条と羽状縄文が組み合わされている。No.２、５は、壺胴部片で、沈線により単節の斜縄文を区画し、連続山形文を構成する。No.３、４は、菱形文、No.６、７、８は、甕の胴上部片で刻目をもった段が有る。No.９も甕胴下半部で、上半部に刻目をもった段をもち、胴部は球状を呈する。胴部最大径は、17.6cm、底径7.2cm、外面の胴部は、ヘラナデの後、指ナデ、一部ヘラミガキ、内面は、胴上部がヘラミガキ、胴下半部は、ヘラナデの後、ユビナデ?。剝離多し。１/２の残存。胎土は、緻密。No.10も甕で、胴部は球状、口縁部は広く大きく開く、口縁部に粘土紐接合痕を残す。胴上半部は、刷毛目調整、胴下部はヘラミガキ、内面の底部と口縁部は、ヘラミガキ、胴部はヘラナデ。No.11は、壺底部片とみられ、外面黒褐色、内面茶褐色を呈し、底部径5.1cm、両面とも縦方向のヘラミガキがなされる。No.12は、甕底部片か、底部径9.3cm、外面は、縦方向のヘラケズリ後、ユビナデ、内面もユビナデ

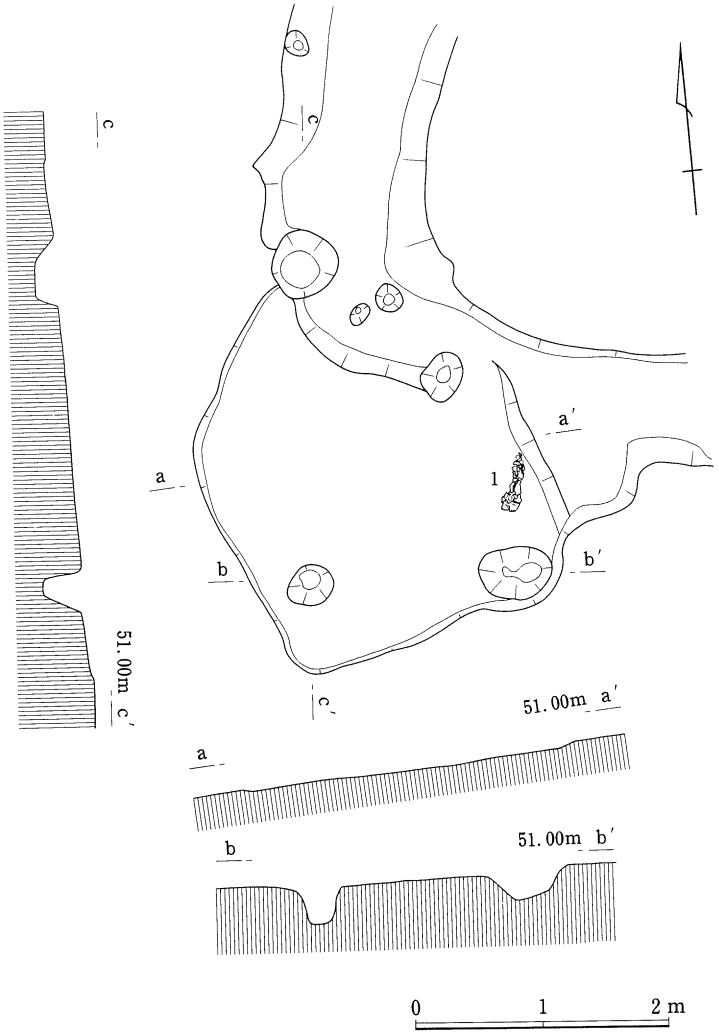
である。1／4の残存。No.13も壺底部片とみられ、底部径6.8cm、外面は、胴下半部上位がヘラミガキ、下位がユビナデ、内面はヘラミガキがなされる。1／6の残存である。胎土は、緻密。

第4号住居跡(挿図15、16　図版4、8)

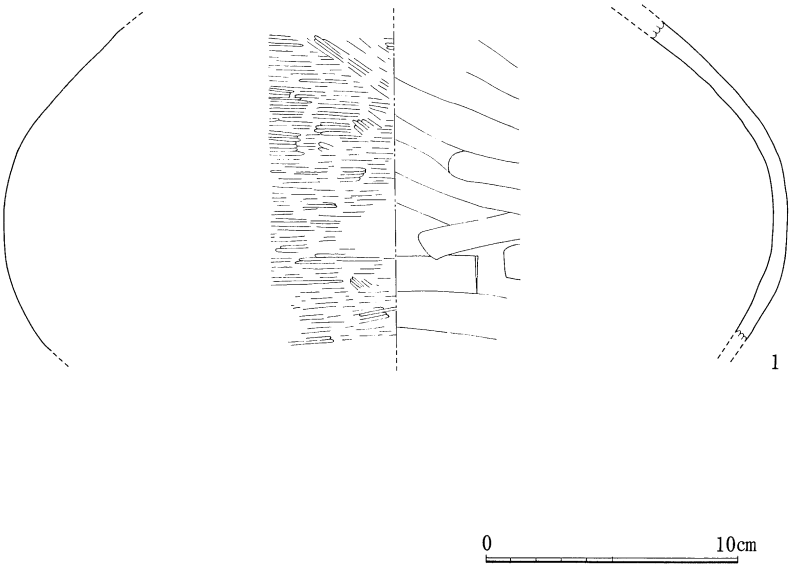
調査地区の中央やや北側に位置し、第5号住居跡より北西に約4.0m、第3号住居跡より西に約8m離れて所在する。東側は、第1号溝に切られている。当遺構は、検出状況が悪く、踏み固められた面やピット、出土遺物などから住居跡とした。形体は、不明。伴なうとみられるピットが6本存在するが、関連性などは不明。部分的に踏み固められた面が存在し、南西側には、竪穴壁の立ち上がりと思われる部分も所在する。炉は検出していない。床面の深さは、最深部で6cmを測る。出土遺物は、No.1の甕を1点検出した。大型で大きく張った胴部をもち、薄手、胴部最大径は40cmを計る。外面の胴部は、横方向の丁寧なヘラミガキ、内面は、ヘラナデの後、ユビナデが横及び斜め方向になされる。1／3程度の残存である。

第5号住居跡(挿図17、18　図版4、8)

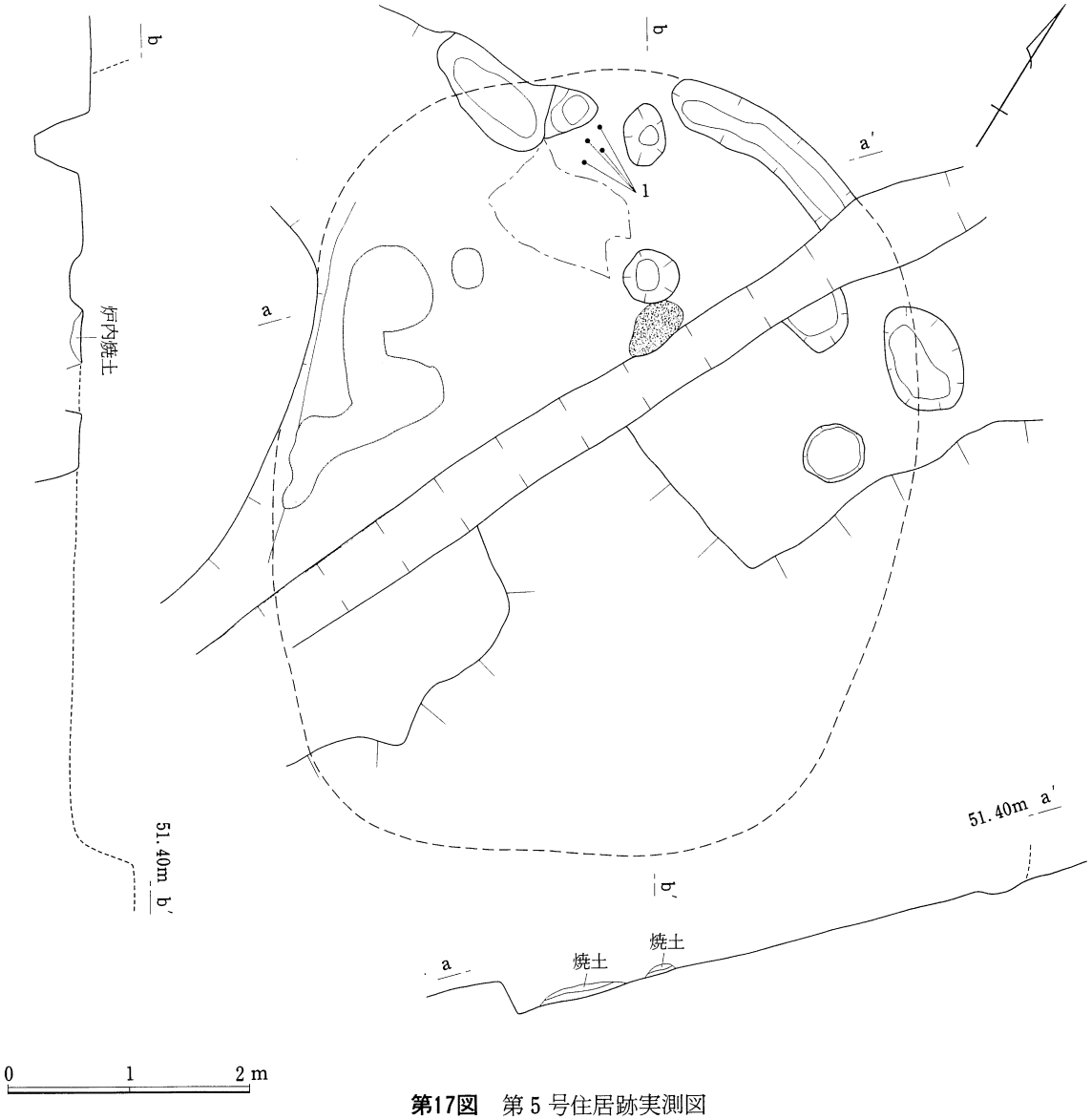
調査地区の中央付近、やや南寄りに位置し、第1号古墳の周壕により、床面中央部が、また、第6、7号溝により南～北に、さらに南側は第9号溝によって各々切られている。したがって竪穴全体のプランは、不確実な



第15図　第4号住居跡実測図

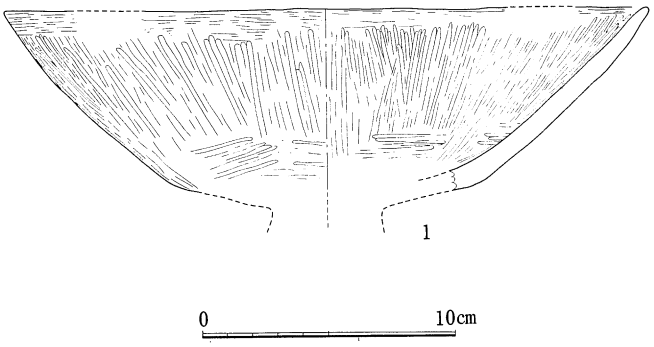


第16図　第4号住居跡出土遺物実測図

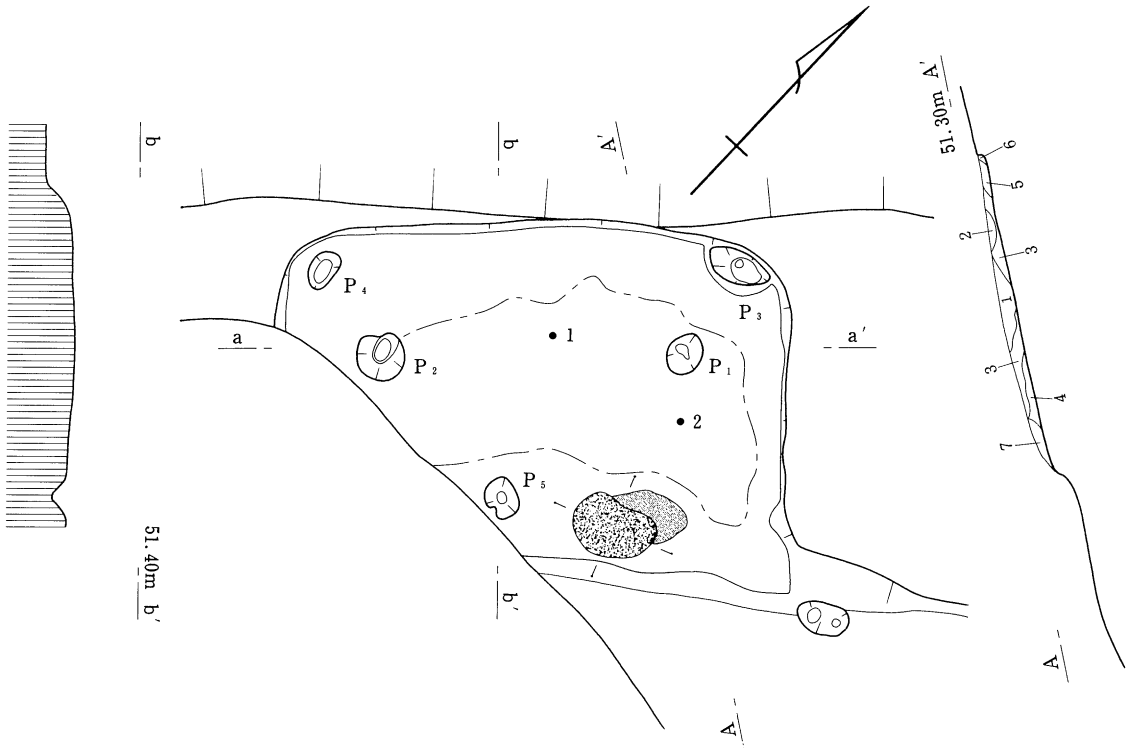


第17図　第５号住居跡実測図

点が多い。形体は、不整の長円形とみられる。推定される規模は、長径6.50m、短径5.30m、残存壁高は、32cmを測る。主軸方位は、長径を測り、N－16°－Wを示す。炉は、北側床面中央にわずかに存在する。ピットは、６本検出しているが、伴なうかどうかは不明。また、西側より焼土の流れ込みが認められる。壁溝は、北側にわずかに存在する。出土遺物は、北西側床面より高坏の坏部片が検出された。１/３の残存で、口径25.6cm、体下部にわずかに稜が認められる。両面とも口縁部は、横ナデ、体部は、



第18図　第５号住居跡出土遺物実測図



第6号住居跡土層説明
1．黒褐色土(少し軟質)。軟質のローム土塊を含む。
2．暗褐色土。ローム粒を多く含む。
3．黒褐色土。ローム粒を不規則に含む。
4．暗褐色土。軟質のローム土塊を多く含む。
5．暗褐色土。ローム土塊を多く含む。
6．褐色土。ローム土塊を多く含む。
7．暗褐色土(少し軟質)。ローム粒を含む。

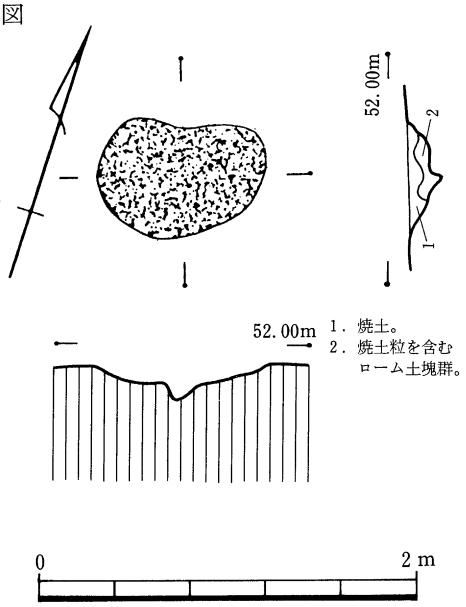
0　2　4 m

第19図　第6号住居跡実測図

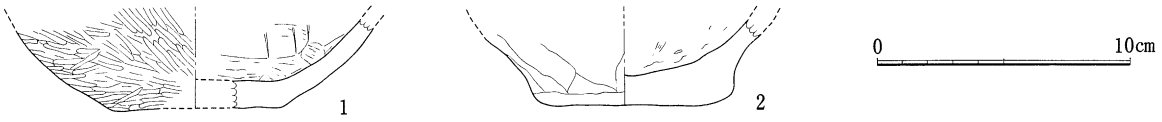
ヘラミガキがなされる。外面は、黒褐色と淡茶褐色、内面は、褐色と淡茶褐色を呈する。胎土は緻密、焼成は少し不良である。

第6号住居跡(挿図19、20、21　図版4、8)

調査地区の南側に位置し、プランの南西側は未調査であり、南側は、第11号溝によって切られている。第5号住居跡が北約4.0m、第8号住居跡が西約8mに所在する。形体は、プランを全掘していないので不明な点が多いが、胴張りの隅円方形と考えられる。推定される規模は、一辺5.40mである。床面の深さは、最大で25cmを測る。床面は、ほぼ平坦で、炉が東側床面に所在する。焼土が約10cm堆積している。また、炉に隣接して、焼土が存在する。ピットは5本検出した。P_1とP_2は主柱穴の可能性がある。出土遺物は、2点検出し、No.1は壺底部片とみられ、1/3の残存である。底径は、推定で6.7cm、やや小型で球状の胴部をもつ



第20図　第6号住居跡炉跡実測図



第21図　第６号住居跡出土遺物実測図

とみられる。外面は、丁寧なヘラミガキ、内面は、ユビナデである。色調は、外面が黒褐色、内面が淡褐色、焼成は普通、胎土は緻密である。No.２は、甕底部片とみられ、底径は推定で7.9cm、両面とも摩耗が激しい。外面は、ヘラケズリ、内面は、ヘラナデがなされる。色調は、外面が暗褐色、内面が淡茶褐色を呈する。胎土は緻密で、焼成は、不良である。

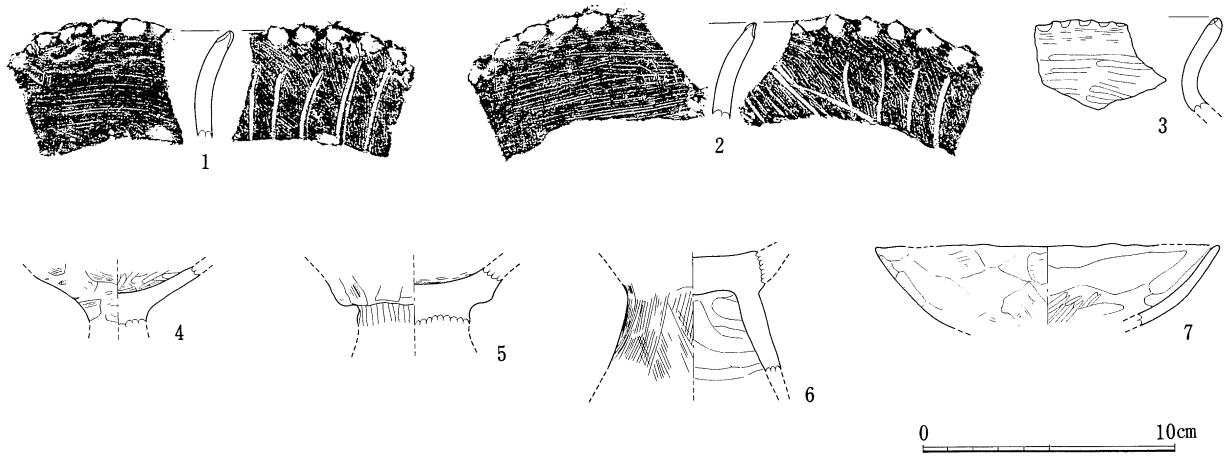
第７号住居跡(挿図22、23、24　図版４、８、９)

調査地区の中央、西側に位置し、第18号土坑に切られ、また第19、20号土坑を切っている。第８号住居跡より北に約３m、第９号住居跡より北東に約7.5m離れて所在する。竪穴の形体は、不整円形で、規模は、長径4.35m、短径4.25mを測り、主軸方位は、長径を測り、N－25°－Wを示す。床面は、深さが最大で35cmであり、ほぼ平坦で、炉は、北側床面中央に所在する。ピットは、壁付近に小ピットが多く存在する。また、南東側のピットは、貯蔵穴とみられる。竪穴の覆土は、人為的に埋めもどされたようで、ローム土塊や焼土、炭化物を多く含んでいる。出土遺物は、北側から東、南東にかけて多く検出した。No.１、２は、甕の口縁部片で、両面とも刷毛目をベースに、外面の胴上部は、ヘラ描きによる斜行沈線、口唇部には、ユビ押圧により、波状口縁を呈する。No.３も甕の口縁部片とみられ、口唇部には押圧がなされ、波状口縁を呈する。胴部には横方向のヘラミガキが施される。No.４は高坏の坏部と脚部の接合部分片とみられ、径は細く、外面はユビナデツケ、内面は、ヘラナデがなされる。胎土は緻密で、焼成は良好、色調は、外面が褐色、内面が暗茶褐色を呈する。No.５は、高坏の坏と脚の接合部片で、坏部下位には、稜がみられる。１/２の残存で、外面の坏部下位は、ヘラとユビによるナデ、脚上位は、縦方向のヘラナデがなされる。内面はヘラナデ。胎土は緻密、焼成はやや不良、色調は、外面が淡茶褐色、内面が黒褐色。No.６は、高坏脚部片で、２/３の残存である。外面は、刷毛目調整、内面は、ヘラケズリダシ、坏部内面は、ヘラナデがなされる。No.７は、高坏の坏部片とみられ、やや小型で浅い。口径13.6cmと推定され、外面は、ユビナデツケ、内面は、ユビナデの後、一部ヘラミガキがなされる。胎土は緻密。No.８は、鉢で底部を欠損する。体部最大径は、上位に有り、口縁部は内傾し、複合口縁である。口径9.9cm、体部最大径11.5cm。外面の口唇部には、斜縄文、口縁部は、羽状縄文を施し、２組ずつ４ケ所の穿孔がみられる。複合口縁の端部には、ヘラによる刻目がなされ、体部上位は、斜め方向のヘラミガキである。下部は斜め方向のヘラナデ。内面は、横方向のヘラナデである。胎土に砂粒を含み、色調は、外面が黒褐色、内面が暗褐色を呈する。No.９は、甕の胴上半部片で、上位に粘土紐接合痕を残し、段をつくる。端部には、押捺がなされる。外面の胴上部は、ヘラナデで指頭痕もみられる。下部は、ヘラケズリ後、ユビによるナデ、内面は、ヘラナデの後、ユビナデ、胎土に小礫２mm前後を多く含む。胴部最大径19.4cm。No.10は、甕の胴下半部片とみられ、やや小さく、球状を呈する。底

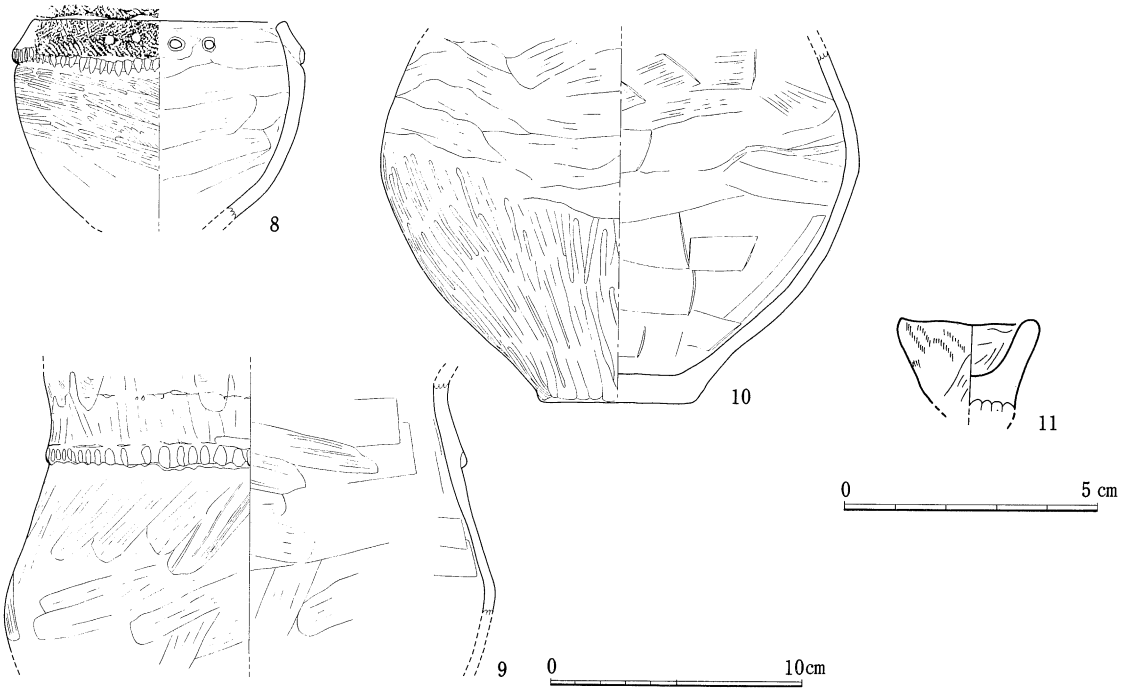
第７号住居跡土層説明
1．黒褐色土(少し軟質)。ローム粒を多く含む。焼土粒と炭化物を少量含む。
2．黒褐色土。ローム土塊を含む。焼土粒と炭化物を多く含む。
3．暗褐色土(少し軟質)。焼土塊と炭化物をブロック状にちかく含む。
4．暗褐色土。焼土粒と炭化物とローム粒を多く含む。
5．黒褐色土(少し軟質)。ローム粒を含む。
6．褐色土。ローム土塊を少量含む。
7．褐色土(硬質)。ローム土塊をブロック状に含む。
8．暗褐色土。ローム土塊を含む。
9．ローム土塊(軟質)。
※7～9は床面整地土

0　1　2 m

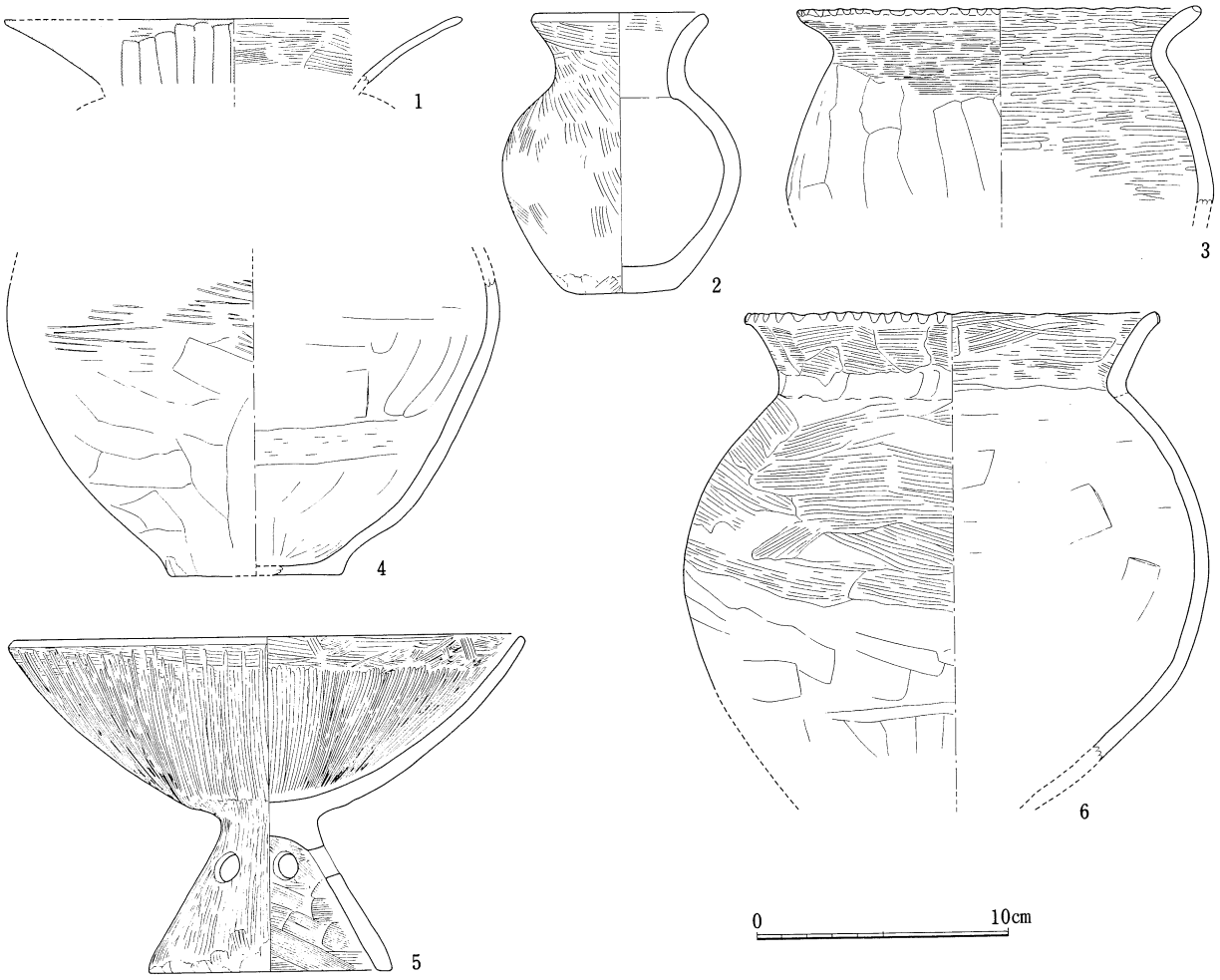
第22図　第７号住居跡実測図



第23図　第７号住居跡出土遺物実測図(１)



第24図　第７号住居跡出土遺物実測図（２）

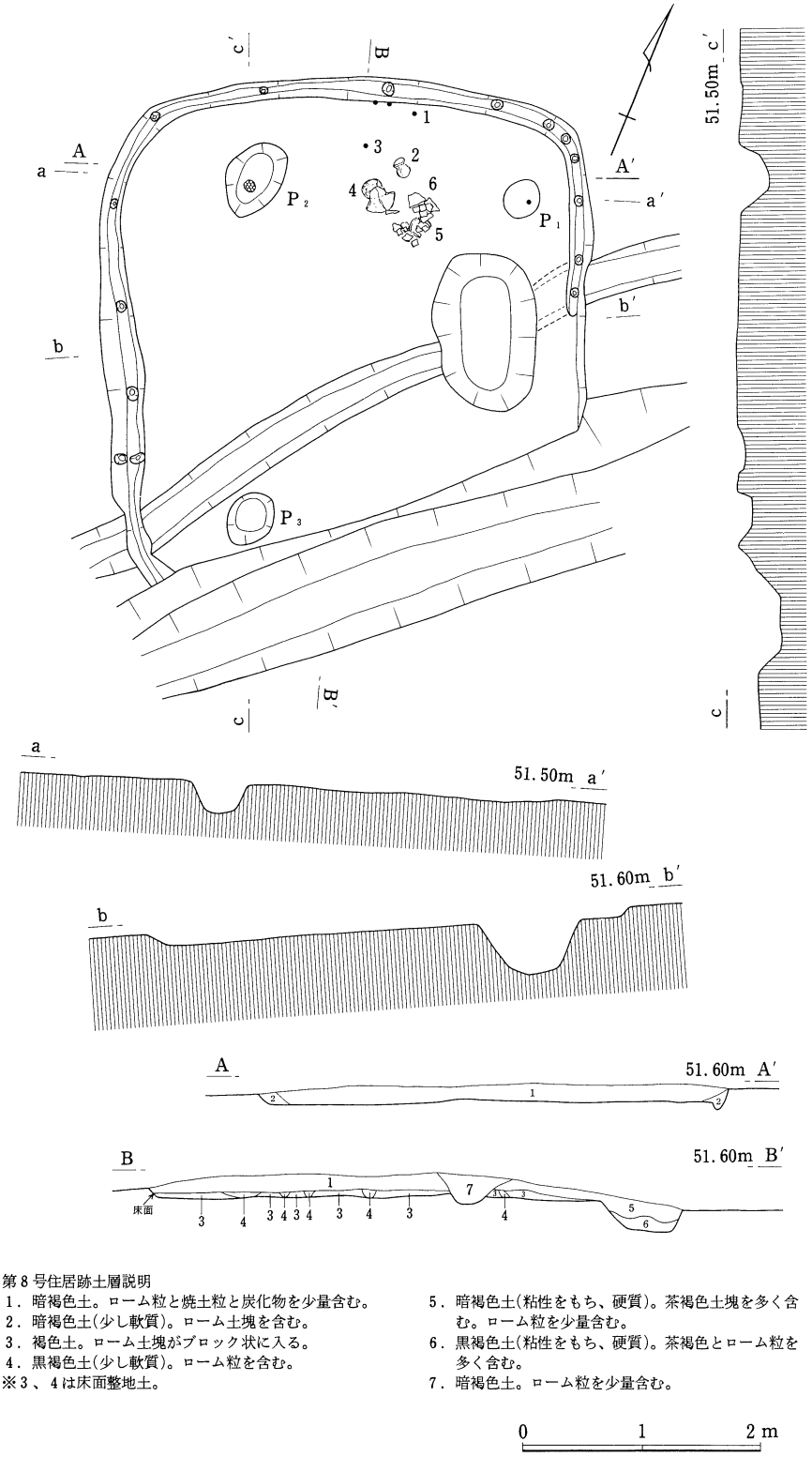


第25図　第８号住居跡出土遺物実測図

径6.1cm、胴部最大径18.9cmを計る。外面の胴中部は、ユビナデツケ、下部は、縦方向のヘラケズリ後、ヘラミガキ、内面は、ヘラヨコナデ、焼成は良好、胎土は緻密である。No.11は、手捏ね土器で、口径2.9cm、底部は欠損、外面は、褐色、内面は、黒褐色、胎土は緻密、焼成は普通である。

第8号住居跡（挿図25、26　図版5、9）

調査地区の南側に位置し、プランの東南側を第9、10号溝に切られている。また、北東側を撹乱土坑が床面を切っている。第9号住居跡が西約1.5m、第7号住居跡が北約6mに所在する。形体は、胴張りの隅円方形とみられる。規模は、東西方向4.15mで、床面の深さは、最大で12cmである。主軸方位は、N－17°－Wを示す。床面は、平坦で炉は、検出されていないが、撹乱土坑に切られた可能性が考えられる。ピットは、浅いものも含めて3本検出されている。P_2、P_3は、主柱穴の可能性がある。竪穴の覆土中に、焼土や炭化物を多量に含んでおり、火災住居とも考えられる。出土遺物は、北側床面に集中し、No.1は、壺口縁部片で、1/6程度の残存。口径は推定で18.1cm。薄手で、大きく開く口縁部をもつ。外面は、縦方向のヘラナデ、内面は、刷毛目調整がなされる。外面の全面と内面の一部に赤彩が認められる。色調は、外面が暗赤褐色、内面が褐色を呈する。胎土は緻密、焼成は少し不良である。No.2は、坩で、口縁部の2/3を欠損する。小さく、球状を呈する脚部をもち、口縁部は、やや



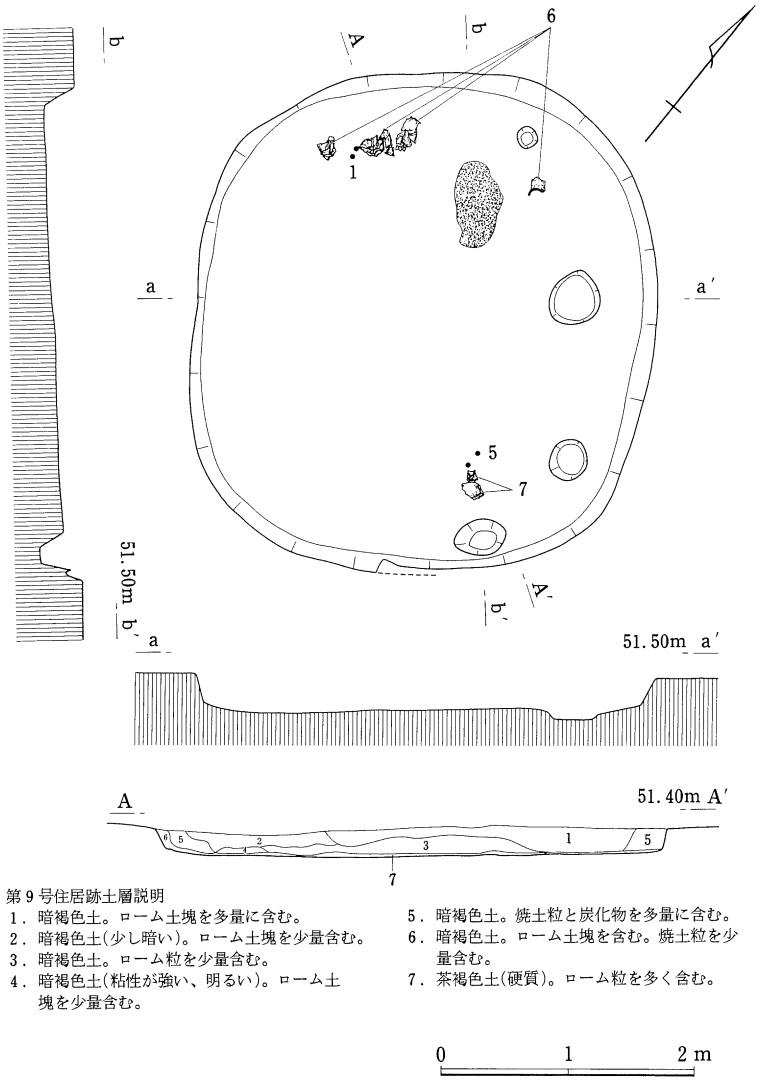
第8号住居跡土層説明
1．暗褐色土。ローム粒と焼土粒と炭化物を少量含む。
2．暗褐色土(少し軟質)。ローム土塊を含む。
3．褐色土。ローム土塊がブロック状に入る。
4．黒褐色土(少し軟質)。ローム粒を含む。
※3、4は床面整地土。
5．暗褐色土(粘性をもち、硬質)。茶褐色土塊を多く含む。ローム粒を少量含む。
6．黒褐色土(粘性をもち、硬質)。茶褐色とローム粒を多く含む。
7．暗褐色土。ローム粒を少量含む。

第26図　第8号住居跡実測図

長く外反する。口径6.7cm、底径4.3cm、体部最大径9.5cm、器高11.1cmを測る。外面は、目の荒い刷毛目調整、内面は、ユビナデ、内外面とも剥離が激しい。焼成は良好、胎土は緻密、色調は茶褐色である。No.3は、甕の胴上部から口縁部片で、口唇部は、押圧による波状口縁である。外面の口縁部は、横ナデ、胴部は、縦方向のヘラケズリ、内面は、横方向のヘラミガキがなされる。胎土は緻密、焼成は少し不良、色調は茶褐色を呈する。口径16cmである。No.4は、甕胴下半部片か。1/4の残存で、底径6.8cm、胴部最大径19.6cmを計る。外面の胴中位は、刷毛目調整、胴下半は、ヘラナデ、内面は、ヘラナデの後、ユビナデ調整である。色調は、外面が黒褐色、内面は暗褐色を呈する。No.5は、高坏で、口縁部の1/2を欠損する。推定口径20.1cm、脚裾部径9.6cm、器高13.3cmを計る。脚部は、逆台形状を呈し、坏部は、大きく丸みをもって立ち上がる。両面の口縁部付近、及び、外面の脚裾部には、刷毛目痕が残る。また胴部内面は、刷毛目調整、他はすべて縦方向のヘラミガキがなされる。No.6は、甕で、底部を欠損する。1/2強の残存で、波状口縁で、胴部は球状を呈する。口径は、16.5cm、胴部最大径20.8cm。外面は、胴上半部から口縁部が刷毛目調整、頸部には、粘土紐接合痕が残る。胴下半部はヘラナデ、内面の口縁部は、刷毛目調整、胴部は、ヘラナデの後、丁寧なユビナデがなされる。

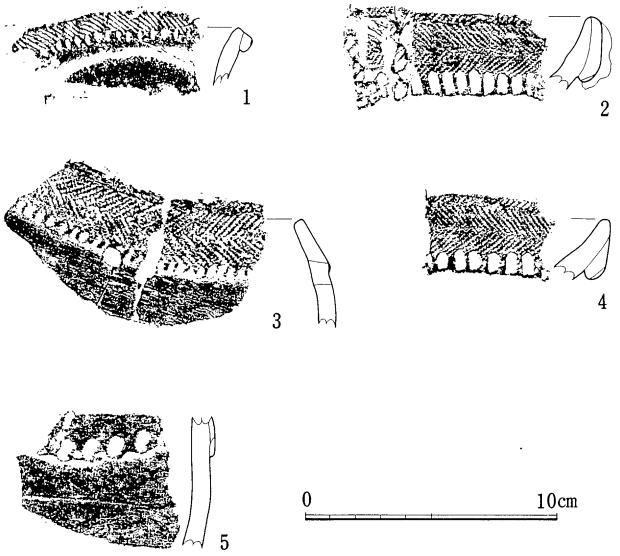
第9号住居跡(挿図27、28、29 図版5、10)

調査地区の南側に位置し、第8号住居跡より西へ約1.5m、第7号住居跡より南西へ7.5m、第12号住居跡より北東へ1.5m離れて所

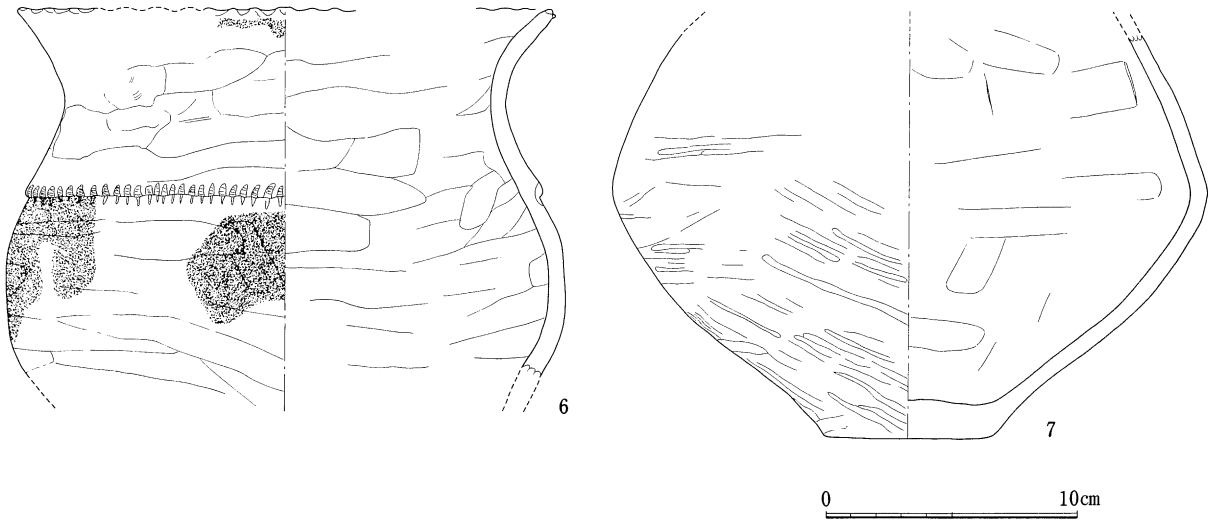


第9号住居跡土層説明
1. 暗褐色土。ローム土塊を多量に含む。
2. 暗褐色土(少し暗い)。ローム土塊を少量含む。
3. 暗褐色土。ローム粒を少量含む。
4. 暗褐色土(粘性が強い、明るい)。ローム土塊を少量含む。
5. 暗褐色土。焼土粒と炭化物を多量に含む。
6. 暗褐色土。ローム土塊を含む。焼土粒を少量含む。
7. 茶褐色土(硬質)。ローム粒を多く含む。

第27図 第9号住居跡実測図



第28図 第9号住居跡出土遺物実測図(1)



第29図　第９号住居跡出土遺物実測図(２)

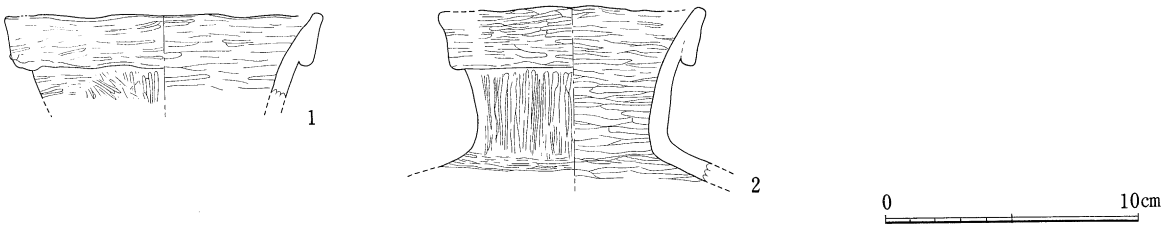
在する。形体は、不整長円形である。規模は、長径4.05m、短径3.63m、深さ25cmを測る。主軸方位は、長径方向を測り、N－28°－Wを示す。床面は、平坦で、北側床面に炉が存在する。ピットは、大小４本が東側床面に所在する。竪穴の覆土には、ローム土塊や焼土、炭化物を多く含んでおり、人為的な埋めもどしや火災の可能性がある。出土遺物は、北側や南東側床面より多く検出された。No.1は、壺口縁部片とみられ、複合口縁で、斜縄文を施し、端部には、ヘラによる刻目がなされる。No.2も壺口縁部片で、複合口縁で、口唇部に斜縄文、口縁部には、羽状縄文、複合端部には、刻目がなされる。また、棒状隆起がみられる。No.3は、鉢口縁部、No.4は、壺口縁部の破片で、両者とも口唇部に斜縄文、口縁部に羽状縄文、複合端部は、刻目がなされる。No.5は、甕の胴上部片で、粘土紐接合痕による段をもち、端部は、押捺がなされる。No.6も、甕の胴上半部片で、口径21.2cm、胴部最大径22.0cmを計る。胴部は、球状を呈し、口縁部は、くの字状に外反する。また、口唇部は、押圧され、波状口縁となる。また、胴上位は、粘土接合痕を有し、段をもち、端部は、刻目がなされる。胴部は、両面ともユビナデがなされ、外面の一部に煤が付着する。胎土に２mm前後の小礫を少量含む。色調は、外面が黒褐色、内面が暗褐色を呈する。No.7は、甕胴下半部片とみられ、胴部の張りは強い。胴部最大径23.5cm、底径6.6cmを計る。外面の胴上部は、摩耗が多い。下半部は、斜め方向のヘラナデ(一部ミガキ)、内面は、ヘラナデの後、ユビナデ、色調は、外面が暗褐色、内面は茶褐色。

第10・11号住居跡(挿図30、31、32　図版５、10)

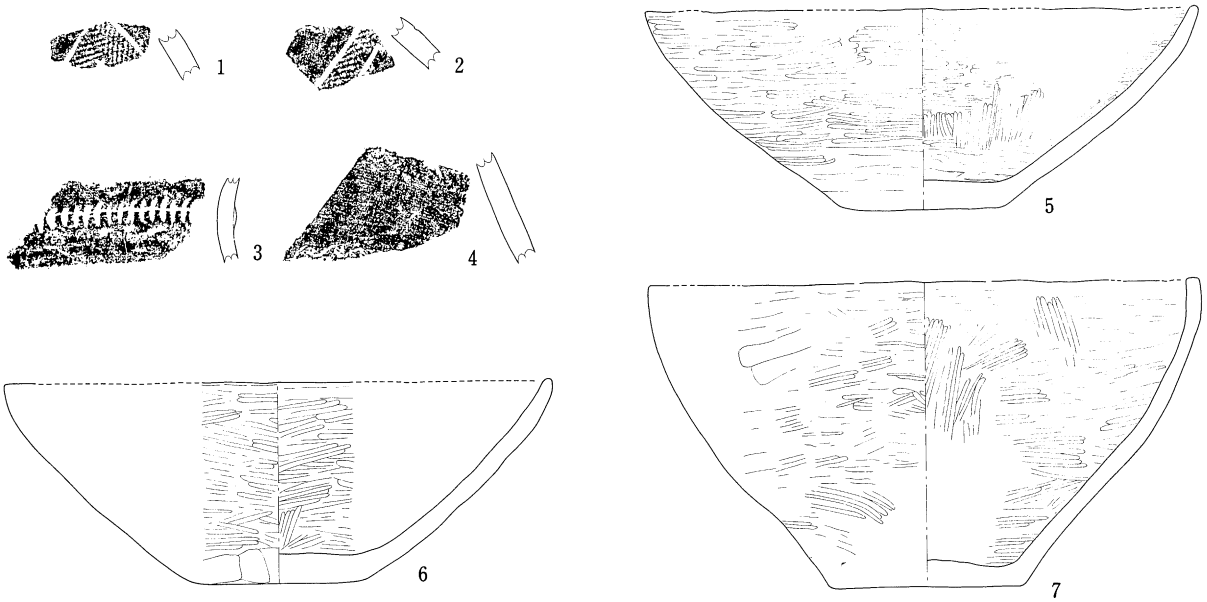
調査地区の南西側に位置する。第10号住居跡が第11号住居跡の南東に隣接する。両者とも、西側を第８号溝に切られている。また、第10号住居跡は、南側が第９号溝と接している。検出状況は悪く、特に第11号住居跡は、不明な点が多い。第９号住居跡からは、南西に約５m離れている。

第10号住居跡は、東側のみの残存で、ピットは３本、床面は、わずかしか残存しない。南側の一部に、流れ込みと思われる焼土が存在する。炉は、検出していない。竪穴壁の残存高は、16cmである。出土遺物は、東側壁付近より、２点検出している。No.1は、壺口縁部片で、複合口縁を呈する。１/

第30図　第10.11号住居跡実測図



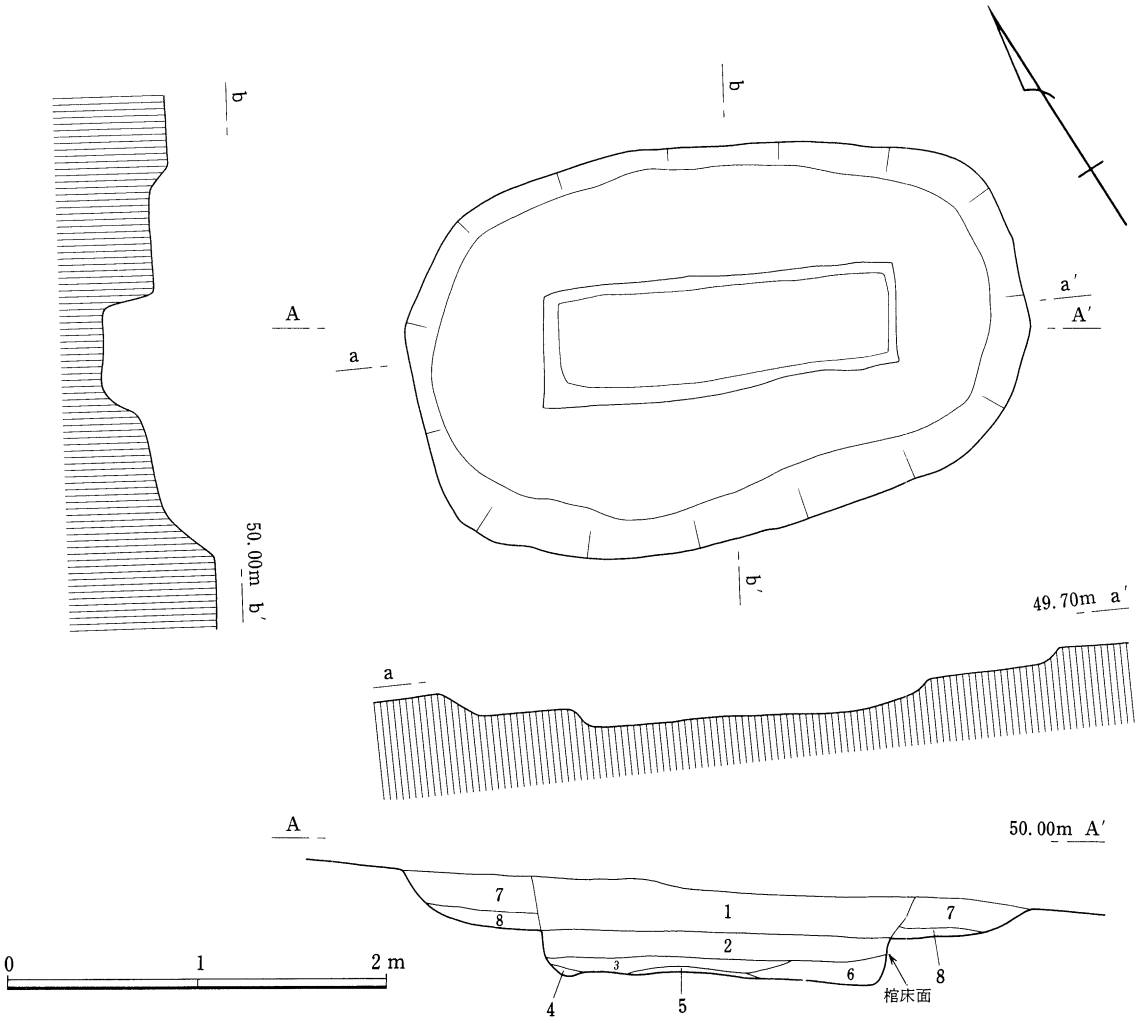
第31図　第10号住居跡出土遺物実測図



第32図　第11号住居跡出土遺物実測図(縮尺は上図第31図と同じ)

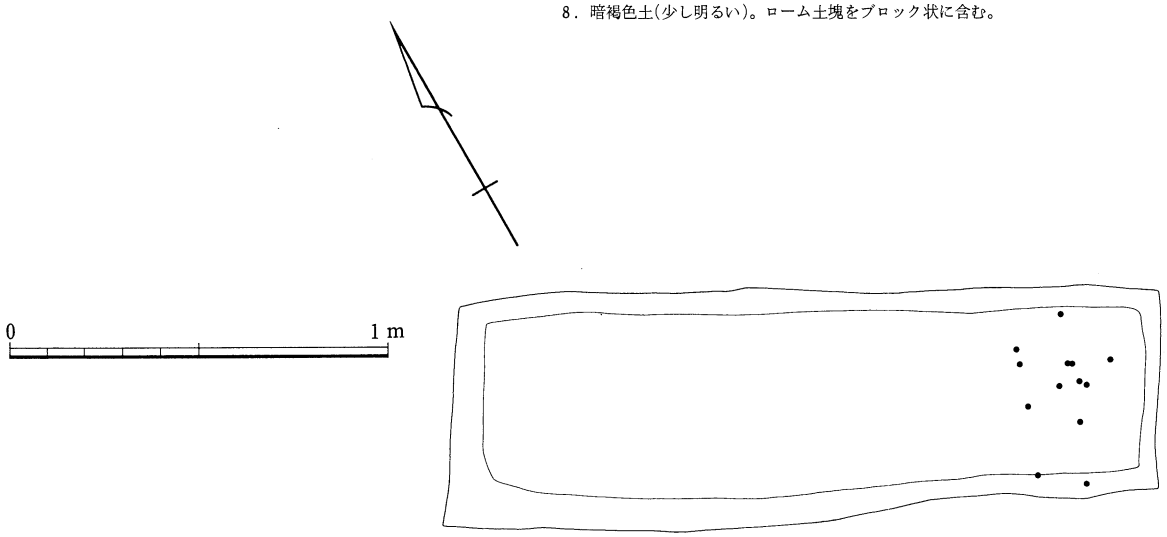
4の残存で、推定口径12.6cm、両面ともヘラミガキがなされる。胎土は、砂粒を含み、焼成は少し不良、色調は、外面が褐色、内面は暗褐色を呈する。No.2も壺口縁部片で、No.1より口径が狭く、頸部は細い。推定口径10.6cm、外面は、縦及び横方向のヘラミガキ、内面も、横方向のヘラミガキがなされる。焼成は良好。胎土には砂粒を含み、色調は、外面が黒褐色、内面は、暗褐色を呈する。

第11号住居跡は、平面形体は、不整長円形と考えられる。残存する最大径は、5.05mを測る。残存壁高は6cmである。床面は、平坦で、踏み固められた面が広範囲に認められる。また、焼土が広く分布している。炉は、北側床面に2ケ所存在する。いずれも、焼土の厚さは薄い。ピットは、南側の壁近くに1本検出したのみである。出土遺物は、南東側床面より検出している。No.1、2は、壺胴上半部片とみられ、斜縄文を沈線で区画し、山形文を形成するとみられる。No.3は、甕胴上部片で、粘土接合痕を残し、段をつくり、端部に刻目を施す。No.4も甕胴上半部片とみられ、平滑な面にS字状結節文を横位に配している。No.5、6、7は、鉢で、体部は、やや弧を描いて大きく開いて立ち上がる。推定底径は5.9cm、口径21.8cm、器高7.9cmを計る。1/4の残存である。外面の底部周辺は、横方向のヘラナデ、体部は、横方向のヘラミガキ、内面は、縦及び横方向のヘラミガキがなされる。No.6は、No.5と同様の器形で、1/4の残存である。推定口径21.7cm、底径6.8cm、器高8.0cmを計る。外面は、底部周辺がヘラケズリ、体部〜口縁部は、横方向のヘラミガキ、内面は、ヘラミガキがなされる。No.7は、やや深く、体部は丸みをもち、口縁部は、直立にちかい。2/3の残存で、口径21.8cm、底径7.0cm、器高12.1cm。外面は、ヘラナデとヘラミガキ、内面は、ヘラミガキがなされる。

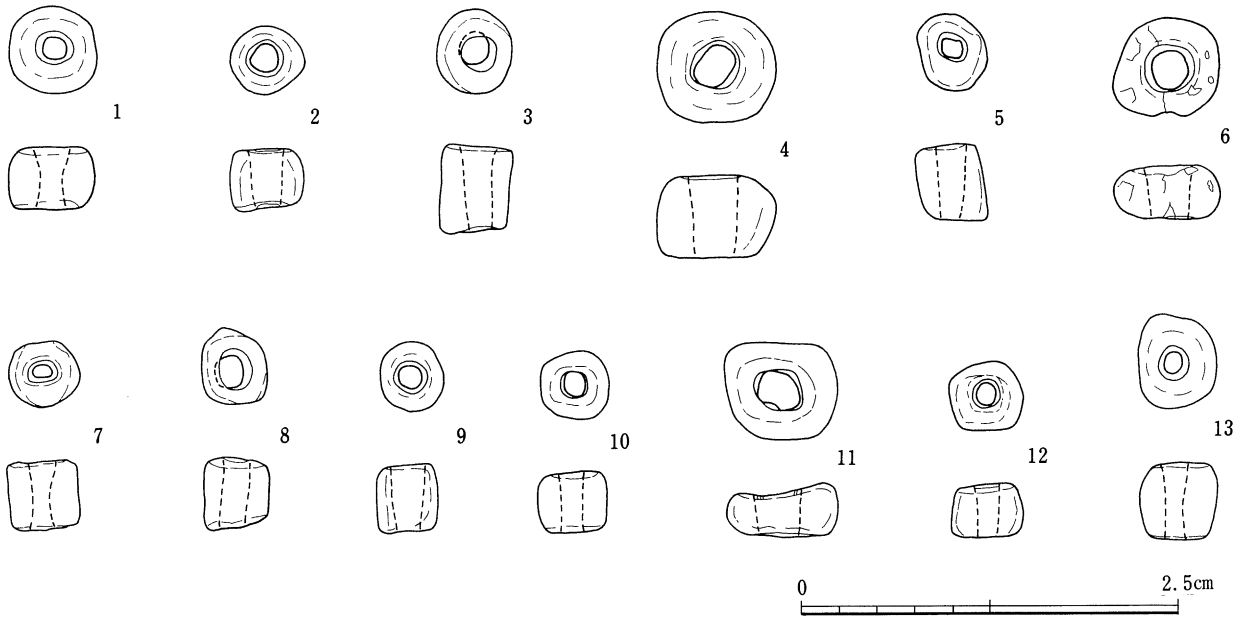


第33図　第１号土坑実測図

1．黒褐色土。ローム粒と炭化物を少量含む。
2．黒褐色土。ローム粒を少量含む。
3．黒褐色土(少し硬質)。ローム粒を多く含む。
4．褐色土(少し軟質)。ローム土塊をブロック状に含む。
5．褐色土(少し硬質)。ローム粒を多く含む。
6．暗褐色土(少し硬質)。ローム粒を多く含む。
7．暗褐色土。ローム土塊を多く含む。
8．暗褐色土(少し明るい)。ローム土塊をブロック状に含む。



第34図　第１号土坑内ガラス玉出土状況図



第35図　第１号土坑出土ガラス玉実測図

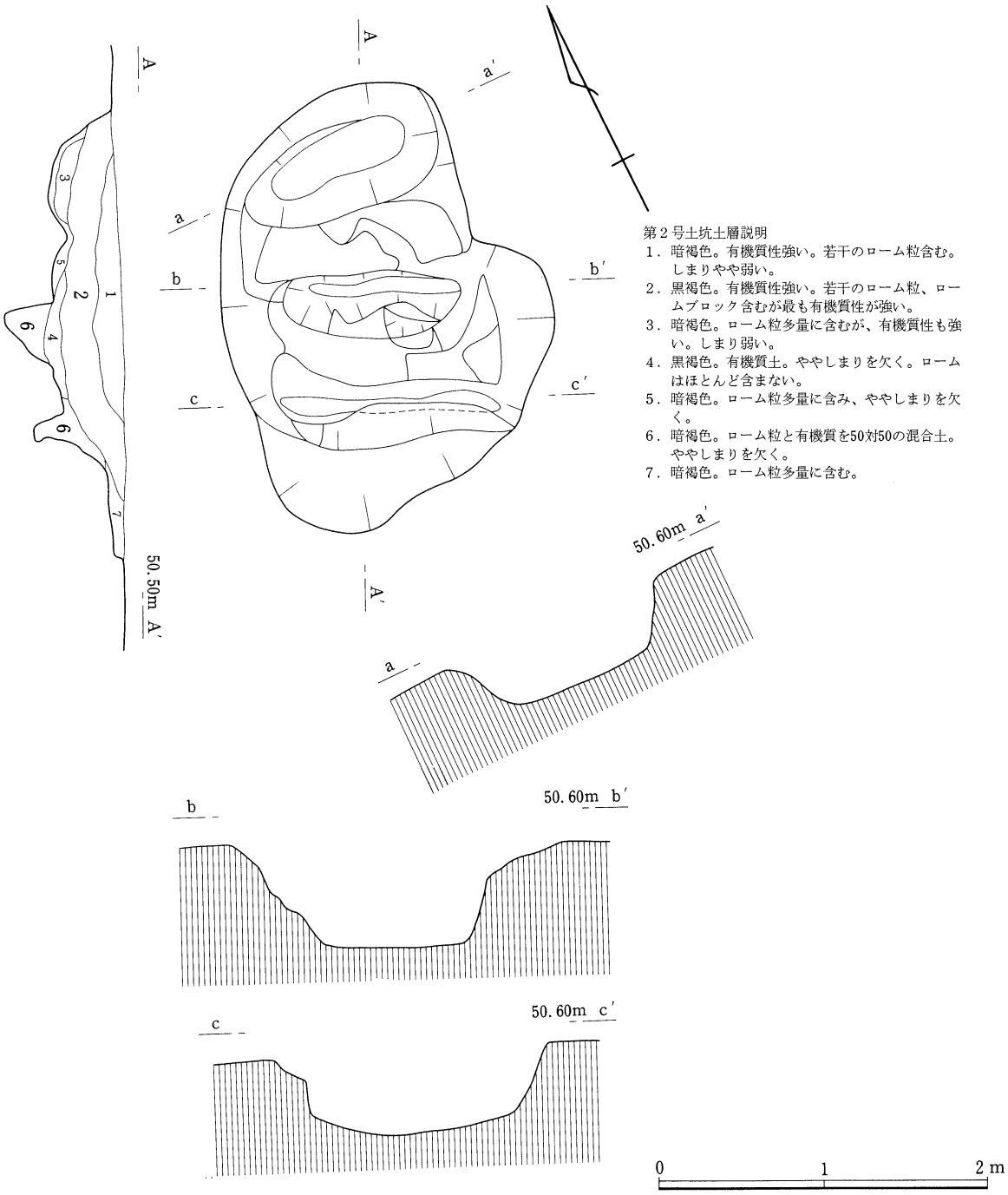
ⅲ　土坑(挿図33～47　図版11、12)

調査により、22基を検出している(この他にピットも多く存在する)。各土坑の内容については、別表(第２表)のとおりである。第１号土坑は、調査地区の北側に位置し、掘り方は長円形で、中央に木棺痕と思われる長方形の落ち込みがある。北東側隅付近より、13個の深青色を呈するガラス製の小玉が出土し、また、骨粉も２点確認している。第２号土坑は、底部に凹凸が多く、三ケ所のほぼ平行する溝状の底部が認められる。(註1)出土遺物は、縄文中～後期の土器片(２点)と敲打石(重さ140g)が検出

第２表　棒ケ谷遺跡土坑表　　数字の(　)は推定値

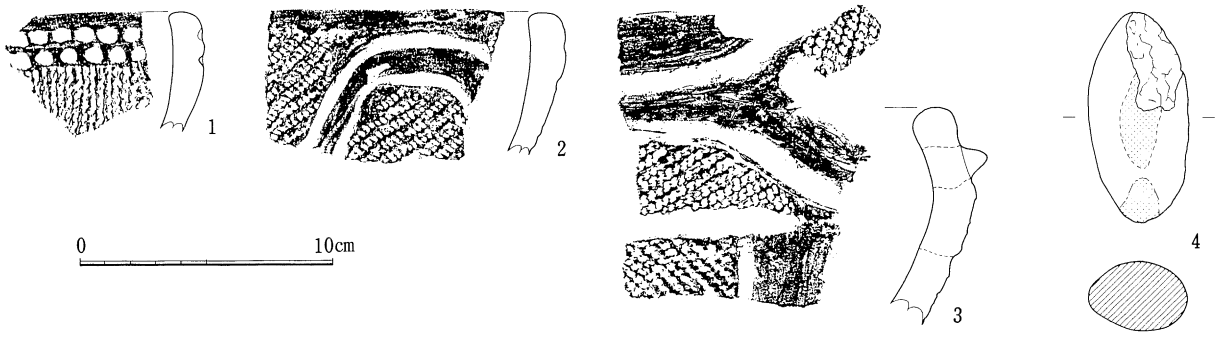
番号	土坑番号	挿図番号	旧土坑番号	規模(cm) 上端	規模(cm) 下端	規模(cm) 深さ	主軸方向	性格	その他(ピット、出土遺物など)
1	1	33～35	22	326×209	186×64	49	N59° W	土壙墓	棺底部は、175×49、上端掘り方は長円形。深青色のガラス玉13ケ出土。古墳時代前期か。
2	2	36、37	21	275×203	－	63	－		底部は凸凹多く、特に３本の溝状の落ち込み有り。縄文中期の土器片２点など出土。
3	3	38	31	(240)×(114)	(198)×－	30	－		第３号溝により中央を切られる。
4	4	39	13	159×119	－	40	－		中央部がピット状に凹む。
5	5	38		120×104	100×71	66	N22° W		不整長円形。
6	6	39		126×101	89×73	63	N53° W		〃　。
7	7	40	29	－	－	38	－		不整形で風倒木か。
8	8	41	40	53×34	44×26	29	N70° E		周辺に小ピット多し。底部にも１本有り。
9	9	41	41	73×65	36×29	38	－		不整円形
10	10	42	8	201×145	84×56	91	N７° E		立ち上がりが２段で南側が深い。
11	11	42	9	147×90	27×11	46	N17° W		不整長円形。北側に小ピット２本有り。南側が深い。
12	12	42	10	111×108	－	62	－		底部は凸凹多し。
13	13	37、43	16	285×199	114×33	43	N47° E		２基の土坑の重複か。縄文中期土器片(１点)。
14	14	43	14	157×129	105×76	24	－		不整長円形。覆土から、かなり新しい時期の所産。
15	15	43	15	117×101	78×57	19	－		不整長円形。北側が深い。
16	16	44	37	165×134	71×21	151	－	陥穴か?	不整長円形。
17	17	44		114×82	94×65	58	W２° S		〃　。
18	18	44	4	264×145	231×122	35	W40° N		不整の胴張り隅円長方形。西側外にピット２本。
19	19	46	7 a	429×181	－	96	N62° E		20土坑に切られる。
20	20	45、46	7 b	(214)×(87)	193×50	32	N39° E		不整長円形。壺底部片出土。
21	21	47		164×114	87×58	272	N52° W	陥穴	〃　。
22	22	47	26	96×88	57×53	34	－		

(註１)この形態は、方形周溝状遺構に伴う歴史時代の土壙墓にも類似している。

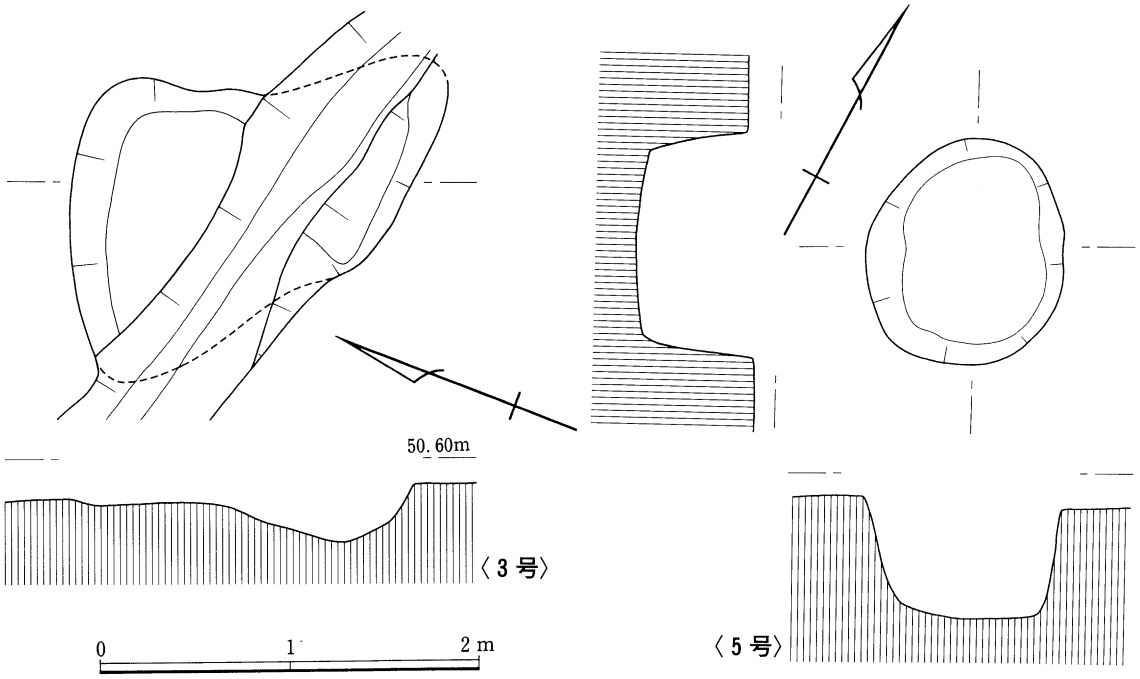


第２号土坑土層説明
1．暗褐色。有機質性強い。若干のローム粒含む。しまりやや弱い。
2．黒褐色。有機質性強い。若干のローム粒、ロームブロック含むが最も有機質性が強い。
3．暗褐色。ローム粒多量に含むが、有機質性も強い。しまり弱い。
4．黒褐色。有機質土。ややしまりを欠く。ロームはほとんど含まない。
5．暗褐色。ローム粒多量に含み、ややしまりを欠く。
6．暗褐色。ローム粒と有機質を50対50の混合土。ややしまりを欠く。
7．暗褐色。ローム粒多量に含む。

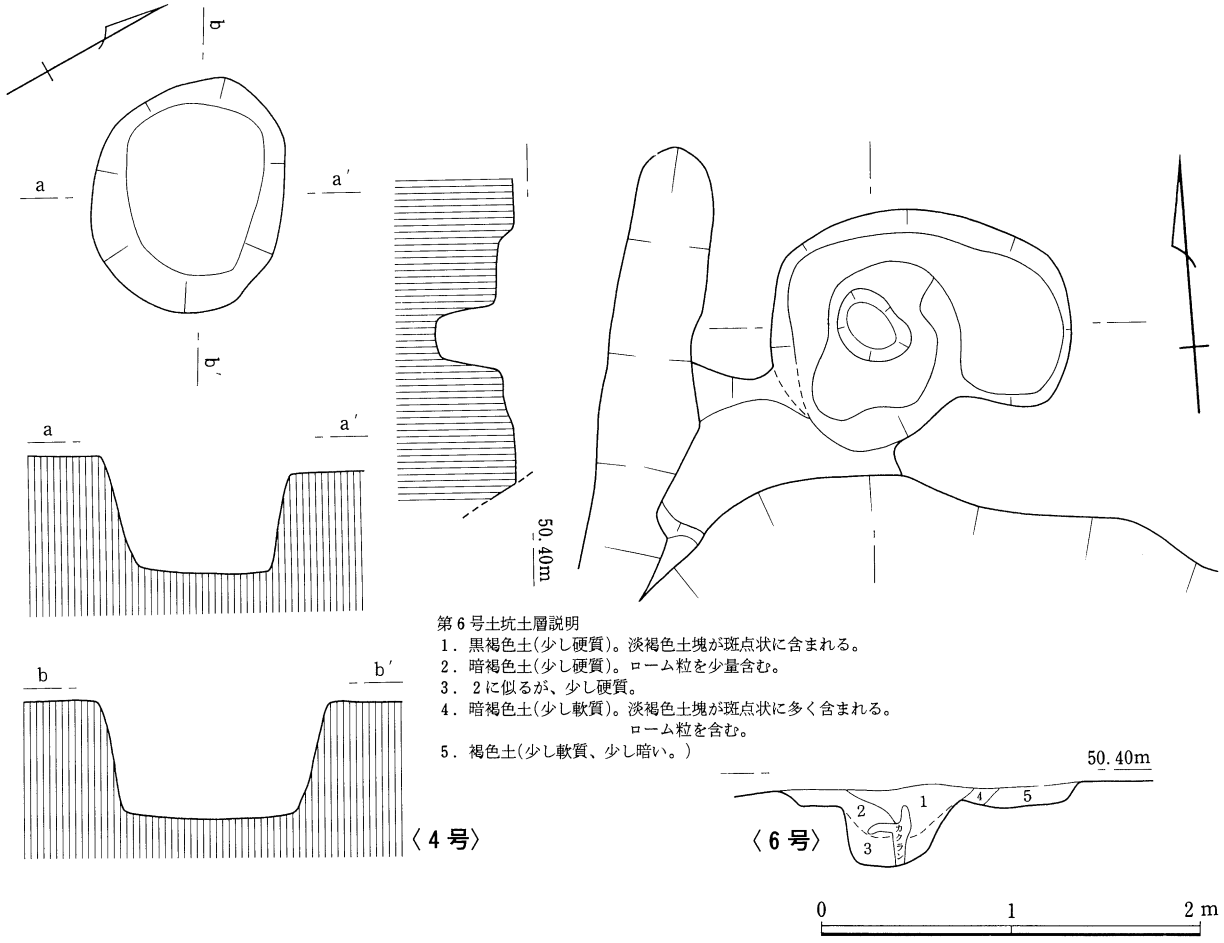
第36図　第２号土坑実測図



第37図　第２号及び第13号土坑出土遺物実測図　２号（１、２、４）、13号（３）



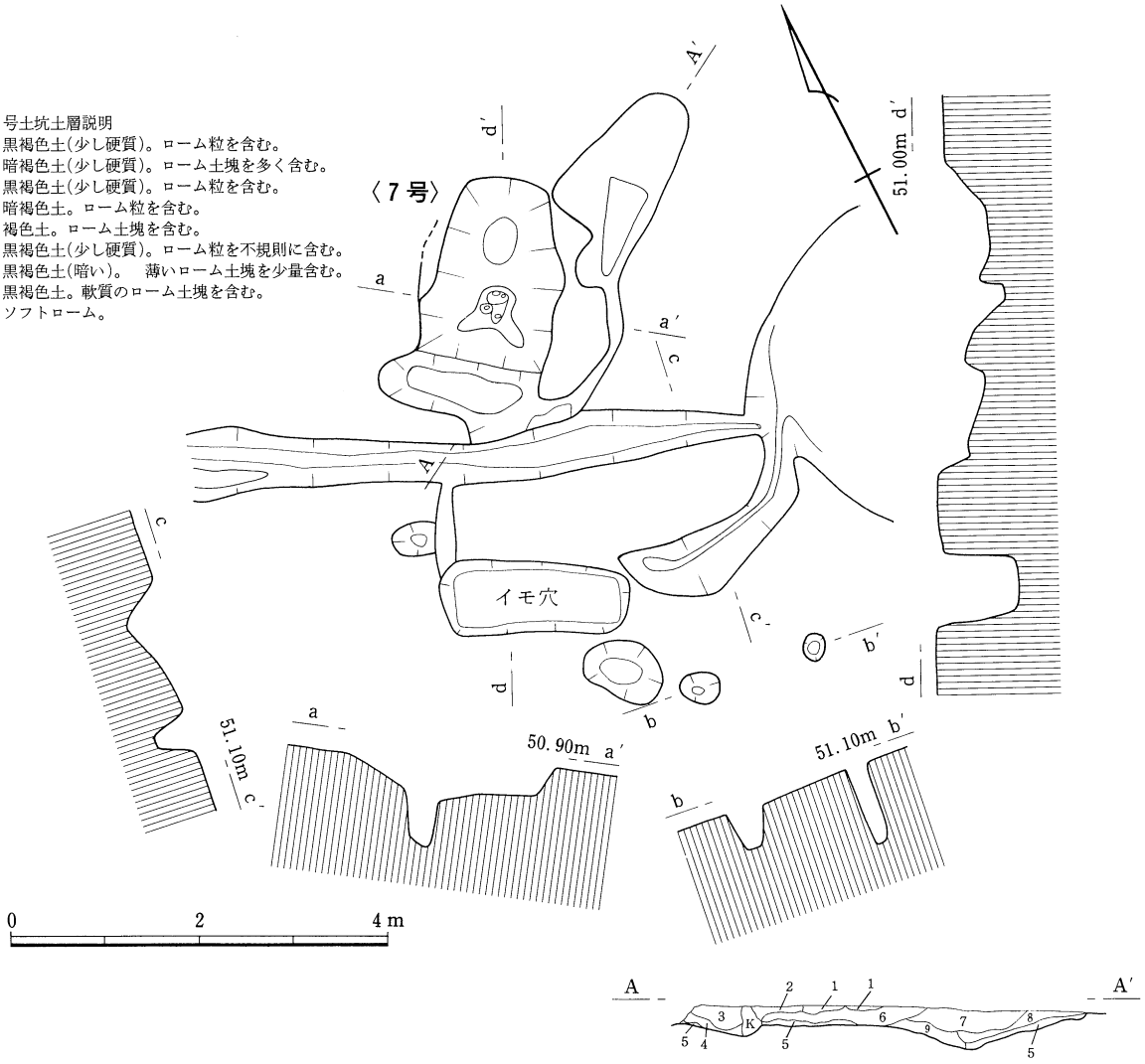
第38図　第3.5号土坑実測図



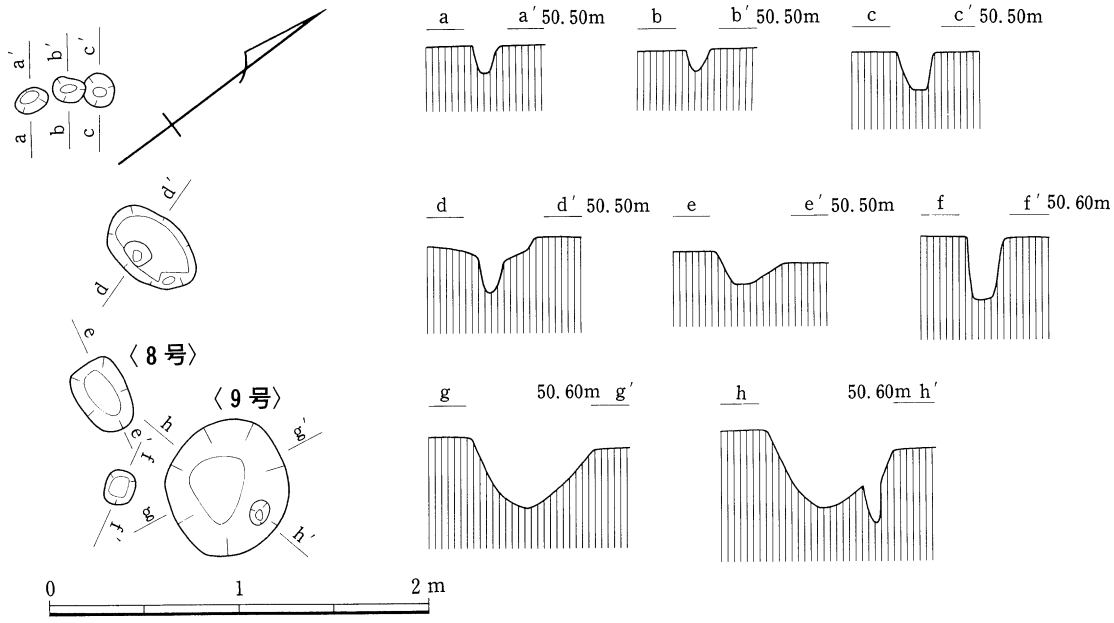
第6号土坑土層説明
1．黒褐色土(少し硬質)。淡褐色土塊が斑点状に含まれる。
2．暗褐色土(少し硬質)。ローム粒を少量含む。
3．2に似るが、少し硬質。
4．暗褐色土(少し軟質)。淡褐色土塊が斑点状に多く含まれる。
　　ローム粒を含む。
5．褐色土(少し軟質、少し暗い。)

第39図　第4.6号土坑実測図

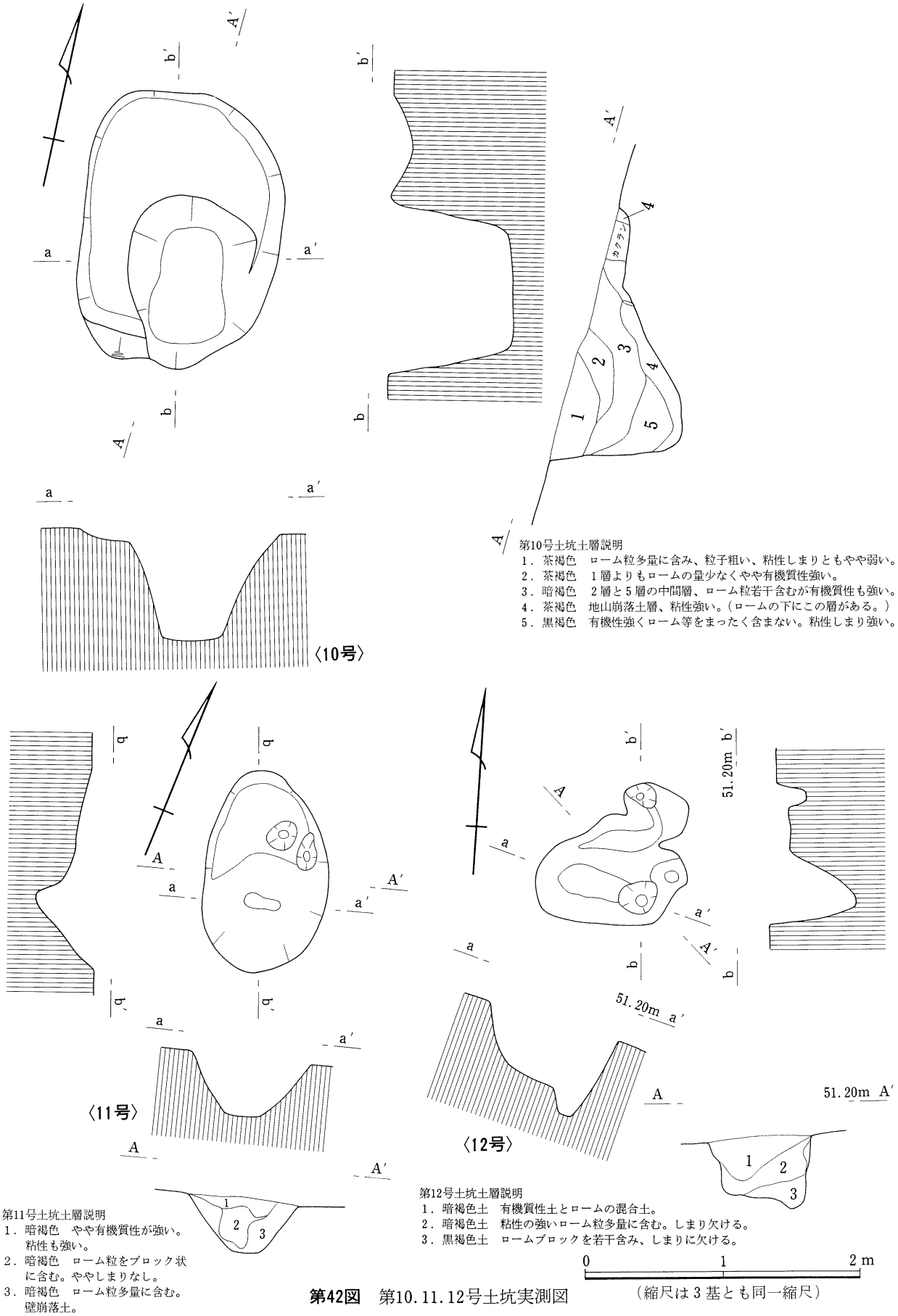
第７号土坑土層説明
1．黒褐色土(少し硬質)。ローム粒を含む。
2．暗褐色土(少し硬質)。ローム土塊を多く含む。
3．黒褐色土(少し硬質)。ローム粒を含む。
4．暗褐色土。ローム粒を含む。
5．褐色土。ローム土塊を含む。
6．黒褐色土(少し硬質)。ローム粒を不規則に含む。
7．黒褐色土(暗い)。　薄いローム土塊を少量含む。
8．黒褐色土。軟質のローム土塊を含む。
9．ソフトローム。



第40図　第７号土坑実測図



第41図　第8.9号土坑実測図



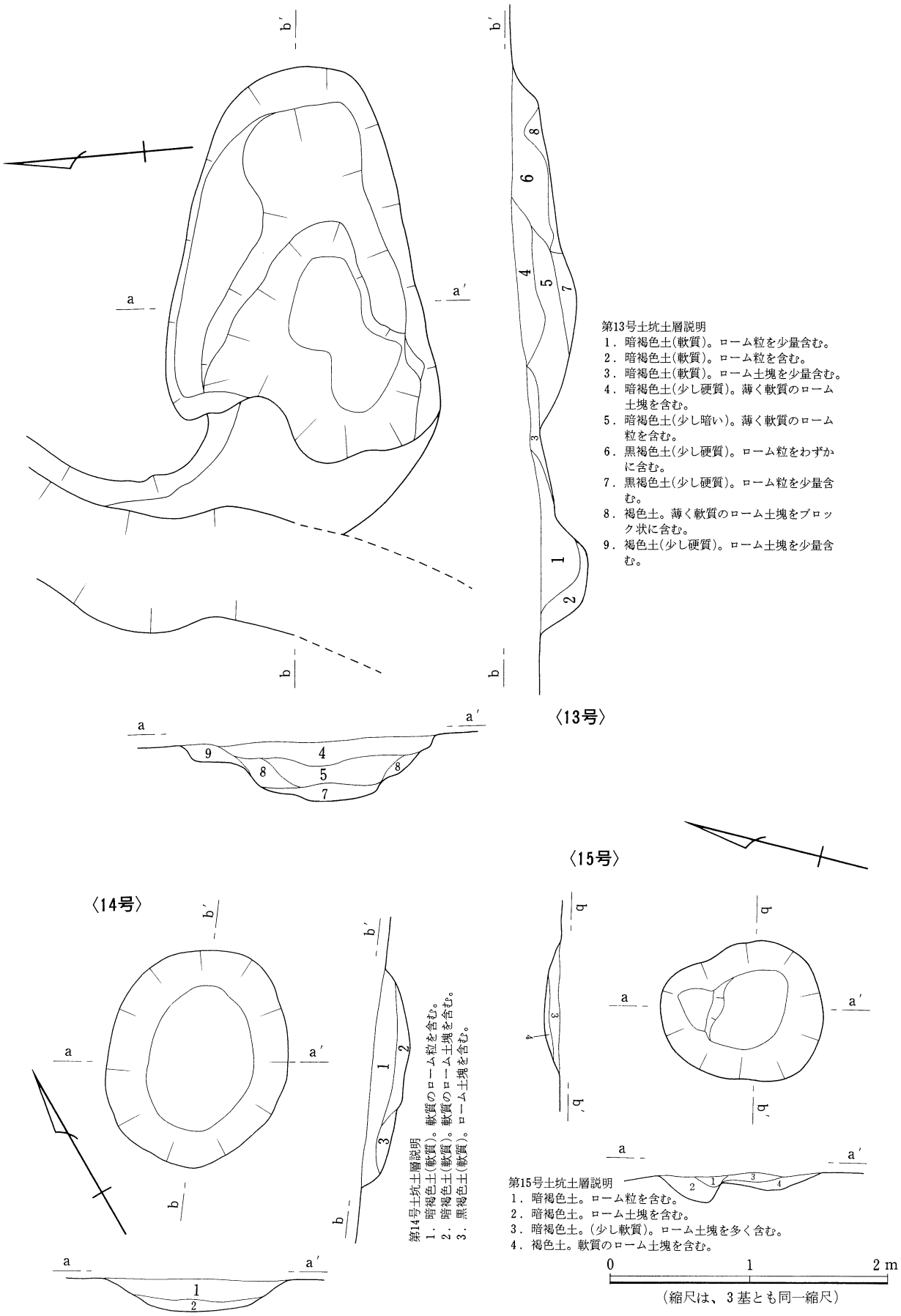
第10号土坑土層説明
1．茶褐色　ローム粒多量に含み、粒子粗い、粘性しまりともやや弱い。
2．茶褐色　1層よりもロームの量少なくやや有機質性強い。
3．暗褐色　2層と5層の中間層、ローム粒若干含むが有機質性も強い。
4．茶褐色　地山崩落土層、粘性強い。（ロームの下にこの層がある。）
5．黒褐色　有機性強くローム等をまったく含まない。粘性しまり強い。

第11号土坑土層説明
1．暗褐色　やや有機質性が強い。粘性も強い。
2．暗褐色　ローム粒をブロック状に含む。ややしまりなし。
3．暗褐色　ローム粒多量に含む。壁崩落土。

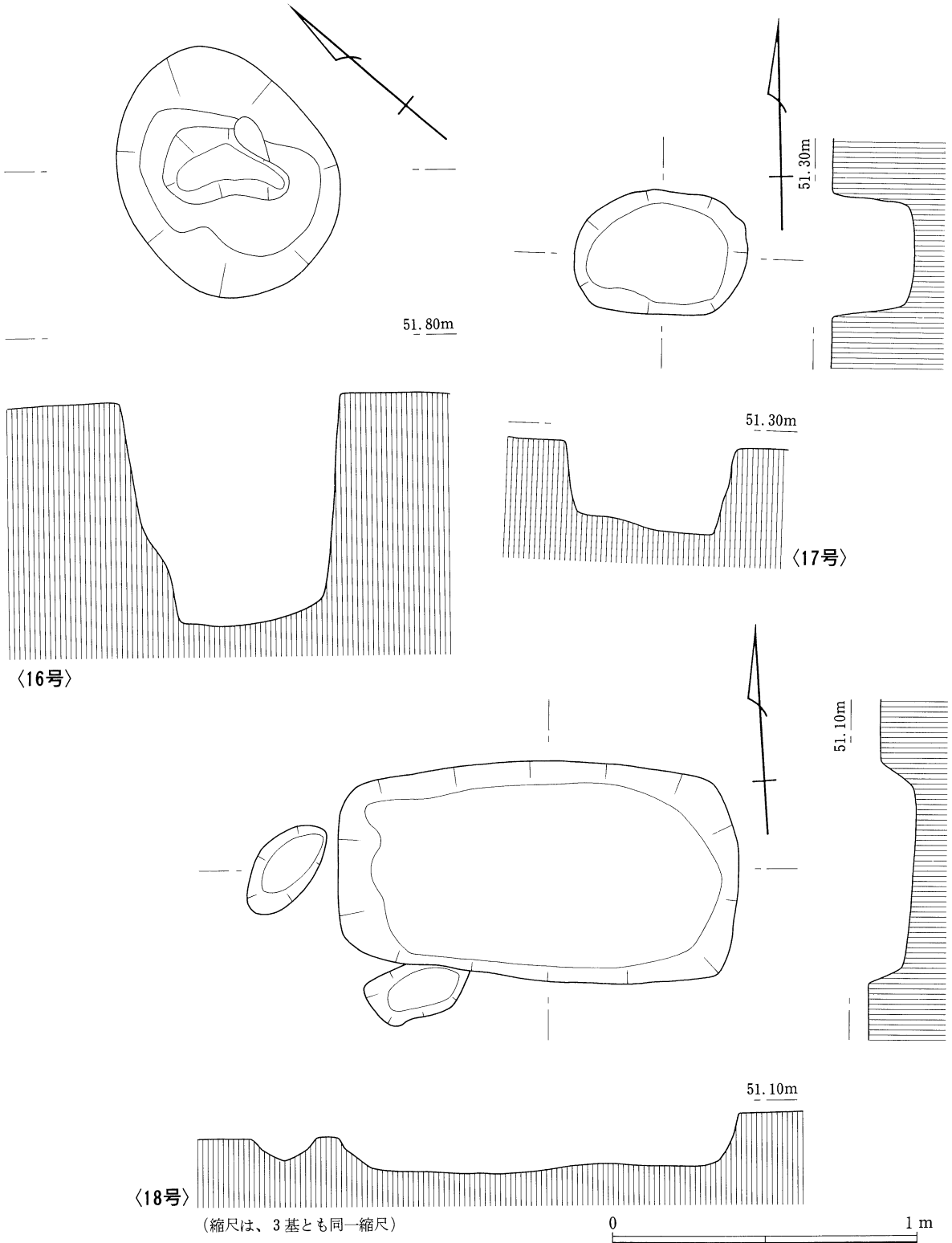
第12号土坑土層説明
1．暗褐色土　有機質性土とロームの混合土。
2．暗褐色土　粘性の強いローム粒多量に含む。しまり欠ける。
3．黒褐色土　ロームブロックを若干含み、しまりに欠ける。

第42図　第10.11.12号土坑実測図

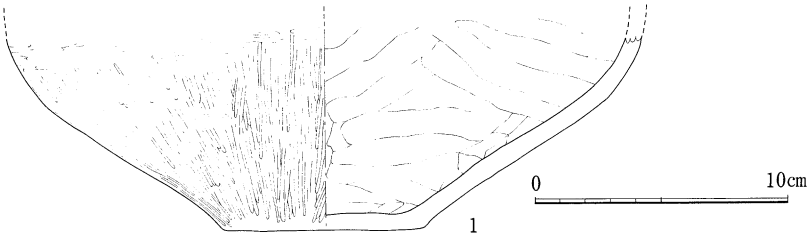
（縮尺は3基とも同一縮尺）



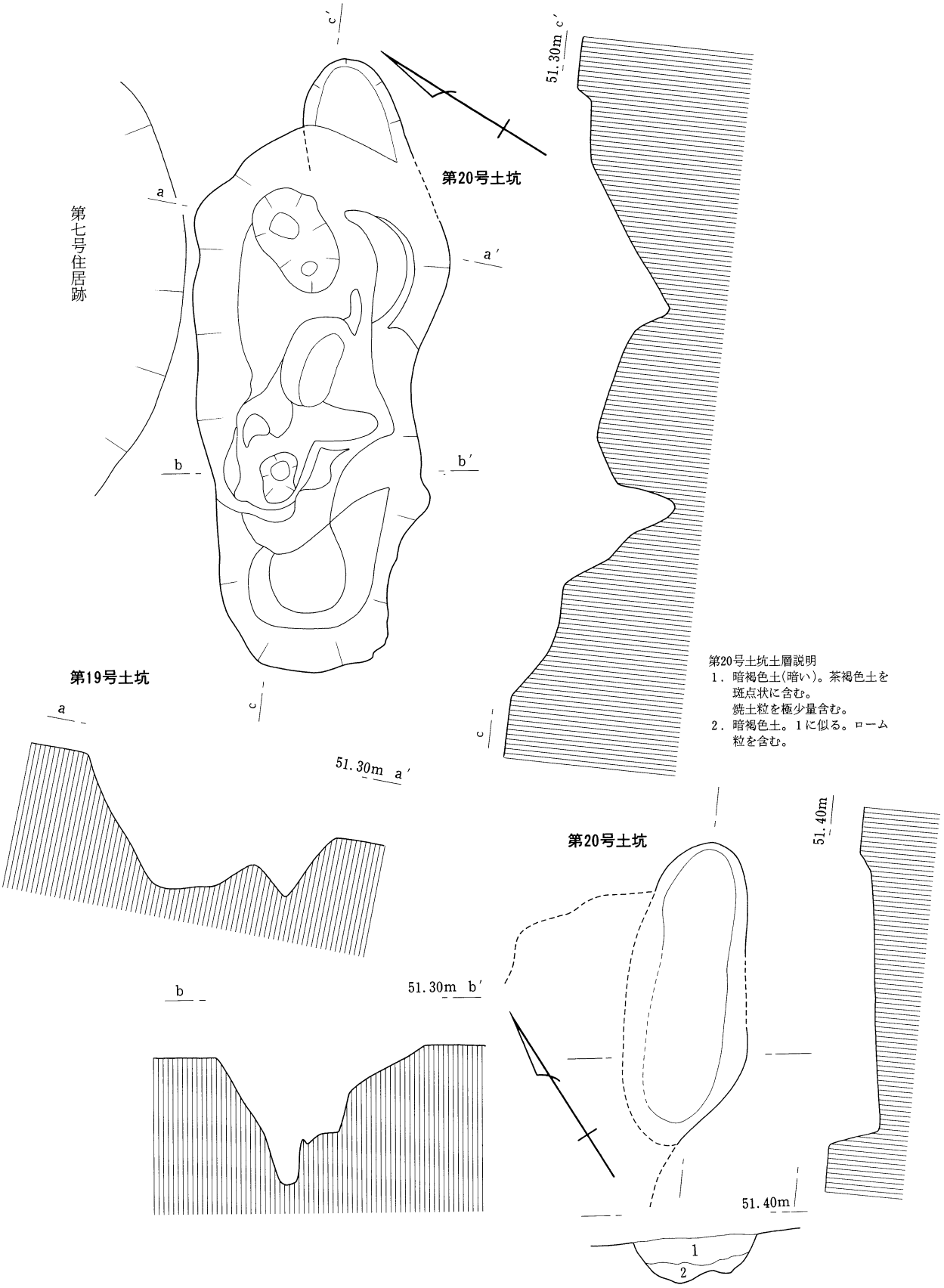
第43図　第13.14.15号土坑実測図



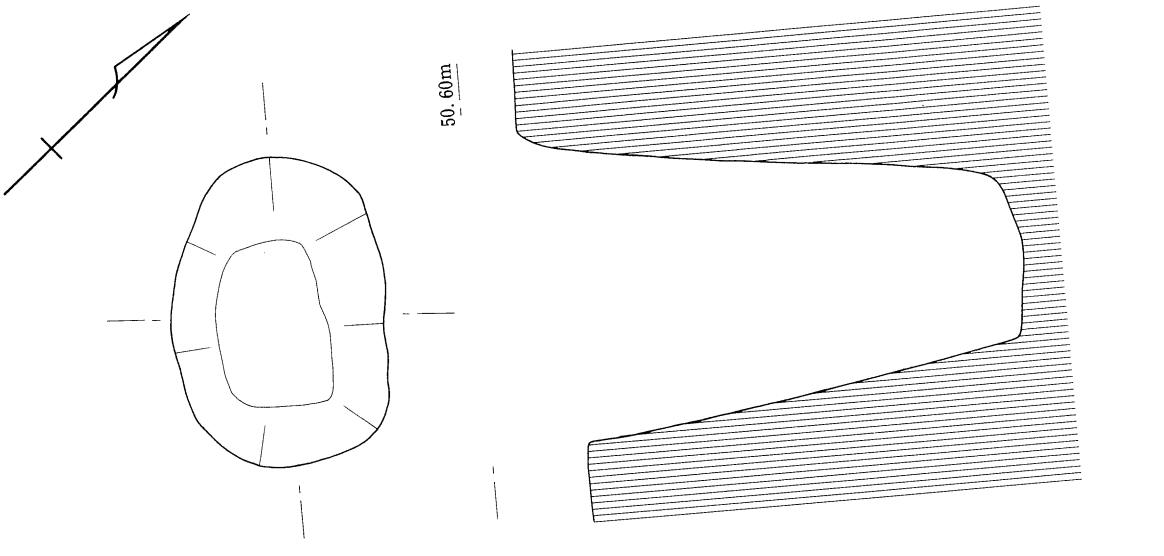
第44図　第16.17.18号土坑実測図

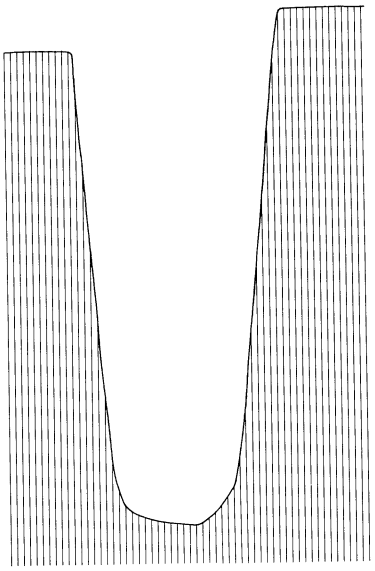


第45図　第20号土坑出土遺物実測図

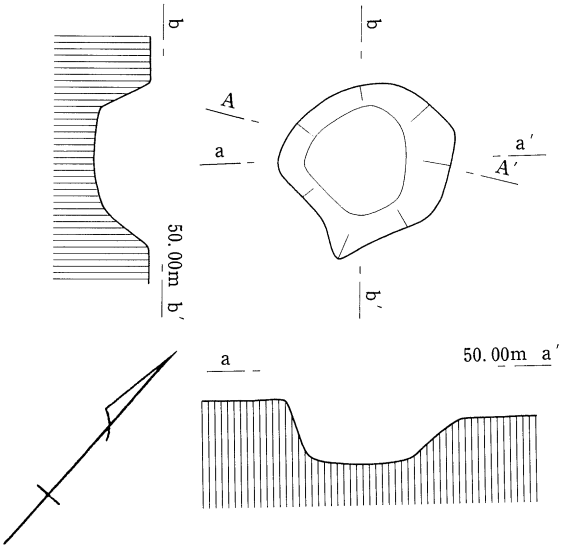


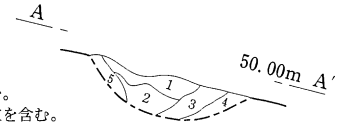
第46図　第19.20号土坑実測図





第21号土坑





第22号土坑

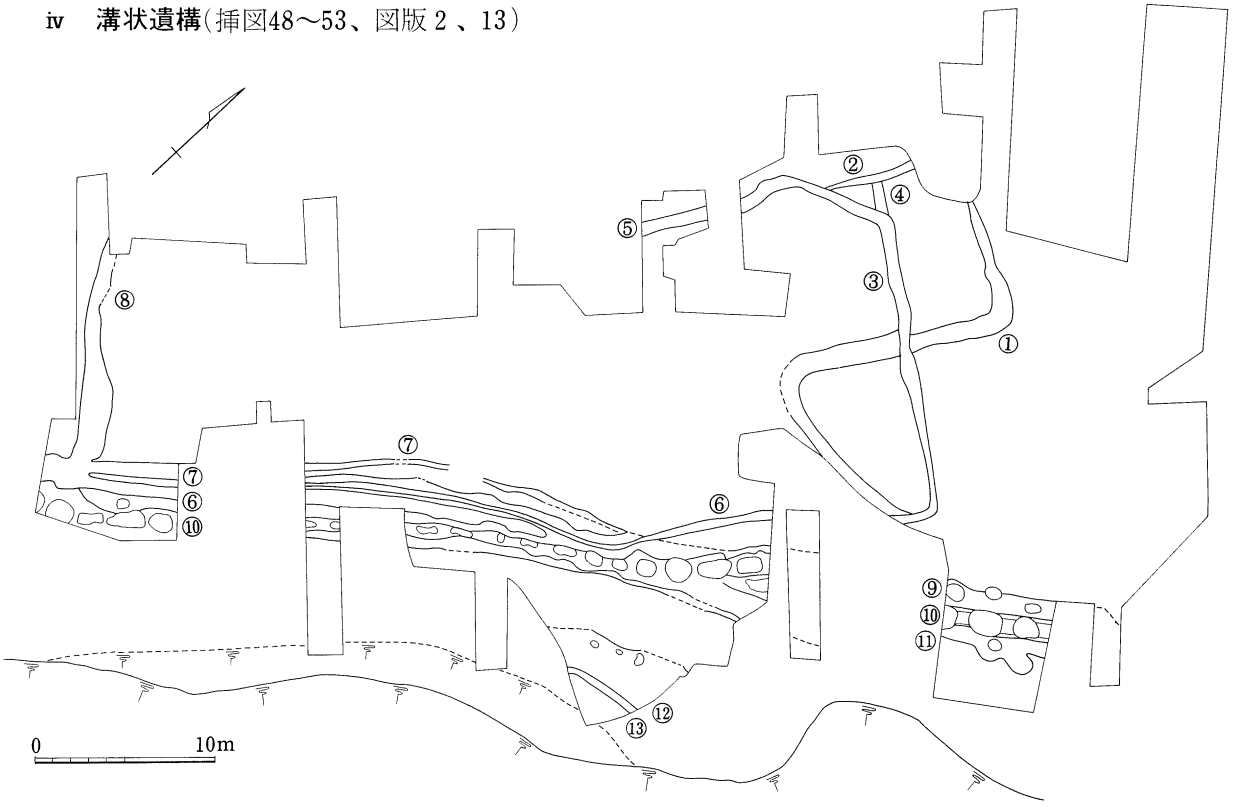
第22号土坑土層説明
1．黒褐色土。ローム粒を少量含む。
2．暗褐色土(少し暗い)。ローム粒を含む。
3．黒褐色土。軟質のローム粒を含む。
4．褐色土。軟質のローム土塊を多く含む。
5．暗褐色土。軟質のローム土塊を多く含む。

0　1　2 m
（2基とも同一縮尺）

第47図　第21.22号土坑実測図

されている。また、第16と21号土坑が、形態や覆土などから縄文時代の陥穴と考えている。また、第20号土坑から壺底部片が出土しているが、伴なうかは不明である。底径7.6cmを計り、外面は、縦方向のヘラミガキ、底部周辺は、ヘラケズリ、内面は、ヘラナデがなされる。焼成は良好、胎土に白色と茶褐色の微砂粒を含む。色調は、茶褐色。以上のように、各土坑の時期は、縄文から現代にいたる。

ⅳ　溝状遺構(挿図48～53、図版２、13)

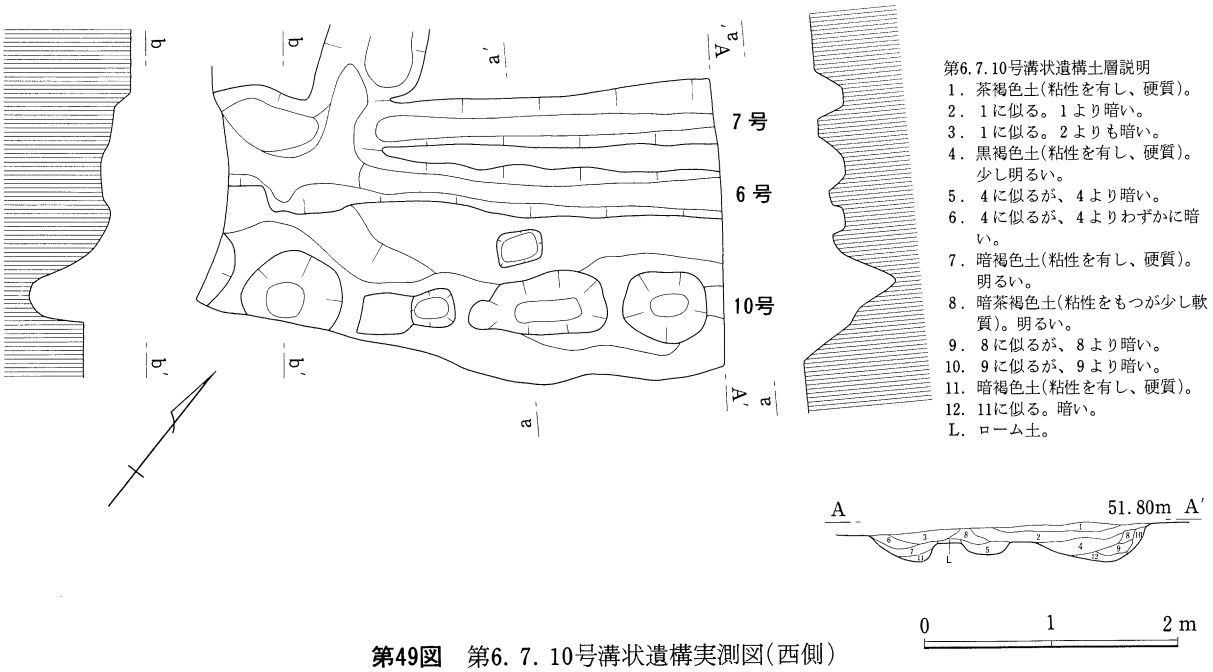


第48図　棒ケ谷遺跡溝状遺構全体図

溝状遺構は、13条検出されている。時期も中世から現代に到る。No.１～７号溝は、比較的幅が狭く、U字溝状を呈する。時期は、覆土や切り合いの状況から、明治以降の所産と考えている。地割りや耕作などの臨時廃水用に掘られたとも推定される。No.８号溝は、やや幅広く、浅い溝で、第10号溝を切っている。道路遺構とも考えられる。No.12、13号溝は、第１号古墳の周壕を切っており、また、第12号溝からは、陶器片や砥石片が出土している。第９、10、11号溝は、調査の都合上、３地区に分かれている。調査地区の南側を、東西方向に走っており、位置的には、台地端部にちかい地点である。東側では、三条の溝が同じ方向に切り合っているようであり、９、10、11号と名称している。北側を９号、中央を10号、南側を11号とする。第10号溝が９号と11号を切っている形で土層観察できる。また、第９号溝は、東側の調査地点以外は、検出されず、さらに、第11号溝は、西側の第５号住居跡付近で再び第10号と重複したのち不明である。第10号溝は、最も幅、深さともに大きく、幅1.20～2.25m、深さ22～35cmを測る。また、底部には、不整円形や不整隅円方形の土坑が１～2.5mの間隔をもって(土坑下端中心点間の距離)、並んでいる。土坑内の覆土は、ローム粒やローム土塊を少量含んでいる。各溝内の覆土は、ローム土塊を多く含む層が大部分を占め、人為的に埋没した可能

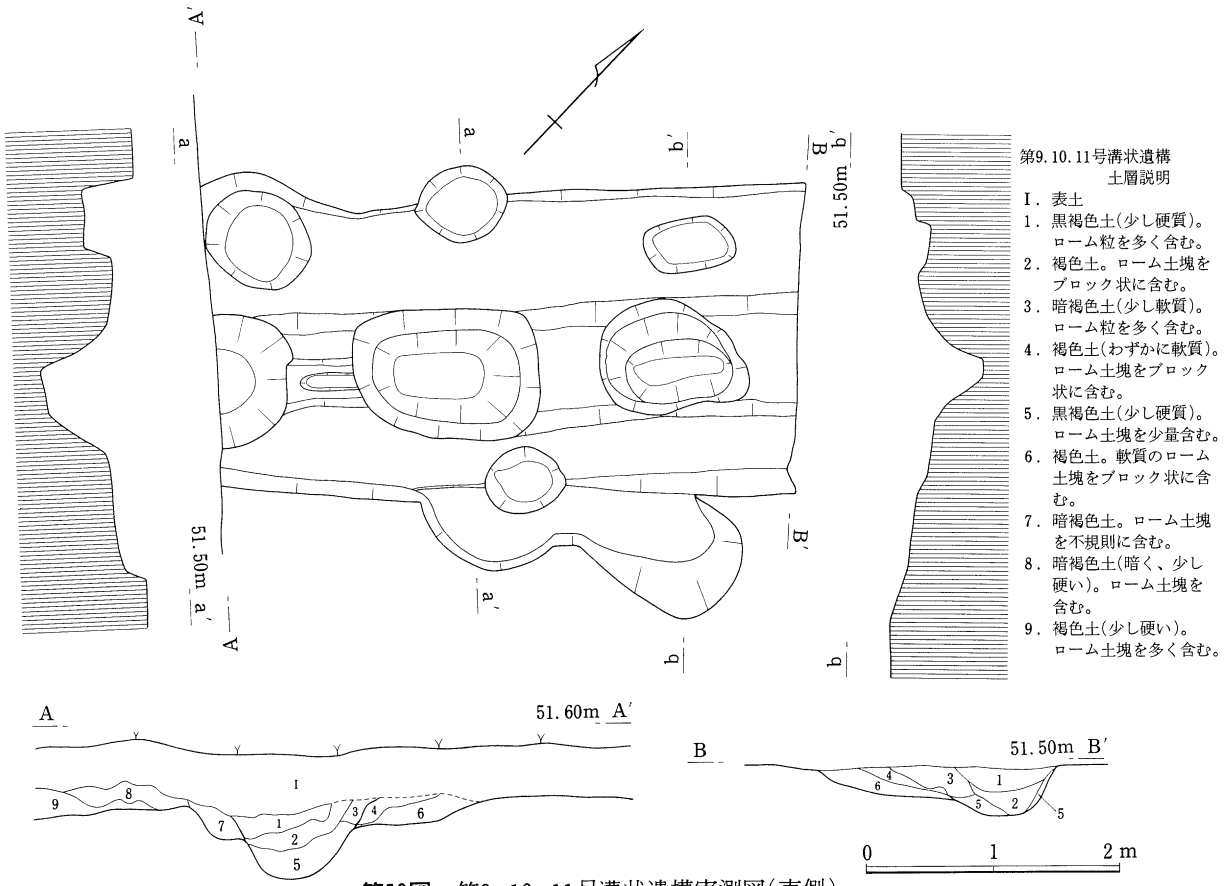
第３表　第10･12号溝内土坑(表単位cm)

番号	上端	下端	深さ
Ｐ１ａ	157×－	63×36	42
Ｐ１ｂ	64×－	51×－	15
Ｐ２	205×97	132×38	52
Ｐ３	168×137	89×52	35
Ｐ４	133×97	72×31	29
Ｐ５	99×61	74×42	16
Ｐ６ａ	－×78	－×40	9
Ｐ６ｂ	－	12×９	30
Ｐ７ａ	－×42	－	2
Ｐ７ｂ	85×57	57×34	11
Ｐ８	109×25	－	4
Ｐ９	51×43	19×19	13
Ｐ10	129×35	－	9
Ｐ11	130×25	－	7
Ｐ12	66×60	32×27	27
Ｐ13	39×28	９×６	14
Ｐ14ａ	－	９×６	4
Ｐ14ｂ	－	15×14	26



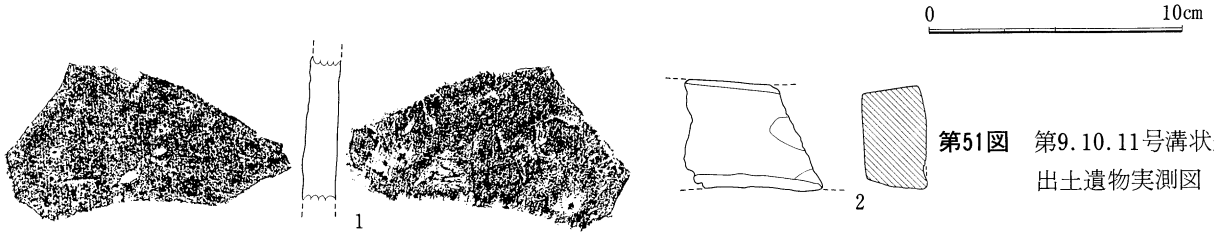
第6.7.10号溝状遺構土層説明
1．茶褐色土(粘性を有し、硬質)。
2．1に似る。1より暗い。
3．1に似る。2よりも暗い。
4．黒褐色土(粘性を有し、硬質)。少し明るい。
5．4に似るが、4より暗い。
6．4に似るが、4よりわずかに暗い。
7．暗褐色土(粘性を有し、硬質)。明るい。
8．暗茶褐色土(粘性をもつが少し軟質)。明るい。
9．8に似るが、8より暗い。
10．9に似るが、9より暗い。
11．暗褐色土(粘性を有し、硬質)。
12．11に似る。暗い。
L．ローム土。

第49図　第6．7．10号溝状遺構実測図(西側)

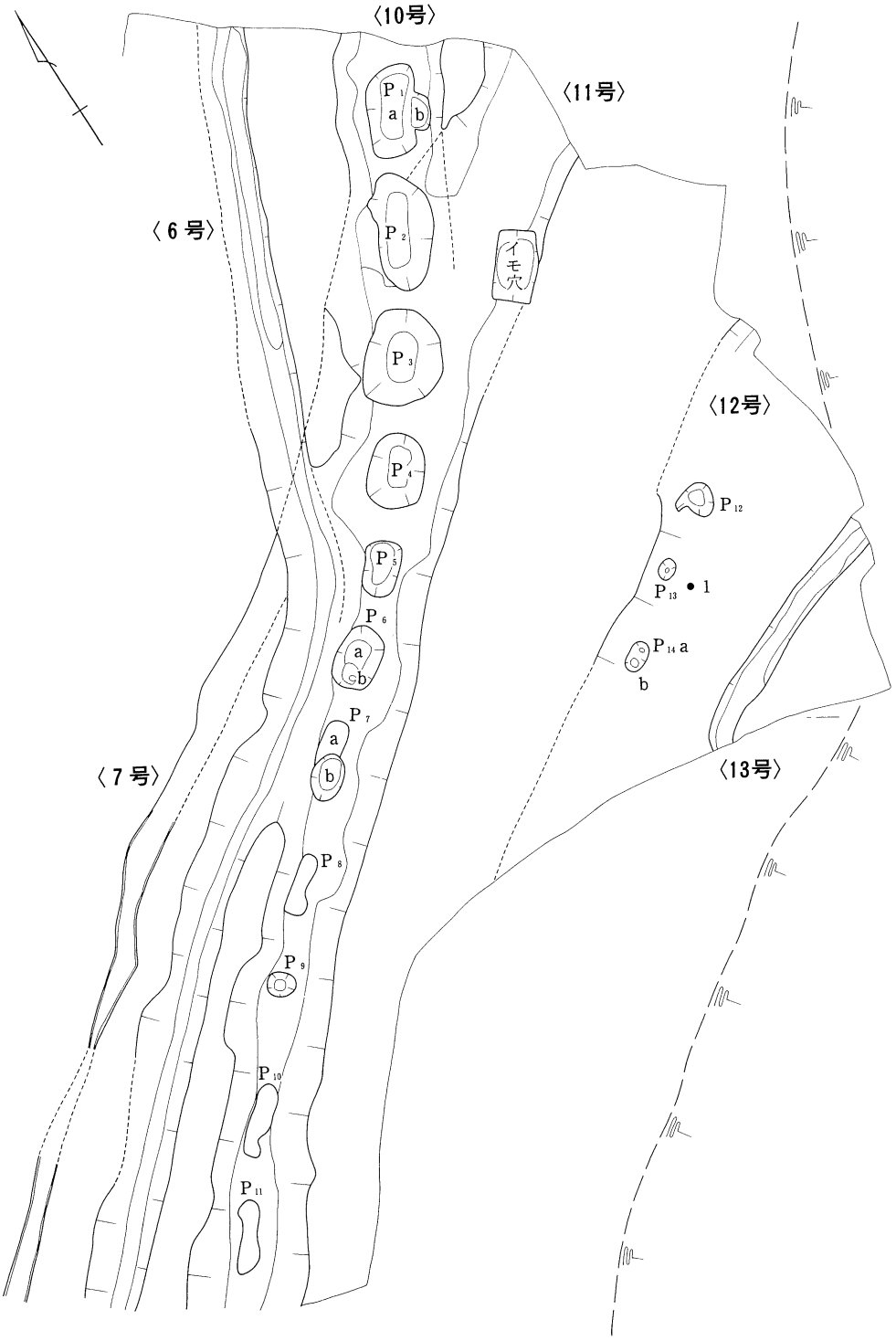


第9.10.11号溝状遺構土層説明
Ⅰ．表土
1．黒褐色土(少し硬質)。ローム粒を多く含む。
2．褐色土。ローム土塊をブロック状に含む。
3．暗褐色土(少し軟質)。ローム粒を多く含む。
4．褐色土(わずかに軟質)。ローム土塊をブロック状に含む。
5．黒褐色土(少し硬質)。ローム土塊を少量含む。
6．褐色土。軟質のローム土塊をブロック状に含む。
7．暗褐色土。ローム土塊を不規則に含む。
8．暗褐色土(暗く、少し硬い)。ローム土塊を含む。
9．褐色土(少し硬い)。ローム土塊を多く含む。

第50図　第9．10．11号溝状遺構実測図(東側)

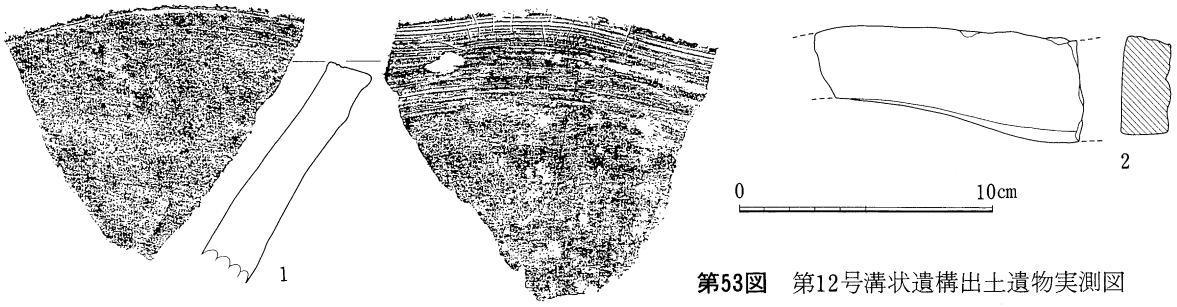


第51図　第9.10.11号溝状遺構出土遺物実測図



第52図　第6. 7. 10. 11. 12. 13号溝状遺構実測図

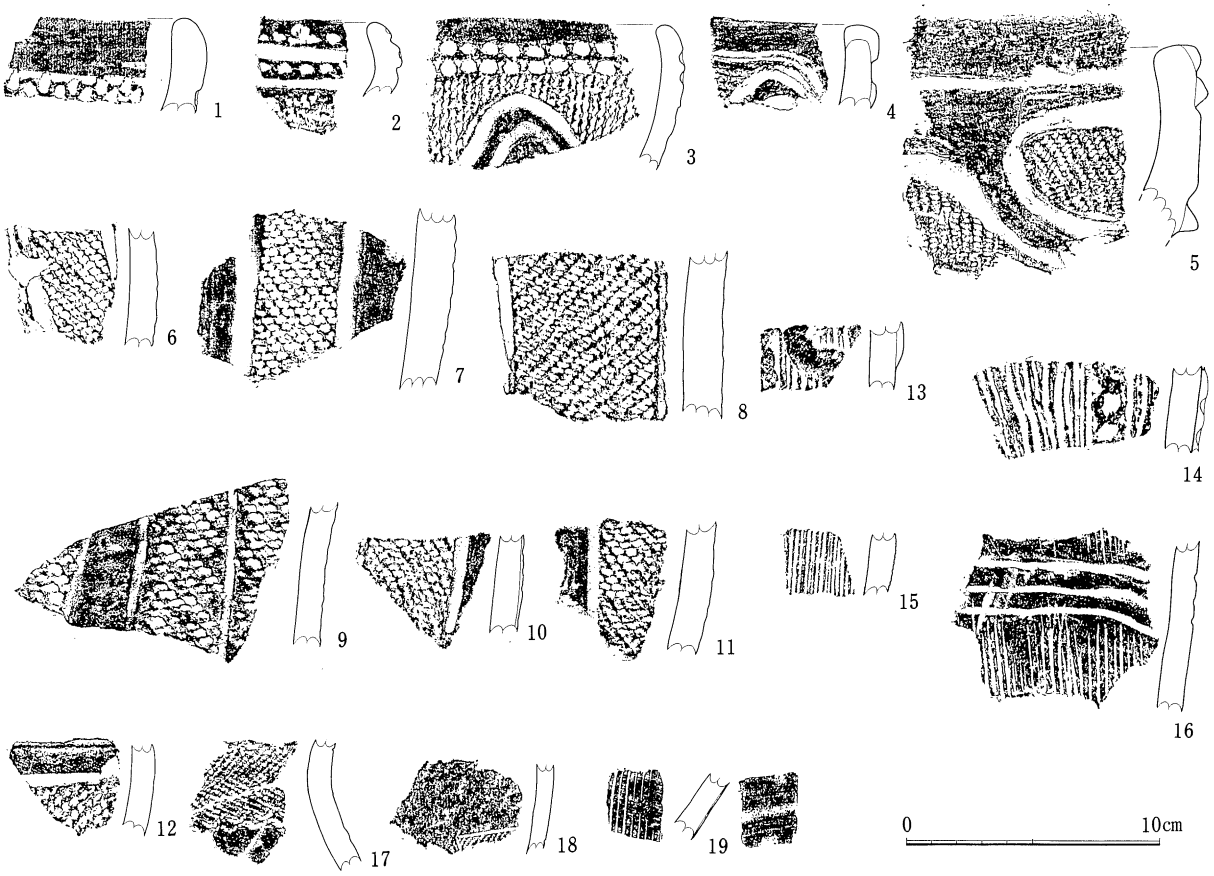
※第３表に対応



第53図　第12号溝状遺構出土遺物実測図

性が大きい。また、第10号溝と第12号溝の間には、部分的な調査ではあるが、幅2.24～3.48mの間隔が有り、その部分に土層観察から、ローム土塊を含む褐色土や暗褐色土の盛土と推測できる層が存在することから、両溝の間に土塁状の土盛りが存在し、また、第12号溝は第10号溝と平行して所在する可能性が伺える。さらに、第10号溝の東側調査地点からは、第12号溝から出土したと同様の陶器片と砥石片も出土しており、その関連性が推定できる。

v　その他の出土遺物



第54図　その他の出土遺物実測図

No.1は、口縁部に隆帯部をもち、下位は、横方向の沈線と連続刺突文の組み合わせ。No.2は、横位の2本の沈線間に連続刺突文、下位には、撚糸文を配する。No.3は、横位の2本の連続刺突文に下位は、撚糸を地文に、隆帯によって区画された弧文がみられる。No.4、5は、沈線によって区画された単節の縄文と磨消部分が弧状を形成する。No.6～12は、胴部片で、沈線と磨消部分及び斜縄文が施されている。No.13～16は、櫛状工具による平行線文と沈線や隆帯部などの構成である。No.1～17はいずれも、縄文中期前葉の所産であろう。No.17は、羽状縄文とS字状結節文を横位に配する。No.18は、沈線に区画された斜縄文で、おそらく山形文を形成しているとみられる。17、18は、弥生後期、No.19は、小片であるが、内面に縦位の櫛状平行線をもち、中世以降のスリ鉢と考えられる。

vi　ま　と　め

以上のように、棒ケ谷遺跡は、縄文時代から現代にいたる複合遺跡であり、縄文時代では、第16号、21号が陥穴と推定される。この他にも、同時期の土坑は存在するとみられるが、伴出遺物が少なく断定はできない。しかし、北西側に近接する瓜ケ岱貝塚などの存在から、当遺跡が養老川を望む台地上

に立地し、当時の生活環境に不可欠の地点であったことは、事実であろう。また、第1号土坑は、五領式期頃の所産とみられる。さらに、弥生時代後期から古墳時代前期にいたる竪穴住居跡が注目される。今回の調査では、11軒分が検出されている。竪穴住居跡の形態や出土遺物から、主に弥生時代後期と古墳時代前期の2時期に分けられよう。第1号住居跡は、多くの土器を出土しているが、高坏は、坏部が小型の椀状を呈し、脚部は弧を描いて広く張り出す。内外面とも、丁寧なヘラミガキがなされる。甕は、波状口縁をもち、粘土紐接合痕を5段残し、外面は、ヘラミガキ、内面がヘラナデのものと、単純口縁で、外面は、刷毛目調整、内面は、ヘラミガキのもの、及び、外面がヘラナデ、内面がヘラミガキの3種が認められる。五領期である。第2号住居跡は、脚部に穿孔の有る高坏、小型で椀状の受部をもつ器台、外面が、ヘラミガキを主とする小型の壺などから五領期の古い段階。第3号住居跡は、小片のみであるが、S字状結節文や連続山形文をもつ壺片、粘土接合痕を残し、外面は、刷毛目調整とヘラミガキ、内面は、ヘラミガキ、接合痕が段を呈し、端部に刻目を有する甕などから、弥生後期とみられる。第4号住居跡は、1片のみであるが、大きく張った胴部をもつ壺片? で、外面はヘラミガキ、内面はヘラナデがなされている。おそらく、五領期の所産であろう。第5号住居跡は、高坏片のみであるが、体下位に稜をもち、全面ヘラミガキがなされている。竪穴の形態などから、弥生末頃の所産であろうか。第6号住居跡は、壺か甕の底部片のみであるが、同じく竪穴の形態から、五領期とみられる。第7号住居跡は、椀(鉢)が、複合口縁で、羽状縄文をもち、端部には、刻目を有する。また、穿孔もなされている。甕は、粘土接合痕を1段有し、端部は、刻目がなされる。高坏は、体下部に明確に稜をもっている。さらに、小片であるが、口縁部が、ユビによる押圧で波状をつくり、ヘラ描きの斜行沈線文を配するなど、弥生後期と考えられる。第8号住居跡は、内外面に刷毛目調整がなされ、口縁部は、くの字に立ち上がり、波状口縁をもつ甕、高坏は、脚部に穿孔がなされ、坏部下位に稜をもち、全面ヘラミガキ、脚部内面は、刷毛目調整がなされる。また、小型の壺(坩)の存在などから五領期の古い段階と推定される。第9号住居跡は、破片ではあるが、複合口縁で羽状縄文が施され、端部に刻目がなされる壺と鉢(椀)、波状口縁をもち、粘土接合痕を胴上部に1段もち、端部が押捺される甕(内外面ヘラナデ)などの存在から、弥生時代後期と考えられる。第10号住居跡は、壺口縁部片2点のみであるが、複合口縁で、全面ヘラミガキがなされ、頸部は細い点などから、五領期とみられる。第11号住居跡は、ヘラナデやヘラミガキがなされる椀(鉢)と小片で、山形文やS字状結節文を有する壺及び、粘土接合痕を1段残し、端部が押捺される甕片などから、弥生時代後期末頃の所産と考えている。以上これら11軒は、出土遺物が少量の住居跡もみられ、また、多少の時期差もあるが、弥生時代後期〜末頃が第3、5、7、9、11の5軒、古墳時代前期が第1、2、4、6、8、10号の6軒と推定している。円墳については、周壕部分のみの検出であり、出土遺物も、土師器坏が1点である。6世紀前葉の所産であろうか。また、墳丘は、調査前から高まりは、認められず、調査時点でも土層観察からも確認できなかった。主体部は、墳丘内に存在したと思われる。周辺の養老川の望む同台地縁辺部には、安須古墳群が存在し、本墳も、その1基である。南東側の台地端部に検出された第9、10、11、12号溝状遺構は、台地端部に添うように存在し、第10号の底部には、土坑が並んで存在する。また、第10号と12号の間には、盛土が確認されており、土塁状を呈していたとみられる。出土遺物は、わずかであるが、中世の所産と考えられ、付近に位置する高坂砦に関連した施設とも推測できる。北東に隣接する薬王寺には、中世(室町期)の五輪塔片も散乱している。

(2)永田遺跡

a. 遺跡の位置と環境(第55図)

永田遺跡は、千葉県市原市久保950地先に所在する。当地は東京湾から養老川を約25kmほど遡行した、養老川中流域の一隅に位置し、上総丘陵の山懐に抱かれた「久保」の集落内にあたっている。

この地は、古い時期の自然短絡によってできた地理的景観を良く残しており[1]、旧養老川の流路には現在水田が営まれている。曲流部によって囲まれた微高地は、しばしば「島」「中島」などと呼ばれるが、久保の中島は短絡部に近い「久留里Ⅱ面」の河岸段丘面と、曲流部の先端へ向かって鶴首状に延びる「久留里Ⅲ面」の河岸段丘面とによって構成されている[2]。これらの河岸段丘面は、いづれも、新期関東ローム層を欠くものであって、殊に久保の「久留里Ⅲ面」は、旧養老川の曲流作用によって幅が極端に狭くなっており、表土の流出が顕著である。この段丘面に民家が建てられ、あるいは畑などに利用されるようになったのは戦後のことのようで、耕作も秋口から冬場にかけてをピークとしている。これは、表土層が浅く、盛夏には根が枯れてしまうからだそうで、地味の痩せた生産性の低い段丘面と言うことができる。

永田遺跡は、この段丘面上に位置している。周囲の遺跡としては、永田遺跡と同時代の遺跡として永田・不入窯をあげることができる。永田・不入窯は永田遺跡の所在する河岸段丘面の斜面部に築窯された奈良時代〜平安時代の須恵器窯跡であり、1974年以来3次にわたる確認調査が実施されてきている。[3]

b. 調査の内容

i 調査に至る経緯

永田遺跡の所在する市原市久保字永田周辺は、「永田・不入窯跡」の所在地として古くより知られてきた地域である。

この窯跡については、1974年の国士館大学による調査以来、数次にわたる確認調査などが実施されてきており、二十数基の須恵器窯からなる窯跡群であることが明らかになってきている。窯業生産の脆弱さが指摘されている千葉県下の中では、千葉市の土気地区に所在する南河原坂第4遺跡に[4]次いで大規模な窯跡群である。

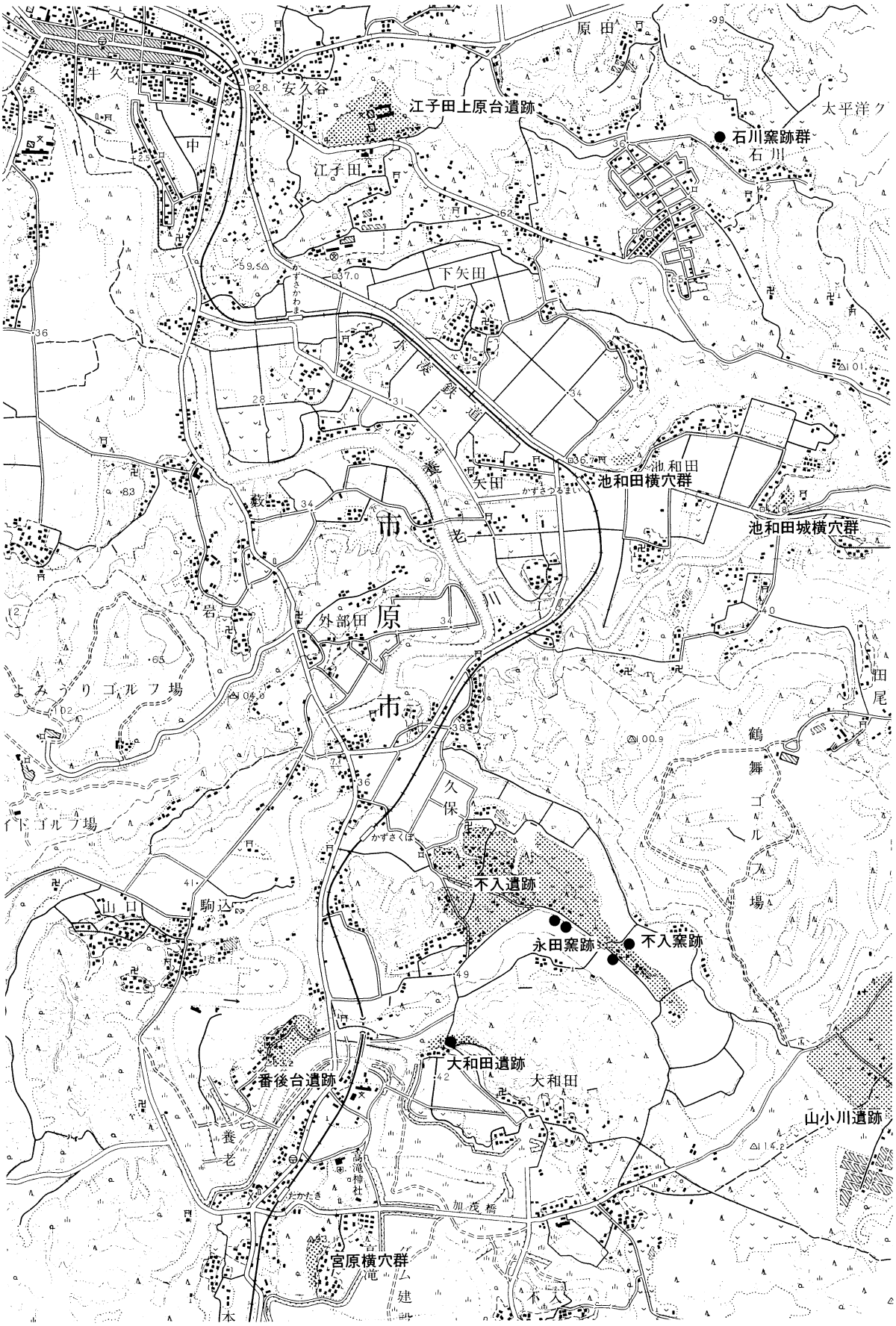
さて、千葉県教育委員会では、1983年より3カ年にわたる「生産遺跡詳細分布調査」を計画し実施してきた。この調査は、製鉄・製塩・牧・条理制遺構・窯業・玉造などの生産遺跡について、千葉県下の分布と現状を把握するために実施したものであった。[5]

本遺跡は、この分布調査において永田・不入窯跡の現地踏査を実施した際に発見されたものである。発見時の現況は、専用住宅建設のための宅地造成作業中であった。

このことから、市原市教育委員会では原因者に対して、宅地造成を一時中断するよう依頼するとともに、今後の取り扱いについて協議を行った。

この結果、事業が既に着工していることから、市原市教育委員会文化課が発掘調査を実施することとなった。

調査は、1984年2月28日に実施した。



第55図　永田遺跡周辺の地形と遺跡

ii　発掘調査の方法と経過

調査は、重機による遺構の確認から実施した。

表土は、あらかじめ一部が宅地造成のため削平を受けていたが、2本のトレンチによって遺構の有無を確認した。この結果、表土除去後の清掃によって確認された遺構は、竪穴式住居跡1軒のみであった。

このことから、調査区の拡張による遺構のプラン確認を行い、ほぼ中軸線上に土層観察用のベルトを残して覆土の掘り下げを行った。

竪穴式住居跡の覆土からは、土師器・須恵器・窯壁・炭化物などのほか、陶土と考えられる粘土塊が出土している。

土層の観察と記録の後は、遺構の精査につとめ、平面図と写真による記録を実施した。

尚、調査の緊急性から、記録には公共座標による基準点を用いることができなかった。

今回の調査で出土した遺物は、整理箱に1箱弱であった。図面・写真類とともに、市原市教育委員会に保存し管理している。

整理作業については、有通の方法を用いた。胎土分析などは実施していない。

iii　竪穴式住居跡（第56図）

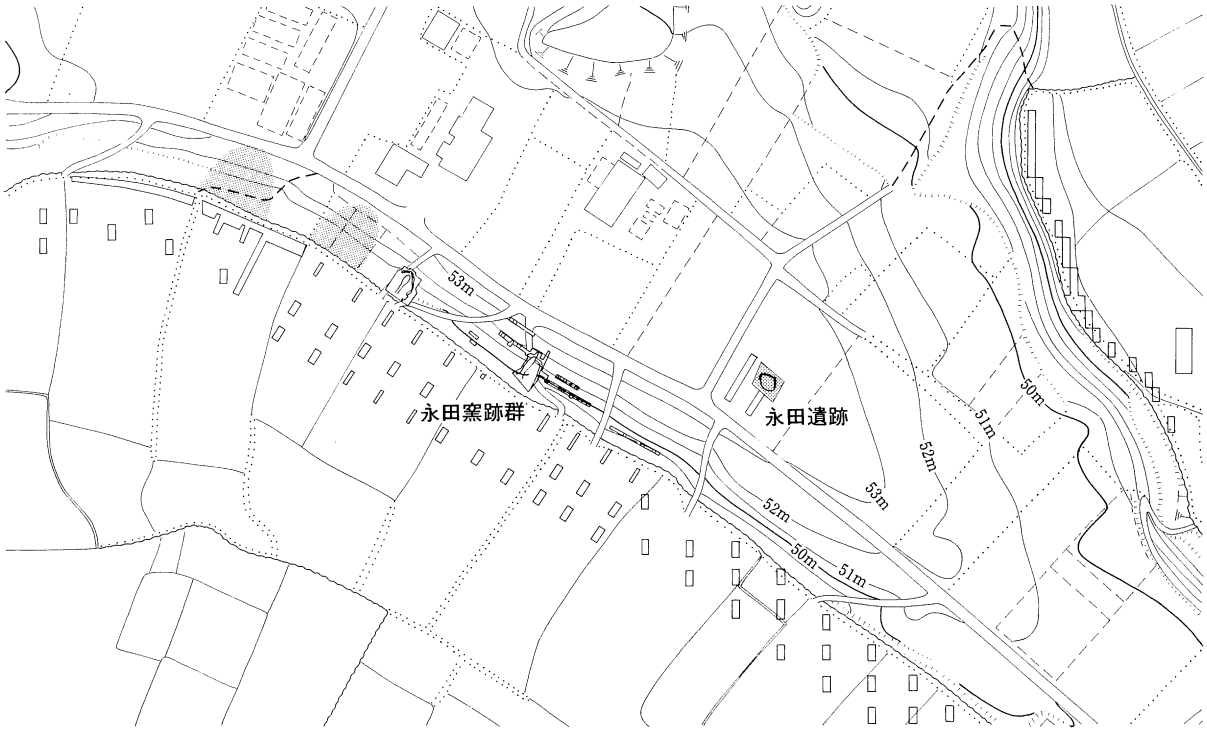
遺構は、調査区の北東側に検出されている。標高は、約53mであり、水田面との比高差は5mを測る。宅地造成中の発見であったため、発見時には既にプランの一部が露呈している状況であった。平面形体は略台形を呈し、東側壁面の方位は、ほぼ磁軸と一致している。壁の立ち上がりは、平均してほぼ30cm程度であり、床面からは緩やかに立ち上がっている。床面はほぼ平坦である。壁溝は検出されなかった。床面内のピットは東側の三ケ所で検出されているが、いづれも床面から15cm程度掘り下げられているにすぎない。床直面から炭化物が多く出土している。覆土は黒色土を主体とするものであり、自然堆積であった。カマドは検出されていない。

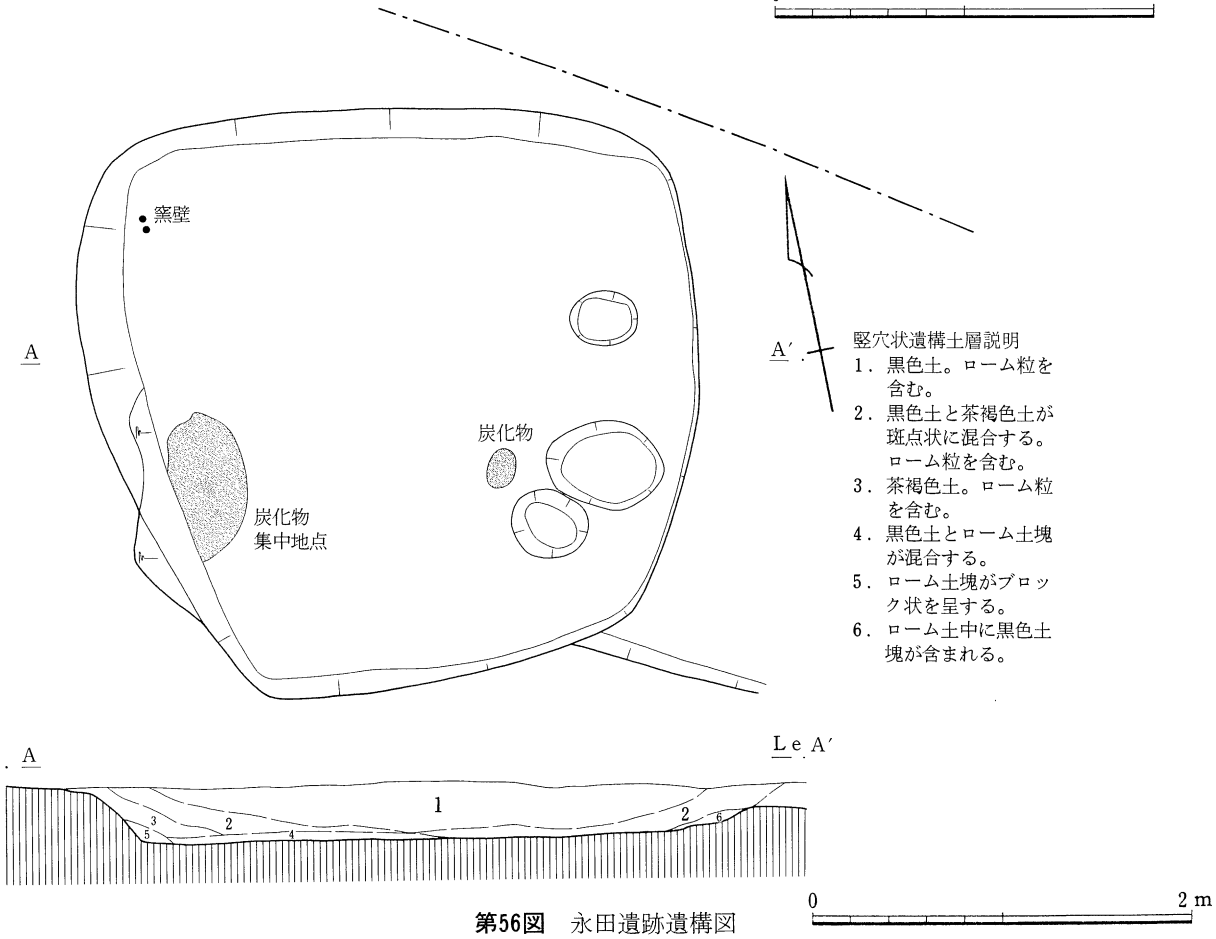
出土遺物は、床直上の炭化物のほか、土師器・須恵器・陶土と思われる粘土塊などが出土しており、殊に北西コーナー付近より窯壁が出土している。窯壁には須恵器片の融着も認められており、近隣に所在する永田・不入窯のものであることは明らかである。立地や出土遺物からみて、永田・不入窯にかかわる工房跡の一軒と考えられよう。なお、ロクロピットは検出されていない。また、床直面の炭化物のみからは、本住居跡が焼失住居か否かは判断しがたい。

iv　出土遺物（第57図）

今回の調査によって出土した遺物類は、陶磁器片・須恵器類・土師器類・窯壁・炭化物であり、整理箱に一箱弱であった。このうち、同上の住居跡に関連すると考えられるものは、須恵器類・窯壁・炭化物であり、土師器は時期を異にしている。図示できたものは、第57図1～11の11点にすぎなかった。以下、土師器から順に簡単な説明を加えていきたい。

第57図の5に掲げたものは、丸底を呈する土師器杯である。住居跡の覆土中から出土している。推定される法量は、口径10.6cm・器高3.1cmである。類例としてcf－1に市原市奉免字沢地先に所在した沢遺跡[6]の土師器杯を載せておいた。cf－1は、cf－2およびcf－3と共伴しており七世紀後半に位置付けられよう。なお、今回の調査区からは、66片の土師器片が出土しているが、全て古墳時代の所産と考えられる。1987年に実施した現地踏査では[7]、永田遺跡の周辺部に、古墳時代後期の包蔵地が





第56図　永田遺跡遺構図

拡がっているものと想定される。住居廃絶後の流れ込みであろう。

第57図1～3に掲げたものは、平底を呈する須恵器杯である。今回の調査では、杯類の破片が住居跡覆土より35片出土しているが、このうち接合したものは18片5個体分であった。また、杯類については、実測したもののほかに4個体以上の破片が認められたが、時期差等につながる技法の違いはみられなかった。

1の推定法量は、口縁部径13.1cm、底部径7.8cm、器高3.9cmである。体部下端および底部全面をL回転の回転ヘラケズリで整形しており、従って切り離し技法は観察されない。色調は明褐色を呈し、体部上半から口縁部にかけて顕著なロクロ成形痕を残している。胎土中には、石英粒や白色針状物が観察される。坊作編年のⅣ期に類似した形態のものがみられる。技法的には、以下に掲げる2と近いが焼成があまく、火襷も観察されない。

2の推定法量は、口縁部径13.0cm、底部径8.4cm、器高3.9cmである。体部下端および底部全面をL回転の回転ヘラケズリで整形している。切り離し技法については、不詳ではあるがヘラ切りの可能を示唆するものが、底部外面中央に観察される。色調は灰色を呈し、焼成は良好である。内面に火襷痕が残されている。外面には火襷痕は認められていない。胎土には、石英粒や白色針状物と共に、赤褐色のスコリアが若干ではあるが観察される。底部の切り離しにヘラが用いられているとするならば千葉市土気地区に所在した南河原坂第四遺跡に所在した須恵器窯の展開や[8]や、永田、不入窯1974年調査[9]資料中のヘラ切りによる資料とも比較してみる必要があろう。

3の推定法量は、口縁部径14.0cm、底部径8.0cm、器高3.6cmである。体部下端および底部全面を回転ヘラケズリによって整形しているが、切り離しの技法は回転糸切り離しである。色調は灰白褐色を呈している。焼成はややあまい。胎土には石英粒、赤褐色スコリアが観察される。2にも観察された赤褐色粒の混入は、永田、不入窯の南にあたる市原市大和田緑岡地先に所在した大和田窯の製品にもみられている。[10]

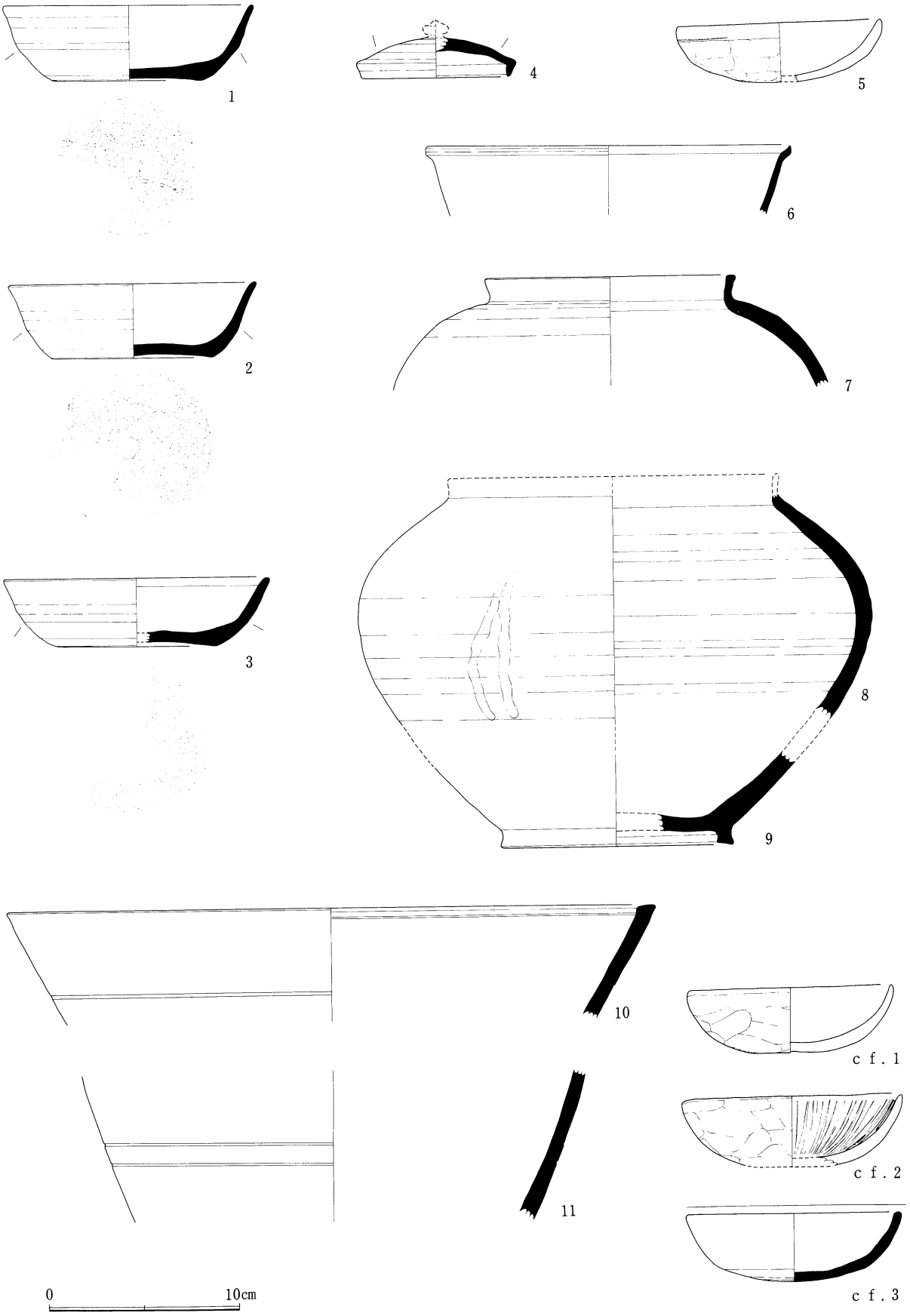
さて、1～3に載せた須恵器杯は、切り離し技法に違いのあるものがみられるものの、胎土、法量、形態において差異は認められない。殊に、体部外面の下端を回転ヘラケズリにて整形する点は共通の要素であるが、これまでの窯跡調査ではこの種の形態が知られておらず、今後の課題として残す結果となった。

第57図4に掲げたものは、小振りの蓋である。今回の調査で出土した蓋類は、ここに掲げたもの一点のみであった。3片の破片が接合したものである。おそらくは、コップ状の容器とセットをなすものであろう。推定される法量は、口縁部径7.6cm、残存高2.2cmである。色調は灰色を呈している。焼成は良好であり、内面中心部に自然釉の融着が認められる。焼成時に身部と重ね焼きをしたためであろう。1987年度に実施した永田窯跡群のDⅣy－43区に類例を求めることができる。[11]

第57図6は大振りの鉢であろうか。口縁部の小片一点であるので、法量の推定が難しい。口唇部を外側へややつまみ上げている。薄手で焼成も良好である。

第57図7～11は、須恵器の壺・甕の類である。今回の調査によって出土したこの類の破片は、18点であり、接合したものは、8に掲げた1個体3点のみであった。他はいづれも小片である。

9に掲げた壺の底部内面には、写真図版に示すとおり、窯壁の付着がみられる。8と同一個体であろうが、中間部が欠失しており明らかではない。



第57図　永田遺跡出土遺物実測図

10、11は甕の頸部である。外面に沈線の巡る大型の製品であろう。これまでの窯跡部分の調査では主に小型の製品が知られてきており、品種構成の広さと共に一つの特徴として考えてきたが、今後、窯の同定をも含めて検討する必要があろう。

図示したもののほか、住居跡北西コーナー付近から、窯壁が出土している。出土点数は5点であったが、このうちの一点に高台付杯の高台部分の付着しているもの(写真図版参照)が含まれている。

c. ま と め

以上が永田遺跡の調査報告である。住居跡1軒のみの、狭い面積の調査ではあったが、実体の不明な永田・不入窯跡にあって、良好な資料の追加を行うことができた。

本住居跡については、共伴遺物が須恵器窯に関連すると思われる製品・窯壁・炭化物・粘土のみであったことと、カマドを持たない建物であったこと、永田窯跡群の隣地に立地することなどからみて永田窯跡群の工房施設の一つと考えることができよう。

しかし、本住居跡がどの窯の操業にかかる工房施設であるかは、明らかではない。すなわち、杯類の体部外面に回転ヘラケズリを施したり、甕類の頸部に沈線文を施こしたりする特徴は、比較的に同定しやすい要因であるにもかかわらず、窯跡出土資料の中には今のところ類例を見出せないのである。窯跡の新発見をも含めて、今後に残された課題である。

また、杯類にみられる切り離し技法についても、「糸切り」と「ヘラ切り」とが混在するのであるならば、南河原坂第4遺跡の古い段階[12]との関係を整理する必要が生じてこよう。資料の増加を待って検討したい。

註

(1) 藤原文夫「養老川」『市原市史　別巻』市原市教育委員会(1979)

(2) 徳橋秀一ほか『姉崎地域の地質』(1984)地質調査所

(3) 第一次調査‥国士館大学(大川清)による窯跡の確認および一部本調査(1974)
第二次調査‥(財)市原市文化財センターによる灰原範囲の確認調査(1984)
第三次調査‥(財)市原市文化財センターによる窯跡周辺地区の灰原確認調査(1986～1987)

(4) 坂詰秀一ほか『南河原坂第4遺跡調査概要』千葉市土気地区遺跡調査会(1984)など

(5) 須田　勉ほか「Ⅳ. 窯業」『千葉県生産遺跡詳細分布調査報告書』千葉県教育委員会(1986)

(6) 米田耕之助ほか『沢遺跡』(財)市原市文化財センター(1987)

(7) 永田・不入窯跡群の第三次調査にあたる窯跡周辺地区の灰原確認調査をおこなった際に、併せて現地踏査も実施した。

(8) 倉田義広「Ⅳ　生産遺跡　2. 下総の須恵器窯」『房総における歴史時代土器の研究』房総歴史考古学研究会(1987)

(9) 大川　清ほか『千葉県市原市　永田、不入須恵窯跡調査報告書』千葉県教育委員会(1976)

(10) 山口直樹「3. 大和田遺跡」『第2回　市原市文化財センター遺跡発表会要旨』(財)市原市文化財センター(1987)

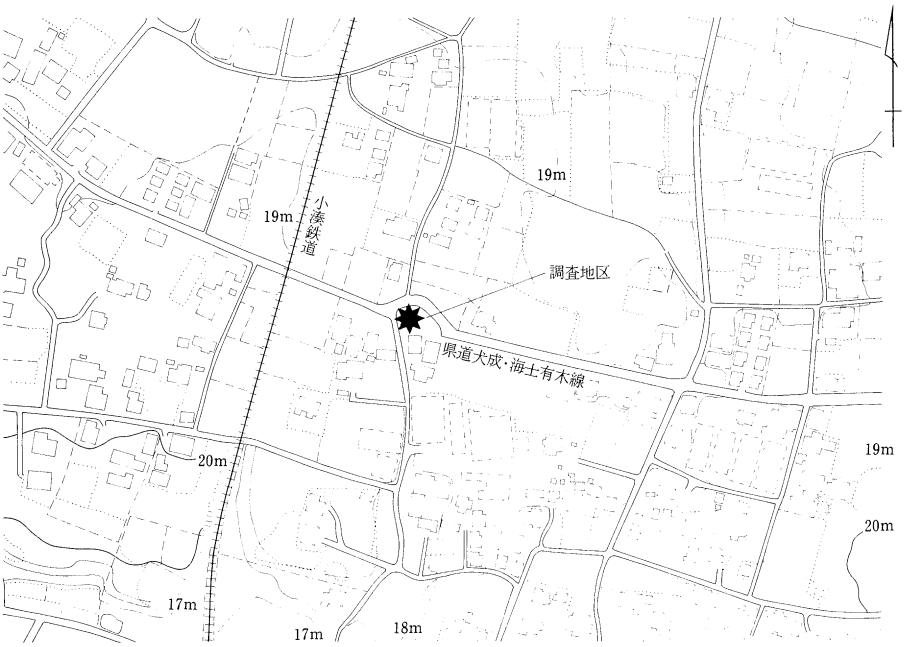
(11) 田所　真『市原市　永田・不入窯跡』(財)市原市文化財センター(1989)

(12) (8)に同じ。

(3)海士有木遺跡

a. 遺跡の位置と周辺の環境

海士有木遺跡は、市原市海士有木字上葉様1、589地先に所在する。本書では、「海士有木遺跡」と呼称するが、遺跡台帳では、「海士遺跡」に含まれる(註1)。当地は、養老川中流域の右岸台地上で、東京湾の旧海岸線からは、約8km入った地点である。標高は、約17mで、層に関東ローム層が確認できる。(註2)調査地は、その台地南側縁辺部より約150m北に入った地点の平坦部である。周辺には、北東約1kmの一段高い台地上(標高約55m)に縄文時代中～後期の環状を呈する山倉天王貝塚(註3)、北約1.5kmに、後～晩期を中心とする西広貝塚(註4)が存在する。また、北西約2.5kmには、弥生～古墳時代等の集落跡で、小銅鐸を出土した天神台遺跡(註5)が、さらに、古墳時代では、当遺跡と同じ台地上の西約300mに、前方後円墳2基を含む、海士古墳群(註6)、北側から東側の一段高い台地上に、人物埴輪や円筒埴輪を出土した山倉古墳群(註7)、横穴式石室をもつ、福増1、2号墳(註8)、前方後円墳2基などを含む、古宿古墳群などが所在する。東北東約700mの距離にある池ノ谷遺跡は、平安時代の井戸跡などが検出されている(註9)。中世では、南東約600mに、単郭山城の小野山城跡(註10)、当調査地を含めた台地周辺一帯が蟻木城跡(註11)である。



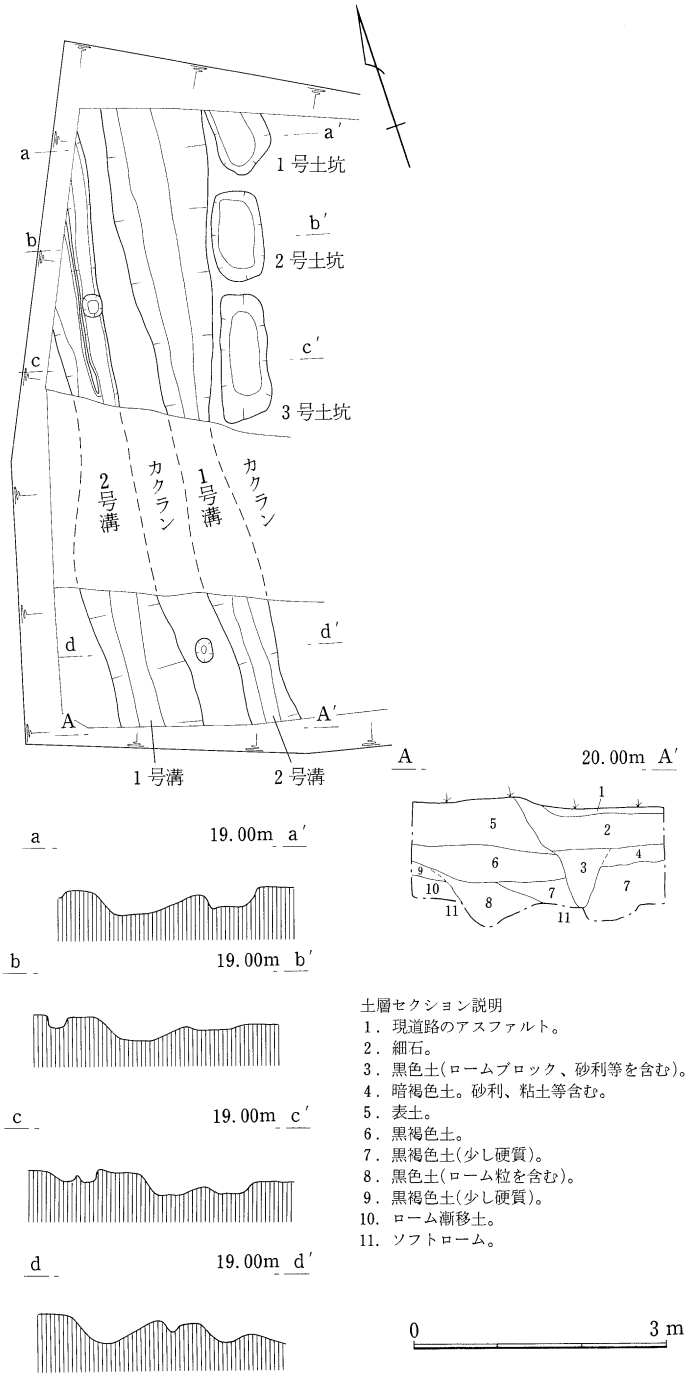
第58図 海士有木遺跡調査地区周辺地形図

(註1)「市原市埋蔵文化財分布図－北部編－」昭和63年、市原市教育委員会。
(註2)「市原市の地形」木村泰治、昭和53年、『市原市史(別巻)』
(註3)「千葉県の貝塚」昭和58年、千葉県教育委員会。
(註4)「西広貝塚」米田耕之助他、昭和52年、上総国分寺台調査団。など。
(註5)「天神台遺跡発掘調査概報」對馬郁夫、谷島一馬他。昭和50年　市原市教育委員会。
「千葉県市原市天神台遺跡出土の小銅鐸」 浅利幸一。昭和58年。考古学雑誌第68巻第3号
(註6)註1と同じ。
(註7)「山倉1号墳出土の人物埴輪」。米田耕之助。昭和51年。古代59・60合併号。
(註8)「福増1、2号墳」安藤鴻基他。昭和42年。『市原市周辺地域の調査』 市原市教育委員会。
(註9)「池ノ谷遺跡」田所真、昭和60年。『池ノ谷遺跡・福増遺跡』 (財)市原市文化財センター
(註10)「小野山城」落合忠一他。『日本城郭大系　千葉・神奈川』 昭和55年。新人物往来社。
(註11)「蟻木城」 註10と同じ。

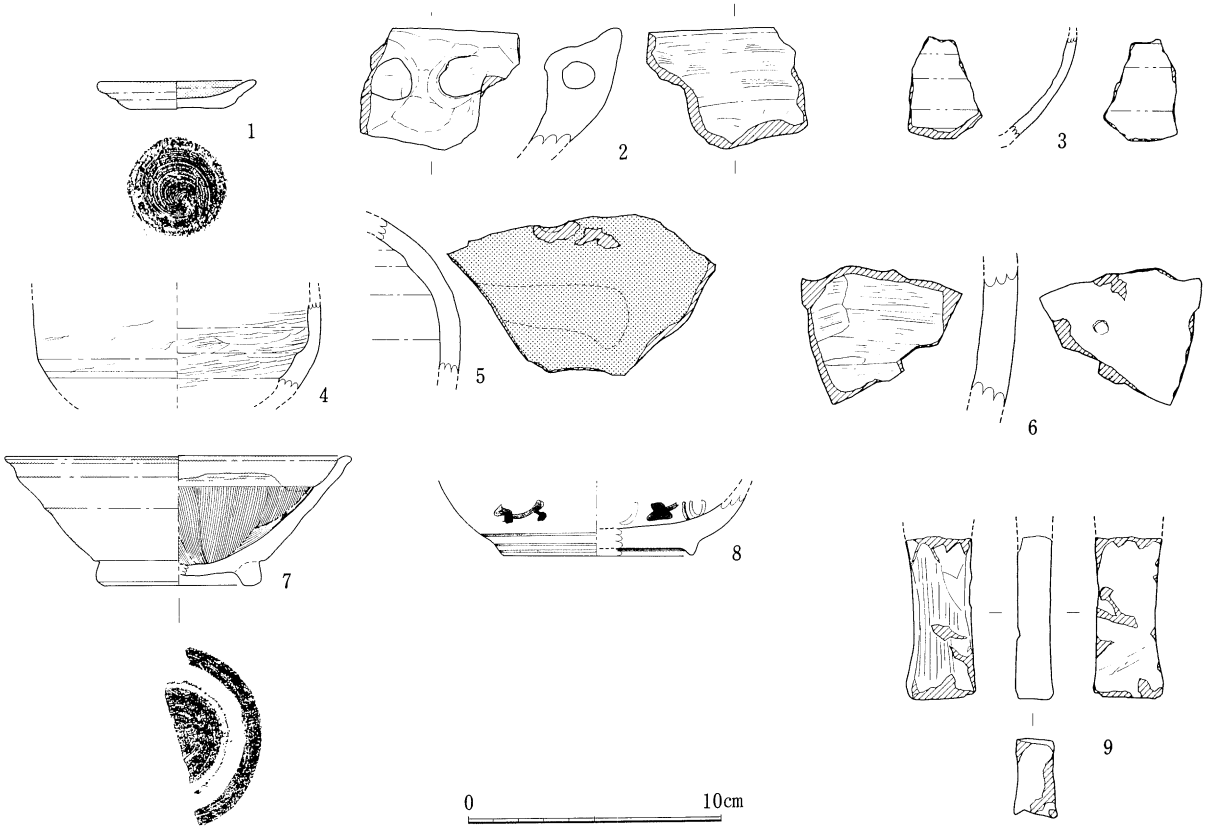
b. 調査内容

発掘調査は、千葉県水道局による水道管埋設に伴ない、3ケ所にわたり削除される部分を千葉県教

育委員会と市原市教育委員会で立合い調査した結果、1ケ所について、溝などの遺構が確認されたため、昭和54年9月18日～19日に実施した。現況は、県道として利用され、アスファルトなどが敷かれており、重機によって上部攪乱層を取り除いた後に遺構を調査した。調査面積は、約34㎡とわずかな範囲である。検出した遺構は、南北方向にほぼ平行して走る2本の溝と土坑3基である。溝は、両溝とも細く浅い。東側の第1号溝は、立ち上がりは、緩らかで、底は狭いが、ほぼ平坦である。主軸方位は、N－70°－Eを示し、幅は、上端55～100cm、下端16～45cm、深さは、16～27cmを測る。下端の層位は、ハードローム層内のレベルである。西側の第2号溝は、第1号溝と25～56cmの間隔をおいて接近し、北側では、2方向に分岐する。また、南側ほど深くなる。主軸方位は、N－50°－Eを示し、幅は、上端47～118cm、下端9～32cm、深さは、14～32cmを測る。3基の土坑は、第1号溝の北東側に並び、第1号土坑は、北側が未掘である。各々、平面形体は、不整の隅円長方形を呈し、浅い。大きさは、第1号土坑が、上端短軸60cm、下端短軸32cm、深さ20cm、第2号土坑が、上端長軸105cm、短軸60cm、下端長軸81cm、短軸43cm、深さ6cm、第3号土坑が、上端長軸152cm、短軸54cm、深さ12cmを測る。溝も土坑も上部が道路のためか、非常に検出面は、硬質である。土層観察から、2条の溝は、同時期と考えられ、掘り込み面は、標準Ⅱ層上面である。覆土は、2層検出したが、いずれも自然堆積である。出土遺物は、1が耳皿で、底部は、右回転ロクロ糸切り離し、素地は白褐色で、釉が内側全面と外側の口縁部付近にかかり、淡褐色を呈する。口径6.3cm、底径3.65cm、器高1.05cmである。10%欠損する。2は、内耳鍋の口縁部で、口径1.3cm、耳厚0.7cmの耳をもつ。素焼きで内面が暗褐色、外面は黒褐色を呈する。3は、茶埦の体部破片とみられ、器厚は、3～4.5mm、素地は、淡褐色で、釉が両面にかかり、外面は黒紫色、内面は暗黄褐色を呈する。4は、茶埦の体部片とみられ、破片であるが推定される体部最大径は、11cm、器厚は、4.5～8.5mmである。素地は褐色で釉がかかり、内面は茶色、外面は暗茶褐色



第59図　海士有木遺跡遺構実測図



第60図　海士有木遺跡出土遺物実測図

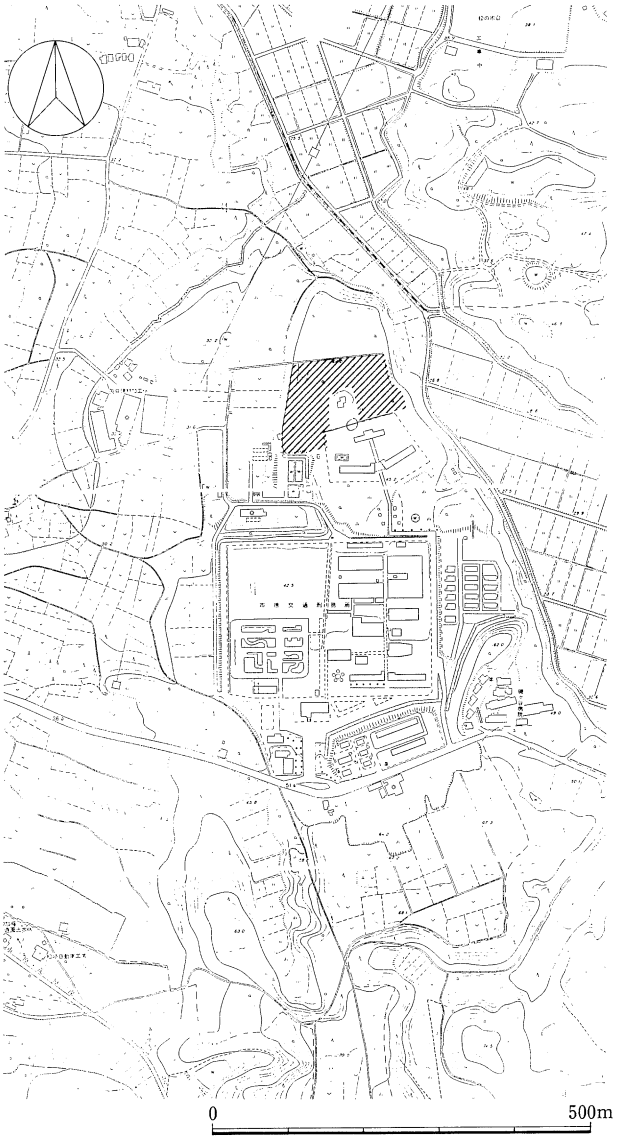
を呈する。5は、瓶の肩部片とみられる。器厚は7.5～9㎜、色調は、内側が暗灰色、外側は一部に釉がかかり、黄褐色、黒褐色を呈する。6は、甕の胴部片とみられ、器厚は、1.35～1.45cm、胎土に2㎜前後の小礫を含む。色調は、内面が淡赤褐色、外面は釉がかかり、灰褐色を呈する。7は、スリ鉢である。小型で、底部は高台をもち、口径13.55cm、底径6.5cm、器高5.15cmを計る。釉は、内面の口縁部と外面の高台部を除く全面にかかり、色調は、茶褐色(高台部は白褐色)を呈する。8は、磁器碗の底部片で、低い高台をもつ。底径7.4cm。体下部に三条の線が周り、体部の内外面には、草木を具象化したような文様が描かれている。9は、砥石で、暗灰色を呈する(表面は暗褐色)。破砕面を除いて、かなり使用されている。現在の厚さ1.3～1.5cm、長さ6.4cm、幅2.75cmを計る。以上のように、調査の結果、わずかの範囲ではあったが、溝2条と土坑3基を検出した。各遺構とも、同時期か、かなり近接する時期と思われる。形体からは、地割り溝か、柵状の施設の痕跡とも推測されるが、調査面積が狭く、断定は出来ない。出土遺物は、調査の際に、一括して取り上げたもので、直接、遺構に結びつく決定的な根拠はない。調査地は、蟻木城跡の城郭内であり、したがってこれらの遺構、遺物も、城郭との関連性も考えられる。蟻木城は、「管窺武鑑抄」には、城主椎津中務少輔及び弟の椎津帯刀が、天正三年(1575年)九月三日に里見義弘(大将は佐貫城主三浦下野守成良)軍によって攻略され、討死し、落城したといわれている(註1)。また、南東約300mの台地南側傾斜面に所在する花崗岩製の十三重塔は、天文二十一年(1551年)に里見義堯に攻略された二階堂又太郎実綱の供養塔ともいわれている。

(註1)「蟻木城」『日本城郭大系　千葉・神奈川』落合忠一他、新人物往来社。昭和55年。

(4)北旭台遺跡

a. 遺跡の位置と周辺の環境

北旭台遺跡は、市原市磯ケ谷87－1地先他に所在する。当地は、養老川中流域の右岸台地上で、支流の大桶川の小谷が北側と西側より入り、北側に突出する地形を呈する台地上(標高約46m)に位置する。北側の小谷との北高は、約19mである。また、当台地は、東側が一段高く、西側が低い微地形を示し、段差は、約12mを測る。当遺跡は、昭和62年に一部の確認調査が実施され(註1)、東側の高い部分(A地区)には、縄文時代早期終末頃の竪穴住居跡や炉穴及び北旭台古墳群を構成する円墳などが認められている。また、西側の低い部分(B地区)では、久ケ原式期の竪穴住居跡や溝などが認められている。周辺には、北約1.6kmの台地上に、先土器時代のユニットや縄文時代中期の住居跡、弥生時代の須和田式土器などを検出した武士遺跡が存在する(註2)。また、南西約3.5kmには、弥生時代の住居跡85軒等を検出した土宇遺跡(註3)、さらに、西約2kmには、弥生時代宮ノ台期の方形周溝墓8基等を検出した山田大宮遺跡(註4)が所在する。古墳時代では、北約1.1kmに、前方後円墳1基を含む新堀古墳群、南側の隣接する台地上には、滝山、法伝台など多くの古墳群が存在するが、発掘調査は、実施されていない。また、南西約2.5kmには、白鳳期と考えられる花(雷)文縁八葉複弁蓮華文軒丸瓦を出土する二日市場廃寺跡が(註5)、さらに、南西約700mの門脇遺跡(註6)からは、「(海)士里」名の墨書土器が出土した平安時代の竪穴住居跡がみられる。中世では、北約1kmに武士城跡、東約2kmに大桶城跡が各々所在している。(註7)



第61図　北旭台遺跡調査地区位置図

※スクリーントーン部分が調査範囲

(註1)「北旭台遺跡」木對和紀他。昭和63年、『昭和62年度　市原市埋蔵文化財緊急調査報告書』

(註2)「武士遺跡」昭和63年。『昭和63年度千葉県遺跡調査研究発表会発表要旨』

「武士遺跡」半田堅三他。昭和51年　武士遺跡発掘調査団

(註3)「土宇」　柿沼修平他。昭和54年　日本文化財研究所

(註4)「山田大宮遺跡」米田耕之助。昭和61年　(財)市原市文化財センター

(註5)「市原市二日市場廃寺跡確認調査報告」郷堀英司他。昭和59年　(財)千葉県文化財センター

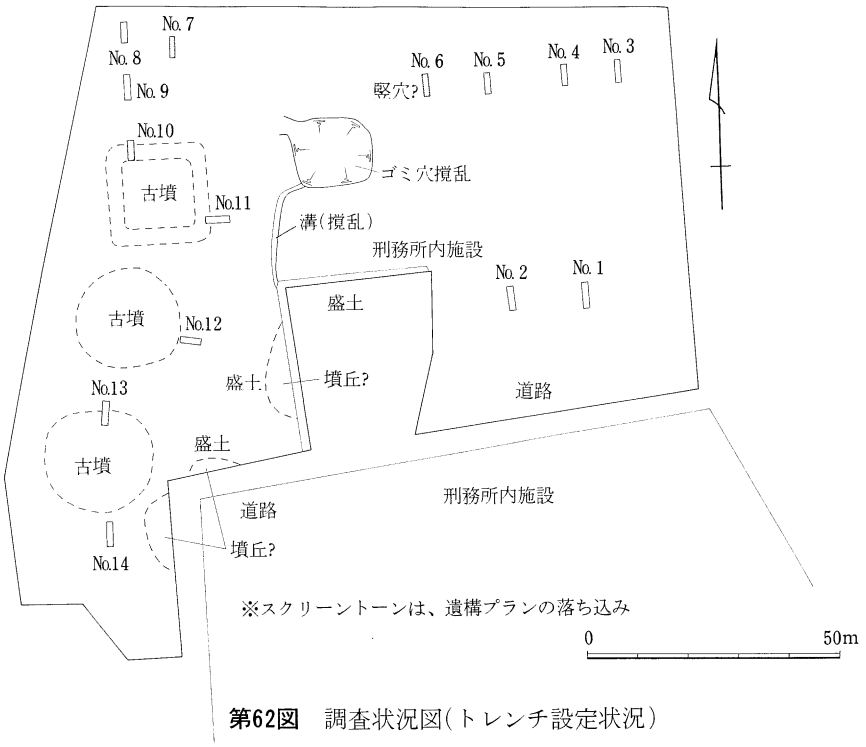
「房総の古瓦に関する覚書(1)」須田勉、昭和53年『古代』　早稲田大学出版会

(註6)「門脇遺跡」　小林清隆。昭和60年　(財)千葉県文化財センター

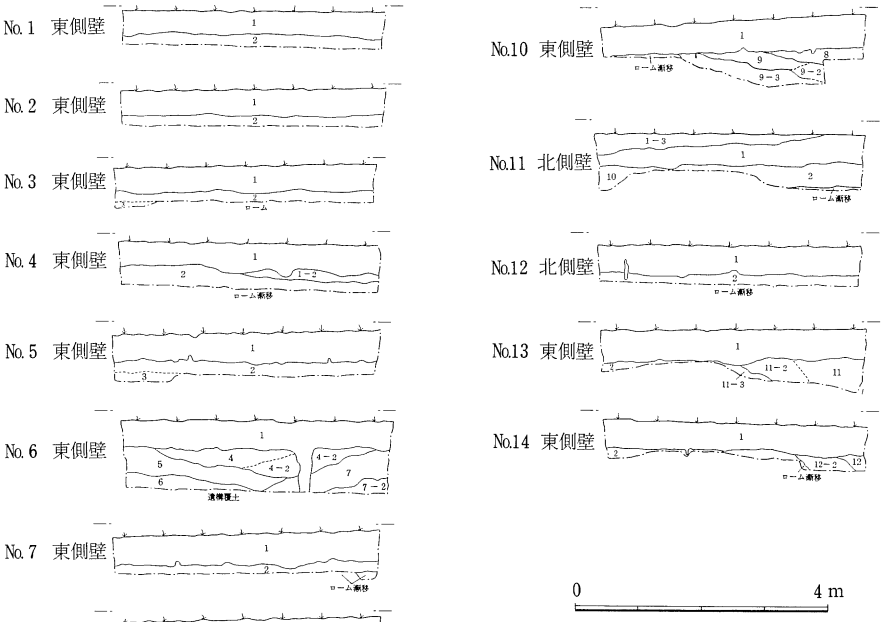
(註7)「日本城郭大系　千葉・神奈川」6　鈴木英啓他。昭和55年　新人物往来社

b. 調査内容

調査は、市原交通刑務所による農場整備に伴ない、遺跡の状況を把握し、盛土保存を実施するための確認調査である。現況は、松林となっており、下草は刈り取られている。調査は、全域に試掘トレンチを設定した。トレンチは、1×4mの大きさで14本実施している。深さは、ローム漸移層及び遺構確認面まで掘り下げた。その結果、No.3、5、6、7、14から、竪穴住居跡か土坑の可能性の有る落ち込みと、No.10～13より古墳の周壕とみられる落ち込みを確認した。出土遺物は、1～8が胎土に繊維を含み、単節の斜縄文などを施し、前期前葉の関山式頃とみられる。9～26は、胎土に雲母を含み、ヘラ描きの沈線文、刺突文、隆部や把手などを持ち、中期前葉の阿玉台式頃と考えられる。27～29はやや薄手で焼成は良好、文様は沈線に区画された単節の斜縄文や沈線と刺突文の組み合わせで後期の土器片であろう。30～32は、薄手で外面に刷毛目調整がみられることから、古墳時代前期の壺胴部片と考えられる。33は、石皿を磨石に転用したとみられ、四方に使用痕が存在する。この他に、焼石が数点出土している。



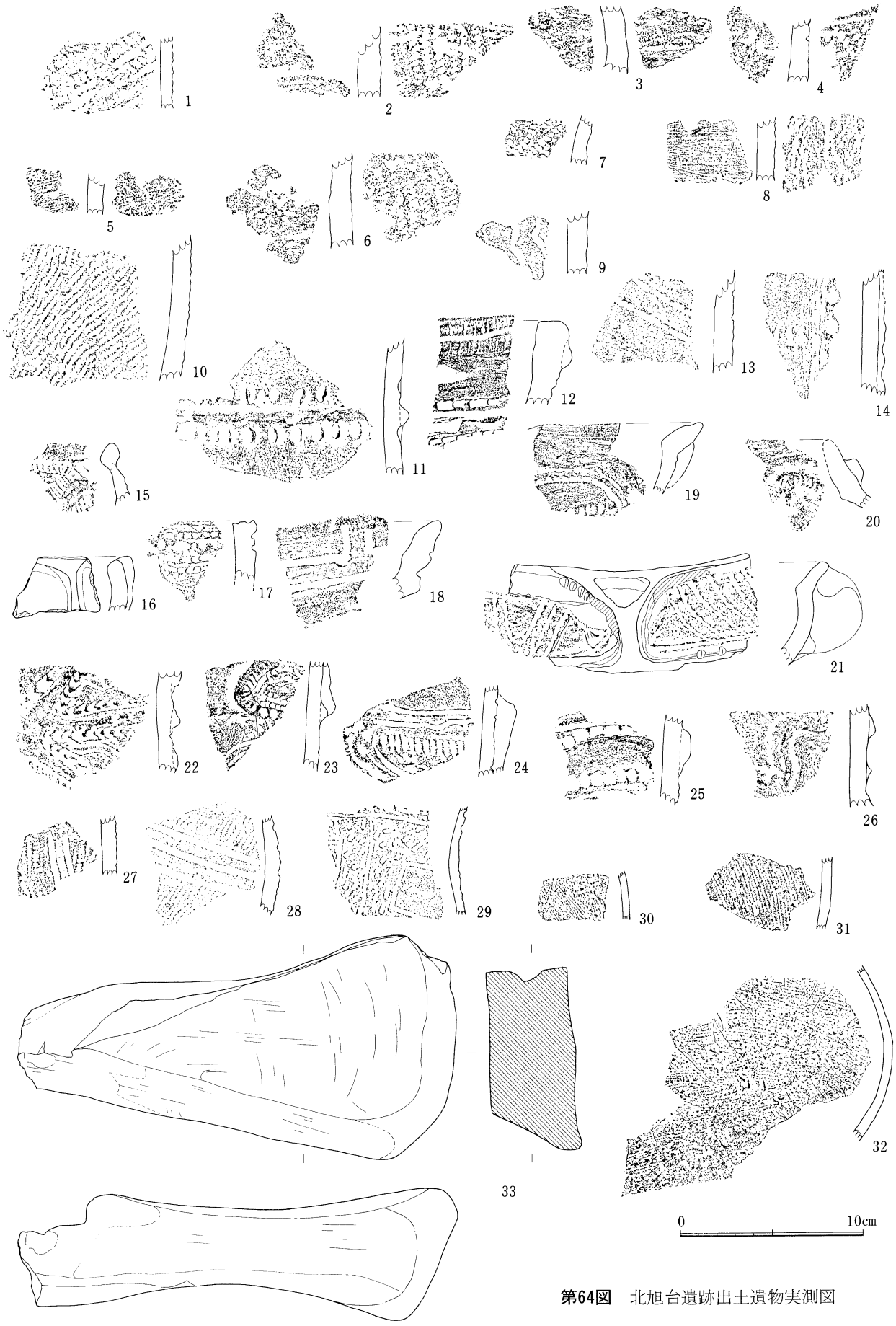
第62図 調査状況図(トレンチ設定状況)



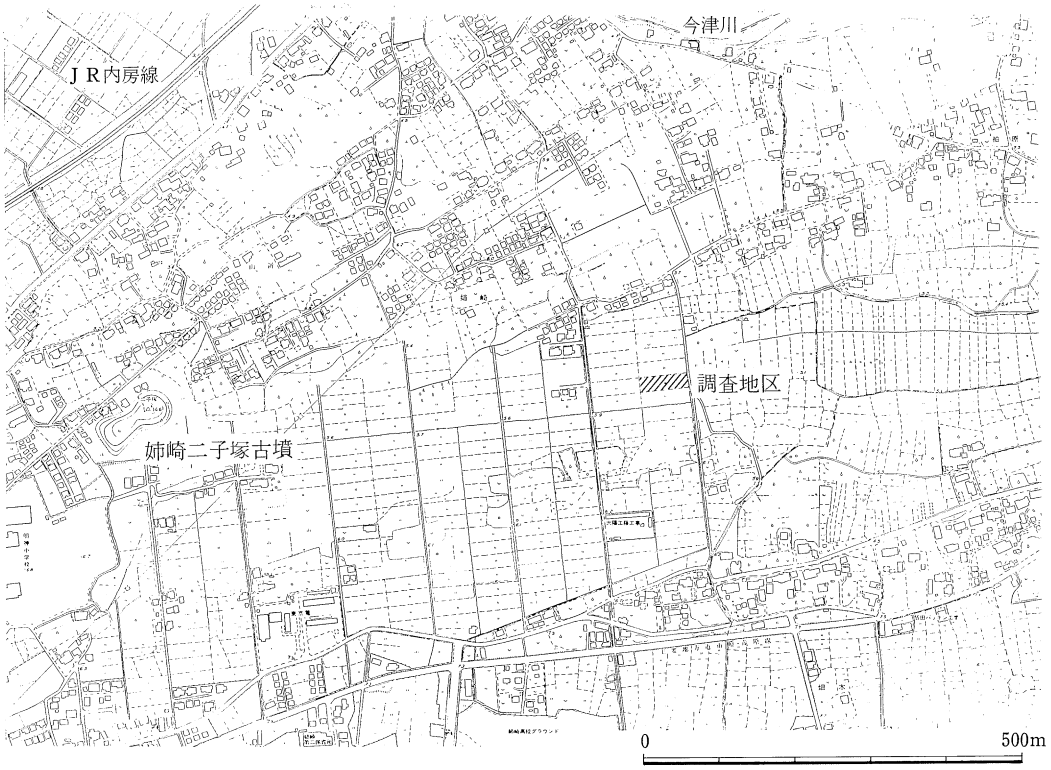
第63図 トレンチ土層図

トレンチ土層説明

1. 表土。標準土層。
1-2. 木の根によるカクラン。
1-3. ゴミ穴等を掘った時の盛土とみられる。
2. 黒褐色土。標準II層
3. 暗褐色土(少し軟質)。ローム粒を多く含む。
4. 黒褐色土。ローム粒を含む。
4-2. ローム粒を多く含む。
5. 暗褐色土。ローム土塊を含む。
6. 暗褐色土(明るい)。ローム粒を含む。
7. 暗褐色土(明るく少し硬質)。ローム土塊を含む。
7-2. 7に似るが、7よりローム土塊を多く含む。
8. 暗褐色土。ローム粒を多く含む。
9. 黒褐色土(少し硬質)。ローム粒を少し含む。
9-2. 9に似るが、ローム粒を多く含む。
9-3. 9に似るが、少し暗い。ローム土塊を少し含む。
10. 黒褐色土(少し硬質)。ローム粒を含む。
11. 暗褐色土(少し暗い)。ローム粒を少し含む。
11-2. 明るい。ローム粒を含む。
11-3. ローム土塊を含む。
12. 褐色土。ローム粒を少し含む。
12-2. ローム土塊を少し含む。



第64図　北旭台遺跡出土遺物実測図



第65図　姉崎山谷遺跡周辺図

(５)姉崎山谷遺跡

a. 遺跡の位置と周辺の環境

姉崎山谷遺跡は、市原市姉崎字山谷1,655－１地先他に所在する。当地は、養老川下流域左岸の沖積低地上に立地し、標高は、約６ｍである。埋め立て前の旧海岸線からは、約1.5km入った地点で、海岸と平行する砂丘と沖積地を望む洪積台地に挟まれた部分である。また、北側には、東京湾に注ぐ小河川の今津川が流れている。周辺には、西南側の洪積台地上北縁部に、縄文時代後期を主とする鬼子母神(台)貝塚、弥生時代では、同じ西南側台地上に後期の方形周溝墓や竪穴住居跡を検出した毛尻遺跡、後期～古墳時代前期の竪穴住居跡を多数検出した六孫王原遺跡がみられる。古墳時代では、多くの古墳群が存在し、付近は、上海上国造の支配地と推定されている。主な古墳では、未調査であるが、墳丘形体より４世紀代と推定される前方後円墳の天神山古墳(全長125m)、釈迦山古墳(全長79～91m)、５世紀後半の年代観が与えられている二子塚古墳(全長110m)、６世紀前半代といわれる山王山古墳(全長69m)、原１号墳(全長70m)、６世紀代の築造と考えられている鶴窪古墳(全長60m)、７世紀代といわれる前方後方墳の六孫王原古墳(全長45.4m)などがあげられる。二子塚古墳は、当調査地の西約700mの海岸砂丘上に立地する。また、古墳時代から歴史時代の所産といわれる山新貝塚が同砂丘上の当遺跡より北西約400mに存在する。他に、古墳時代の集落では、台遺跡や原遺跡が調査されている。中世には、南側約500mに要害山城跡、西南西約２kmに椎津城跡が存在する。さらに、北約1.5km付近の青柳地区から、蔵骨器が出土している。また、近世には、鶴牧藩の陣屋跡が西南西約1.8kmに所在したと伝えられている。

b. 調査の経過と内容

当遺跡は、いわゆる山新遺跡内の東側の一画に所在し、本来は、山新遺跡と名称すべきであるが、現地調査の時点での名称である姉崎山谷遺跡を本書では呼称する。調査前の遺跡は、水田として利用され、東側には、農道が一段高く隣接して南北方向に走っていた。調査は、都ハウス株式会社の宅地造成に伴う緊急調査で、姉崎山谷遺跡調査会(会長　市教育長石井正泰＝当時)を組織して昭和56年7月9日～同年9月30日まで実施した。調査面積は約991㎡で、幅2mのトレンチを3本設定した。調査の結果、耕作土より約1m前後まで掘ったが、遺構は、検出できなかった。また、湧水が豊富であった。土層は、耕作土を含め11層を確認した。なお、各層について土壌サンプルを採集し、パリノ・サーヴェイ株式会社に花粉分析を依頼している。以下その報告を記載する。

市原市姉崎山谷遺跡試料　花粉分析結果報告

ご依頼を受けた、市原市姉崎山谷遺跡試料の花粉分析の結果をご報告したします。

1．試　料

分析試料は、1層～11層まで各1点づつ、合計11点である。

第4表は、これらの試料について層位、岩質、花粉・胞子化石産出傾向を各項目別にまとめた試料表である。

第4表　試　料　表

層位	岩質	花粉・胞子化石産出傾向
1	暗灰色土(耕作土)	A
2	〃	A
3	緑黒色土	A
4	砂混黒色土	A
5	〃	A
6	黒色有キ質土	A
7	暗灰色粘土	A
8	砂混黒色有キ質土	A
9	〃	A
10	暗緑色粗粒砂	A
11	黄灰色粗粒砂	C
	〃	C

A:多い　　C:普通

2．分析結果及び考察

分析結果は、検出された花粉・胞子化石の総数を基数とする百分率で各試料における花粉・胞子化石の割合を算出して、これをもとに作成した。

また樹木花粉についても、これとは別に樹木花粉だけを再び計数し、樹木花粉を基数とする百分率によって、作成した。

更に写真図版(PLATE・1、2、3)を作成したので参照されたい。

今回の分析によって、以下に列挙した花粉・胞子化石が検出された。

《針葉樹類花粉(AP－1)》

Abies(モミ属)、Picea(トウヒ属)、Pinus haploxylon(五葉型マツ)、Pinus diploxylon(二葉型マツ)、Pinus(マツ属)、Tsugasieboldii(ツガ)、Podocarpus(マキ属)、Cryptomeria(スギ属)、Sciadopitys(コウヤマキ属)、T. C. T(イチイ科、ヒノキ科、スギ科)

《広葉樹類花粉(AP－2)》

Myrica(ヤマモモ属)、Juglans(クルミ属)、Pterocarya(サワグルミ属)、Salix(ヤナギ属)、Alnus(ハンノキ属)、Betula(カバノキ属)、Carpinus(クマシデ属)、Corylus(ハシバミ属)、Castanea(クリ属)、Castanopsis(クリカシ属)、Fagus(ブナ属)、Cyclobalanopsis(アカガシ亜属)、Lepidobalanus(コナラ亜属)、Aphananthe(ムクノキ属)、Celtis(エノキ属)、Ulmus(ニレ属)、Zelkova(ケヤキ属)、Moraceae(クワ科)、Acer(カエデ属)、Symplocos(ハンノキ属)Fraxinus(トネリコ属)、Ligustrum(イボタノキ属)、Weigela(タニウツギ属)、Euphorbia(トウダイグサ属)、Camellia(ツバキ属)、Viscum(ヤドリギ属)、Vitis(ブドウ属)、Osmanthus(ヒイラギ属)、Loranthaceae(ヤドリギ科)、Araliaceae(ウコギ科)

《草本花粉(NAP)》

Persicaria(サナエタデ節)、Chenopodiaceae(アカザ科)、cf. Amaranthaceae(ヒユ科)、Thalictrum(カラマツソウ属)、Myriophyllum(フサモ属)、Umbelliferae(セリ科)、Patrinia(オミナエシ属)、Carduoideae(キク亜科)、Artemisia(ヨモギ属)、Cichorioideae(タンポポ亜科)、Gramineae(イネ科)、Typha(ガマ属)、Cyperaceae(スゲ科)、Portulaca(スベリヒユ属)、Sagittaria(オモダカ属)、Galium(ヤエムグラ属)、Humulus(カラハナソウ属)、Rumex(ギシギシ属)

《形態分類花粉(FP)》
Triporate pollen(三孔型花粉)、Tricolpate pollen(三溝孔型花粉)、Tricolporate pollen(三溝孔型花粉)、Inaperturate pollen(無口型花粉)、Tetraporate pollen(四孔型花粉)
《羊歯類胞子(FS)》
Lycopodiaceae(ヒカゲノカズラ科)、Osmundaceae(ゼンマイ科)、Polypodiaceae(ウラボシ科)、Salvinia natans(サンショウモ)、Pteris(イノモトソウ属)、Monolete spore(単条溝型胞子)、Trilete spore(三条溝型胞子)
このたびの試料は、採取地点の柱状図によれば総べて上から下へ採取されており、1層～4層が順序よく上下関係を示しているが、5層～11層は採取地点によって異なっているので、必ずしも上下関係を示していない。
従って分析結果は、各試料について述べ考察でまとめることにする。
なお、各樹木花粉化石については樹木花粉化石を基数とした値、その他の各花粉・胞子化石は、総花粉・胞子化石を基数とした値で述べる。
〈1　層〉
樹木花粉は全体の70.0%を占め、そのほとんどが針葉樹花粉で68%であり、残り2%が広葉樹花粉である。
針葉樹花粉は主なものとして、二葉型マツ(アカマツ、クロマツに相当)が53.5%と最も多く、次いでスギ属が22.5%、マツ属(五葉、二葉の区別できないもの)が18.0%検出された。
広葉樹花粉はクルミ属、クマシデ属、アカガシ亜属、コナラ亜属、ケヤキ属が0.5%以下産出するにすぎない。
草木花粉は全体の25.6%であり、イネ科が21.2%の他はカヤツリグサ科、アカザ科、タンポポ亜科、サナエタデ節が2.4%以下で検出された。
羊歯類胞子は全体の4.0%と少なく、単条溝型胞子、三条溝型胞子、サンショウモが低率で検出されたにすぎない。
〈2　層〉
樹木花粉は全体の58.4%を占め、そのうち針葉樹花粉が54.8%、広葉樹花粉が3.6%である。
針葉樹花粉は主なものとして二葉型マツが62.0%、マツ属が17.0%、スギ属が10.5%検出された。
広葉樹花粉はコナラ亜属が3.5%の他にヤナギ属、ハンノキ属、クマシデ属、クリ属、ケヤキ属、タニウツギ属等が低率で検出された。
草本花粉は全体の30.4%を占め、そのほとんどがイネ科で25.6%検出された。そして、カヤツリグサ科が4.4%の他はヨモギ属、タンポポ亜科、オモダカ属等が低率で検出された。
羊歯類胞子は全体の8.4%であり、単条溝型胞子が6.0%の他は、三条溝型胞子、ウラボシ科、ヒカゲノカズラ科が低率で検出された。
〈3　層〉
樹木花粉は全体の24.0%であり、そのうち針葉樹花粉が17.2%、広葉樹花粉が6.8%である。
針葉樹花粉は主なものとして二葉型マツが27.0%、スギ科が21.0%、マツ属が13.0%、ツガが6.0%検出された。
広葉樹花粉は主なものとしてコナラ亜属が9.0%、ハンノキ属が6.0%、アカガシ亜属が6.0%検出された。
草本花粉は全体の55.2%を占め、イネ科が30.8%、カヤツリグサ科が16.4%、ヨモギ属が3.2%の他、ガマ属、キク亜科、タンポポ亜科、フサモ属、アカザ科等が低率で検出された。
羊歯類胞子は全体の14.8%であり、単条溝型胞子が12.0%の他、三条溝型胞子、ゼンマイ科、ウラボシ科が低率で検出された。
〈4　層〉
樹木花粉は全体の38.4%であり、そのうち針葉樹花粉が14.4%、広葉樹花粉が24.0%である。
針葉樹花粉はスギ属が28.5%とその大部分を占める。そして、モミ属が3.5%、ツガが3.0%の他にトウヒ属、二葉型マツ、コウヤマキ属等が低率で検出された。
広葉樹花粉は主なものとしてアカガシ亜属が28.5%、コナラ亜属が9.5%、ハンノキ属が8.5%、クマシデ属が3.5%、クリ属が4.0%検出された。その他にシイ属、ブナ属、エノキ属ームクノキ属、ニレ属、ケヤキ属、クワ科、ハイノキ属等が低率で検出された。
草本花粉は全体の52.0%を占め、そのほとんどがイネ科であり42.0%検出された。そして、ヨモギ属とカヤツリグサ科が各々4.0%の他に、サナエタデ属、カラマツソウ属等が低率で検出された。　羊歯類胞子は全体の5.6%と少なく、そのほとんどが単条溝型胞子であった。
〈5　層〉
樹木花粉は全体の72.0%を占め、そのうち針葉樹花粉が14.8%、広葉樹花粉が57.0%であった。
針葉樹花粉はスギ属の12.0%によって代表され、その他はモミ属、トウヒ属、二葉型マツ、マツ属、ツガ等が低率で検出された。
広葉樹花粉は主なものとして、ハンノキ属が34.0%、ケヤキ属が12.0%、コナラ亜属が11.5%、アカガシ亜属が9.0%、クマシデ属が4.0%検出された。その他にクルミ属、カバノキ属、クリ属、シイ属、ブナ属、ニレ属、クワ科、カエデ属等が低率で検出された。
羊歯類胞子は全体の13.2%であり、単条溝型胞子によって占められる。
〈6　層〉
樹木花粉は全体の64.8%を占め、そのうち針葉樹花粉が21.6%、広葉樹花粉が43.2%であった。
針葉樹花粉はスギ属が23.0%とそのほとんどを占め、モミ属が3.5%の他にトウヒ属、二葉型マツ、マツ属、ツガ、マキ属等が低率で検出された。
広葉樹花粉は主なものとしてハンノキ属が22.5%、コナラ亜属が11.5%、アカガシ亜属が9.0%、クリ属が7.5%、ケヤキ属

が6.0%検出された。
その他にクルミ属、カバノキ属、クマシデ属、シイ属、ニレ属、カエデ属、トネリコ属等が低率で検出された。
草本花粉は全体の27.2%を占め、イネ科が15.6%、ヨモギ属が8.4%の他に、サナエタデ節、セリ科、キク亜科、ガマ属、カヤツリグサ科等が低率で検出された。
羊歯類胞子は全体の5.2%と少なく、単条溝型胞子が3.6%の他にウラボシ科、ゼンマイ科、三条溝型胞子等が低率で検出されたにすぎない。
〈7　層〉
樹木花粉は全体の60.0%を占め、そのうち針葉樹花粉が8.0%、広葉樹花粉が52.0%であった。
針葉樹花粉はスギ属が10.0%とそのほとんどを占め、その他にモミ属、二葉型マツ、ツガ等が低率で検出された。
広葉樹花粉は主なものとしてコナラ亜属が26.0%、アカガシ亜属が11.5%、クマシデ属が8.5%、ハンノキ属が7.5%、ケヤキ属が9.0%、クリ属が4.5%、エノキ属ームクノキ属が7.5%検出された。その他にサワグルミ属、クルミ属、カバノキ属、ハシバミ属、シイ属、ブナ属、ニレ属等が低率で検出された。
草本花粉は全体の30.8%の他にガマ属が僅かに検出された。
羊歯類胞子は全体の7.2%と少なく、単条溝型胞子が6.4%の他は、三条溝型胞子、ゼンマイ科、ウラボシ科、サンショウモ等が低率で検出されたにすぎない。
〈8　層〉
樹木花粉は全体の55.6%であり、針葉樹花粉が12.4%、広葉樹花粉が43.2%であった。
針葉樹花粉はスギ属が13.0%、モミ属が4.5%の他にトウヒ属、二葉型マツ、ツガ、コウヤマキ属等が低率で検出された。
広葉樹花粉はハンノキ属が38.5%、ケヤキ属が12.0%、コナラ亜属が9.0%、アカガシ亜属が8.0%、クマシデ属が4.5%の他にクルミ属、ハシバミ属、クリ族、ニレ属等が低率で検出された。
草本花粉は全体の22.0%であり、イネ科が16.4%、ヨモギ属が4.0%の他にカヤツリグサ科、セリ科が低率で検出された。
羊歯類胞子は全体の19.6%であり、単条溝型胞子が15.2%、ウラボシ科が3.2%の他にゼンマイ科、三条溝型胞子、サンショウモが低率で検出された。
〈9　層〉
樹木花粉は全体の71.6%を占め、そのうち針葉樹花粉が10.8%、広葉樹花粉が60.8%であった。
針葉樹花粉はスギ科が9.5%、モミ属が4.0%の他、二葉型マツ、ツガ等が低率で検出された。
広葉樹花粉はハンノキ属が47.0%と非常に多く、ケヤキ属が8.5%、アカガシ亜属が8.0%、コナラ亜属が4.0%の他にクルミ属、カバノキ属、クマシデ属、クリ属、シイ属、ブナ属、ニレ属等が低率で検出された。
草本花粉は全体の11.2%であり、ヨモギ属が6.4%、イネ科が5.6%の他にカヤツリグサ科、ガマ属、カラマツソウ属、サナエタデ節が低率で検出された。
羊歯類胞子は全体の12.8%であり、単条溝型胞子が11.6%の他に、ゼンマイ科、ウラボシ科、三条溝型胞子が低率で検出された。
〈10　層〉
樹木花粉は全体の50.5%を占め、そのうち針葉樹花粉が13.5%、広葉樹花粉が37.0%であった。
針葉樹花粉はスギ属が8.0%、ツガが7.0%、モミ属が4.0%の他に、二葉型マツ、マツ属、マキ属等が低率で検出された。
広葉樹花粉はコナラ属が20.0%、アカガシ亜属が13.0%、エノキ属ームクノキ属が11.0%、ケヤキ属が10.0%、クマシデ属が6.0%、ブナ属が4.0%検出された。その他にクルミ属、サワグルミ属、ハンノキ属、クリ属、トネリコ属等が低率で検出された。
草本花粉は全体の38.0%を占め、その中でイネ科が31.5%と大部分を占める。そして、カヤツリグサ科が4.5%の他にガマ属、ヨモギ属、カラマツソウ属、サナエタデ節等が低率で検出された。
羊歯類胞子は全体の6.5%と少なく、単条溝型胞子が4.0%の他は単条溝型胞子、ウラボシ科が低率で検出された。
〈11　層〉
樹木花粉は全体の55.6%を占め、そのうち針葉樹花粉が10.0%、広葉樹花粉が45.6%であった。
針葉樹花粉はスギ属が9.0%、二葉型マツが3.0%の他にモミ属、トウヒ属、マツ属、ツガ、コウヤマキ属等が低率で検出された。
広葉樹花粉はコナラ亜属が23.5%、ケヤキ属が17.5%、アカガシ亜属が8.5%、エノキ属ームクノキ属が8.5%、クマシデ属が7.5%、ハンノキ属が5.5%の他にクルミ属、カバノキ属、クリ属、シイ属、ブナ属、ニレ属、クワ科、カエデ属、ヤドリギ属等が低率で検出された。
草本花粉は全体の34.8%を占め、イネ科が25.2%、ヨモギ属が7.6%の他にカラマツソウ属、キク亜科、ガマ属、カヤツリグサ科、オモダカ属が低率で検出された。
羊歯類胞子は全体の7.2%と少なく、単条溝型胞子が6.4%の他にウラボシ科、イノモトソウ属、サンショウモが低率で検出された。
以上の結果から古環境、古植生について述べると次のことが言えよう。
なお、1層から4層までは上下関係がはっきりしているので、下から上へその変化を述べ、5層から11層は、上下関係がはっきりしていないので、花粉･胞子化石の構成が類似するものをまとめて述べる。
● 1層～4層
4層と3層は、樹木花粉よりも草木花粉が多く、2層と1層になると逆転する。草木花粉の中では、4層～1層までいずれもイネ科が優占し、カヤツリグサ科、ヨモギ属等を伴う。そして、水生植物のサンショウモ、フサモ属、オモダカ属、ガマ属等が僅かながらもみられる。一方樹木花粉では、4層においてスギ科とアカガシ亜属によって代表され、ハンノキ属、コナラ

亜属、クマシデ属、クリ属、シイ属等を伴う。3層～1層になるとアカガシ亜属をはじめ広葉樹花粉が減少し、針葉樹花粉のマツ属、とくに二葉型マツが激増するようになる。

このようなことから古環境は、1層～4層までサンショウモ、フサモ属、ガマ属、オモダカ属が生育できる池沼、又は水田のような、水の影響を受けていたものと考えられ、その周辺を含めて、イネ科をはじめとする草本植物が生育していたものと言えよう。

そして、このような草本植物の生育可能な環境の後背地として、樹木が生育していたものと考えられる。4層においてはアカガシ亜属、スギ属を主体にして、ハンノキ属、コナラ亜属、クマシデ属、クリ属、シイ属等が生育し、林地を形成していたものと考えられる。そして、3層～1層になるとこの林地は急変して行き、アカガシ亜属等の広葉樹が減少し、マツ属、とくに二葉型マツが優占するようになる。従って林地は、マツ属を優占とし、スギ属を随伴し、若干の広葉樹から成っていたものと言えよう。ここでマツ属は、二葉型マツのアカマツ、またはクロマツと言えよう。

この林地における急激な植生変化の理由として、古気候の変化と、人為的な影響(開墾、伐採)、その他が考えられるが、おそらく人為的な影響が大きかったものと推定される。

● 5層～11層

これらの試料は、いずれも樹木花粉が草本花粉よりも多産している。そして、樹木花粉のハンノキ属、コナラ亜属、エノキ属ームクノキ属の産出の相違により大きく2分することができる。

・aグループ(ハンノキ属が多産する試料　5層、6層、8層、9層)

樹木花粉はハンノキ属が多産し、スギ属、コナラ亜属、ハンノキ属、ケヤキ属等を伴う。又、クリ属、シイ属、エノキ属ームクノキ属、ニレ属等もみられる。

草本花粉はイネ科が多く、ヨモギ属を伴う。又、水生植物のガマ属、サンショウモもみられる。

従って古環境は、ガマ属、サンショウモが生育できる池沼の存在が推定され、その周辺を含めてイネ科、ヨモギ属、カヤツリグサ科等が生育していたものと言えよう。このような環境の後背地として、樹木が林地を形成して生育していたものと考えられる。樹木の中でも、最も多いハンノキ属は、他の樹木と異なり水辺付近に生育するカハラハンノキと考えられ、草本植物と同様、池沼の周辺に生育していたものと言えよう。そして、他のスギ属、アカガシ亜属、コナラ亜属、ケヤキ属、クリ属、シイ属等が後背地に林地を形成して生育していたものと考えられる。

・bグループ(コナラ亜属が多産する試料　7層、10層、11層)

樹木花粉はコナラ亜属が多産し、アカガシ亜属、スギ属、クマシデ属、ケヤキ属、エノキ属ームクノキ属等を随伴し、ハンノキ属、クリ属、ニレ属等もみられる。草本花粉はイネ科が多くヨモギ属、カヤツリグサ科等を伴う。又、少ないながらも水生植物のガマ属、オモダカ属、サンショウモもみられる。

このようなことから古環境は、ガマ属、オモダカ属、サンショウモ等が生育できる池沼の存在が考えられる。そして、その周辺を主体にしてヨモギ属、カヤツリグサ科等が生育していたものと言えよう。このような環境の後背地として、コナラ亜属を主体としてアカガシ亜属、スギ属、クマシデ属、ケヤキ属、エノキ属ームクノキ属等から成る林地が形成されていたものと言えよう。

花粉分析の結果からみた5層～11層の上下関係について、採取時の柱状図は4個ケ所であり、それによると、各層の上下関係は下図のようである。

1		1		1		1
2		2		2		2
3		3		3		3
4		4		4		4
6		5		8		11
7		9		9		
10						

第66図　各層の上下関係図

花粉分析の結果によれば、その花粉･胞子化石の構成の特徴から、5層から11層の試料は、ⓐ、ⓑの2つのグループに分けることができた。

それによると、ⓐグループは、5層、6層、8層、9層の4点であり、ⓑグループは、7層、10層、11層の3点である。

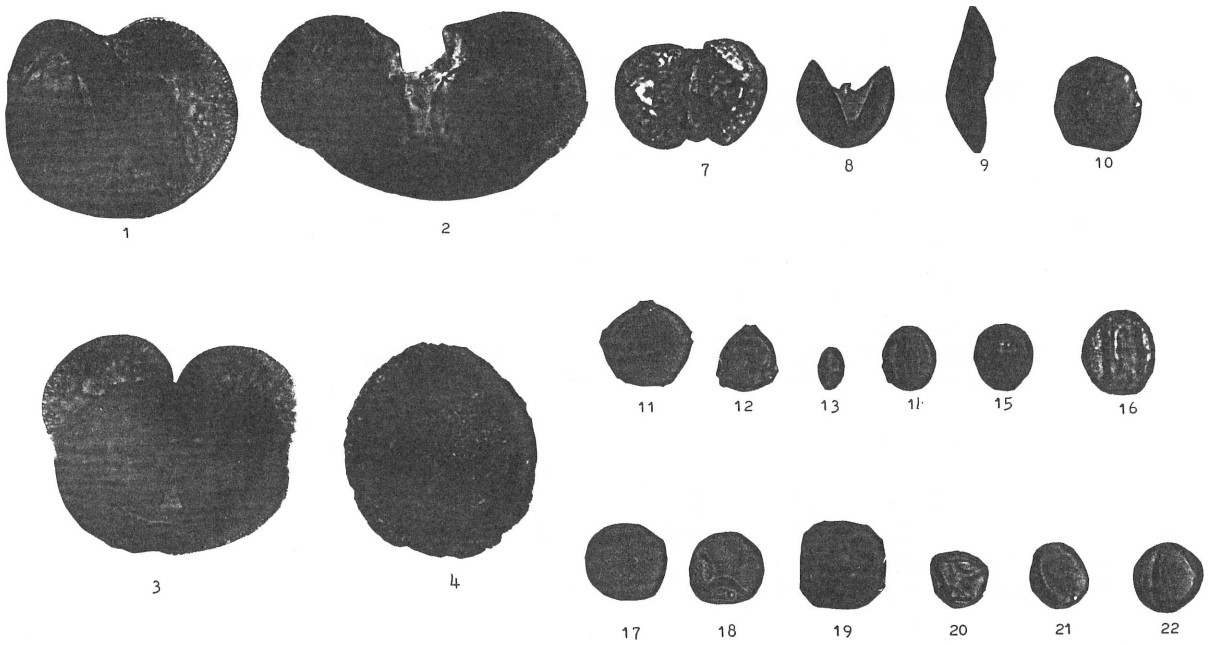
柱状図によれば、ⓐグループの6層は、ⓑグループの7層、10層よりも上位に位置する。ⓐグループに属する他の試料も時代的に6層に近いものと考えれば、ⓐグループは、ⓑグループよりも上位に位置することになる。

従って、全体の上下関係は次のように考えられる。

1
2
3
4
ⓐグループ
ⓑグループ

第67図　上下関係図

なお、ⓐグループとⓑグループ内の上下関係については、試料採取柱状図から読みとれる程度ではっきりしない。



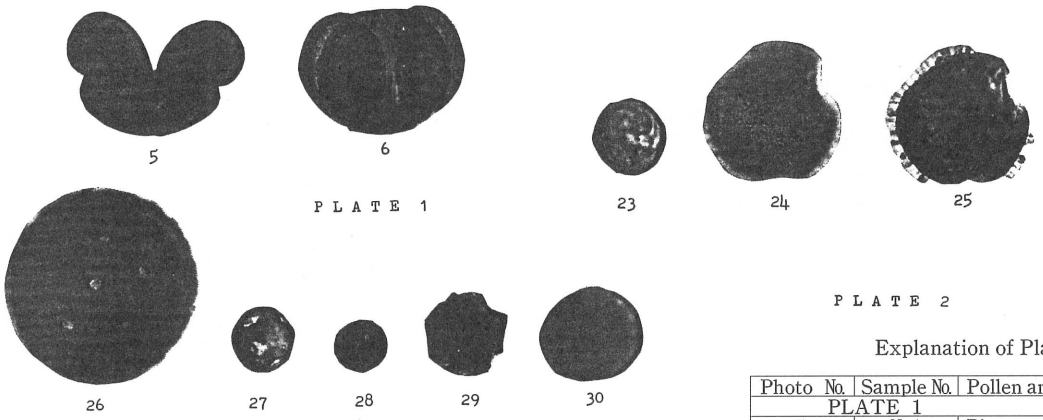


PLATE 1

PLATE 2

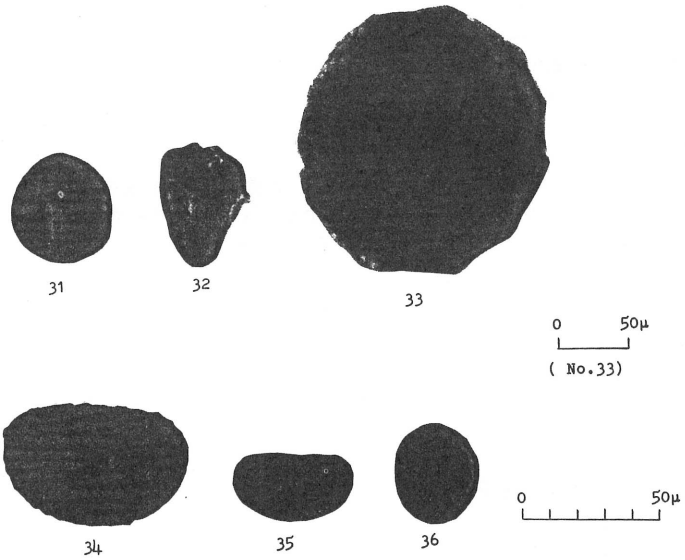


PLATE 3

Explanation of Plates

Photo No.	Sample No.	Pollen and Spores
PLATE 1		
1	No.4	Picea
2	〃	P.
3	No.7	Abies
4	No.5	Tsuga sieboldii
5	No.1	Pinus diploxylon
6	No.7	P. d.
PLATE 2		
7	No.1	Podocarpus
8	〃	Cryptomeria
9	〃	C.
10	No.5	Juglans
11	〃	Carpinus
12	No.4	Betula
13	No.2	Castanea
14	No.11	Cyclobalanopsis
15	No.9	C.
16	No.6	Lepidobalanus
17	No.4	Fagus
18	No.7	Aphananthe, Celtis
19	No.2	Zelkova
20	No.4	Moraceae
21	No.7	M.
22	No.11	Fraxinus
23	〃	Mallotus
24	〃	Viscum
25	〃	V.
PLATE 3		
26	No.10	Persicaria
27	No.11	Thalictrum
28	No.4	Artemisia
29	No.3	Cichorioideae
30	No.4	Gramineae
31	No.1	G.
32	No.2	Cyperaceae
33	No.1	Salvinia natans
34	No.2	Polypodiaceae
35	〃	Monolete spore
36	〃	Pseudoschizaea

第68図　姉崎山谷遺跡出土花粉

(6)喜多、高沢遺跡

a. 遺跡の位置と周辺の環境

高沢遺跡は、千葉県市原市喜多字高沢413地先他に所在する。当地は、房総半島から東京湾に注ぐ村田川の中流域で、南側支流の喜多川右岸台地上に立地する。東京湾からは、約8㎞内陸に入った地点で、村田川本流より約2㎞南側にさか上っている。当台地は標高約50mで、小谷が複雑に入り込み、平坦部分は、東南方向が100～200mの幅で続いているのみである。また、台地の西側は、喜多川の小谷が存在する。小谷との比高は約30mである。当台地上には、山林が荒廃している部分が多く遺跡は、現在のところ認められていない。周辺の主な遺跡は、西側の小谷を挟んで向い側の台地やや上流部には、縄文時代中期から後期を主とし、形体は環状にちかい多竜台貝塚、北約1.5㎞の村田川本流を望む左岸台地端部に縄文時代中期を主とする西鹿ノ原貝塚が存在する。また、北約2㎞の村田川右岸台地上には、先土器時代から近世にいたる多数の遺跡遺物を検出している千原台ニュータウン地区の調査が実施されている。さらに北西約2.5㎞には、弥生時代の環濠等を検出した潤井戸西山遺跡、西約1.6㎞には、五領式期の古墳、住居跡、奈良平安時代の方形周溝状遺構を主とする下鈴野遺跡が所在する。古墳では、村田川を望む台地上に多くの古墳群が存在し、当地は、菊麻国造の支配地と推定されている。北西約1㎞には、前方後円墳3基を含む寺谷古墳群、1号墳(前方後円墳)から円筒埴輪列が検出された小谷古墳群、前方後円墳2基を含む山王後古墳群(4号墳からは、直刀、刀子、鉄鏃が出土した)、全長60mの前方後円墳を含む杉山古墳群、北側約1.2㎞には、永吉権現山古墳群や西鹿ノ原古墳群などが存在する。

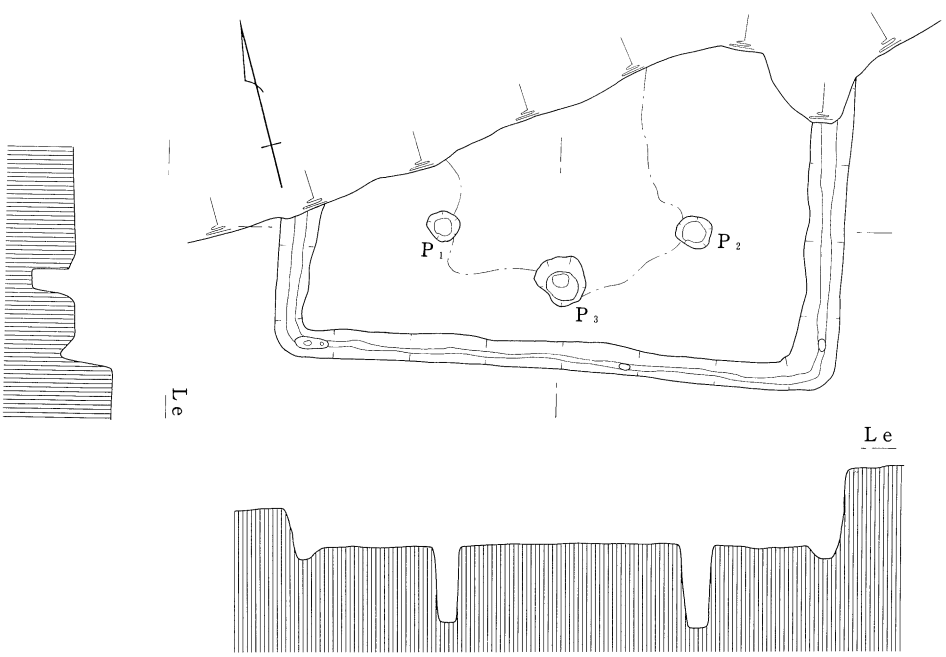
b. 調査の内容

調査は、三浦興業株式会社が土砂採取を実施していたところ、竪穴住居跡の一部が発見されたため工事を中断して、昭和58年12月12日に緊急調査を実施した。当地は、山林に利用され、地形は、南西側に傾斜する端部である。また、南西側より小谷が入り込んでおり、西側は、喜多川の谷となっている。標高は、約46m、谷との比高は、約16mを測る。遺構は、北側より土砂採取を行なっていたため発見時は既にプランの北側半分は削除され欠損していた。検出した遺構は、竪穴住居跡1軒分であり、実際に調査した部分は、南側部分のみである。平面形体は、隅円方形と推定され、東西方向の軸は、長さ上端4.45mを測る。主軸方位は、南北方向(カマドが存在すると推定される方向)では、N－16°－Eを示す。壁の立ち上がりは、南東側ほど残存状況が良好で、最大で62㎝を測る。床面は、ほぼ平坦で、ハードローム層内のレベルに設置されている。踏み固められた面は、床面中央付近のP_1～P_3に囲まれた内側に明確に認められる。壁溝は、検出範囲では、全周しており、幅は下端で、3～12㎝、深さは、床面より9～15㎝を測る。また、壁溝内の小ピットも数ケ所存在する。床面内のピットは、3本存在し、P_1とP_2は、ほぼ東西方向に並び、主柱穴の南側2本分とみられる。間隔は、下端中心点間で2.00mである。両ピットとも、掘り方は認められない。P_3は、いわゆる出入口相当施設用のピットと考えられる。焼土や炭化物は、検出されなかった。また、竪穴の覆土は、黒褐色土を主体とし、自然堆積である。出土遺物は、東側覆土下位付近より、土製支脚が1点検出された。形体は、上端ほど細くなる方柱形で、上端部と下端部は、欠損している。胎土は細砂粘土、色調は、暗褐色である。上端幅は、推定で3.3㎝を測る。他に土器片等は、検出されていない。

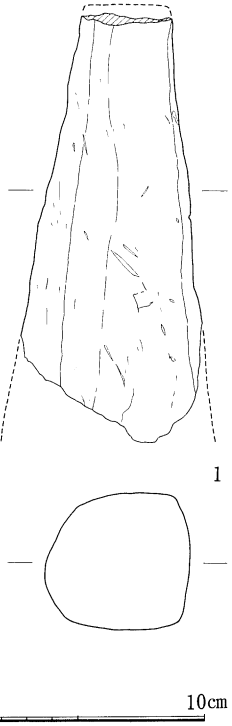
第5表　竪穴住居跡ピット計測表(㎝)

ピット名	上端	下端	深さ
P_1(西側)	27×24	14×14	62
P_2(東側)	29×25	18×17	77
P_3(南側)	40×39	13×11	34

第69図　高沢遺跡調査地区周辺地形図　黒星印が調査地区の位置



第70図　高沢遺跡検出住居跡実測図



第71図　高沢遺跡住居跡出土土製支脚実測図

(７)辰巳ケ原遺跡

a. 遺跡の位置と周辺の環境

辰巳ケ原遺跡は、千葉県市原市大厩字辰巳ケ原1,790－61地先に所在する。当地は、村田川の下流域左岸で支流の大厩川小谷の右岸台地上に位置し、標高は、約25mで、村田川の本流から約1.5km南側に入った地点で、東京湾からは、約４kmである。小谷との比高は、約15mで、傾斜面は、少し急傾斜である。また、北側と南側に小さな谷が入り込み、やや西側に突出した形態を呈する。調査面積は1,125㎡である。辰巳ケ原遺跡は、現在の辰巳台団地の西側平坦面に広がる約400,000㎡の縄文時代から中世にいたる多種多様な遺物が散布している。今回の調査地の北側では、２ケ所発掘調査が実施されており(註1)、縄文時代早期の炉穴、古墳時代後期の竪穴住居跡などを検出している。また、周辺の遺跡では、北東約500mの菊間向原遺跡では(註2)、縄文時代早期の炉穴、中期の竪穴住居跡、歴史時代の方形周溝状遺構などを検出している。北東約800mには、大厩弁天台遺跡(註3)が調査され、円墳１基等を検出している。他には、同台地上の北約１kmには、前方後円墳で、長軸63.4mを測る大厩二子塚古墳(註4)、東約１kmに、宮ノ台式期を主とする集落や古墳を検出した大厩遺跡(註5)、大厩浅間様古墳(註6)などに代表される大厩古墳群(註7)が存在する。さらに谷を隔てて北西約２kmには、菊間古墳群(註8)が所在している。

b. 調査の内容

調査前の遺跡は、大部分が畑地で、西側斜面部のみが山林となっていた。台地平坦部は、辰巳台団地の一画として宅地化がせまっており、今回の調査も相互住宅株式会社による宅地造成に伴うものである。調査は、対象区域内に幅約２mのトレンチを約７m間隔で６本設定した。その結果、１ケ所に溝状遺構が検出されただけであった。溝は、調査区域内の北側中央付近に存在し、ほぼ直線的に南東から北西方向にかけて走っている。しかし、台地上位の平坦部は、既に削平されて残っておらず、北西側の斜面部に向うほど深さ、幅とも大きくなる。主軸方位は、N－24°－Wで、全掘していないが、長さ11.3mまで検出した。規模は、北西端部の標準Ⅱ層掘り込み面で、幅1.20m、深さ0.65mを測る。断面は、逆台形で、底部は、平坦だが狭く、幅は30～40cmである。覆土は、黒褐色土を主体とし、ローム粒を少量含み、自然堆積である。また、出土遺物は、検出できなかった。当溝は、谷部へ向って更に続いているが、完掘していないため不明な点は多い。時期については、出土遺物が無いため、土層観察に依るしかないが、中世以前の所産と推定される。

(註１)「千葉県市原市辰巳ケ原遺跡発掘調査報告」武部喜充他　市原市辰巳ケ原遺跡調査会　昭和58年
「辰巳ケ原遺跡」穴沢義功他　市原市辰巳ケ原遺跡調査会　昭和55年　千葉県埋蔵文化財発掘調査抄報　千葉県教育庁文化課

(註２)「菊間向原遺跡」米田耕之助『昭和62年度市原市埋蔵文化財緊急調査報告書』 昭和63年

(註３)「大厩弁天台遺跡」大村直　平成元年　(財)市原市文化財センター

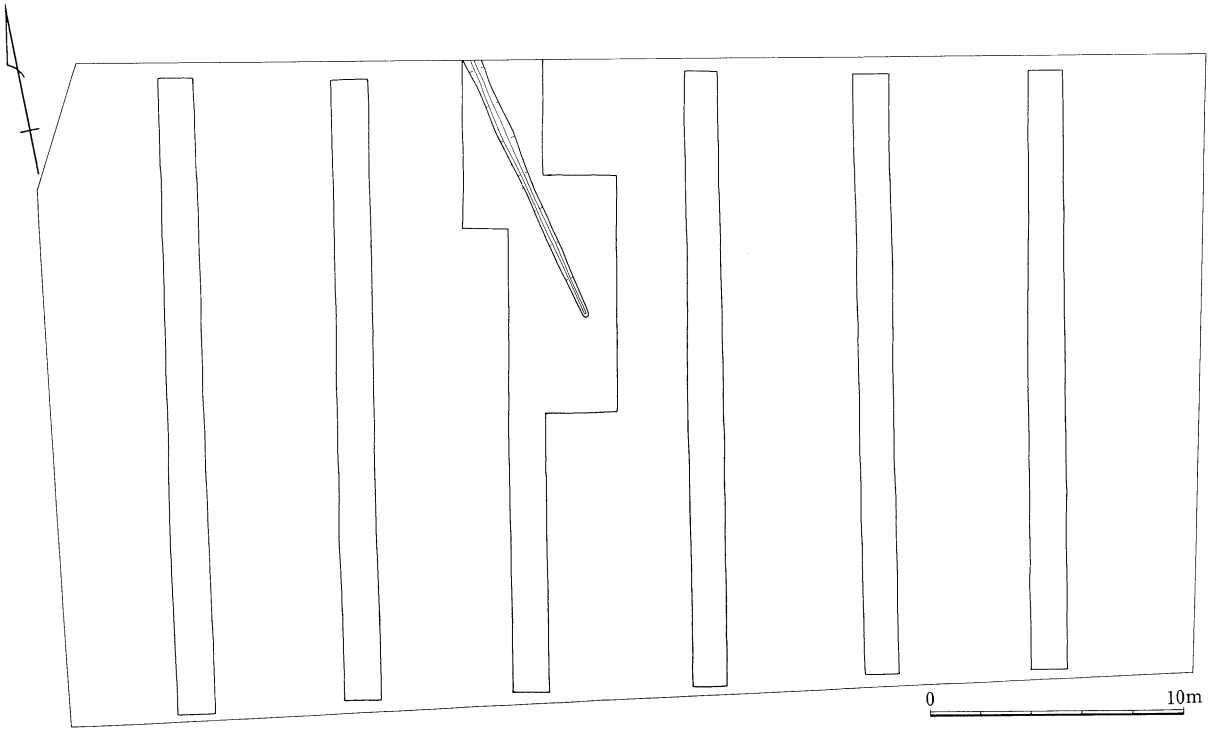
(註４)「No.926」「千葉県市原市埋蔵文化財分布地図(－北部編－)」昭和63年　市原市教育委員会

(註５)「市原市大厩遺跡」三森俊彦他　昭和49年　(財)千葉県都市公社

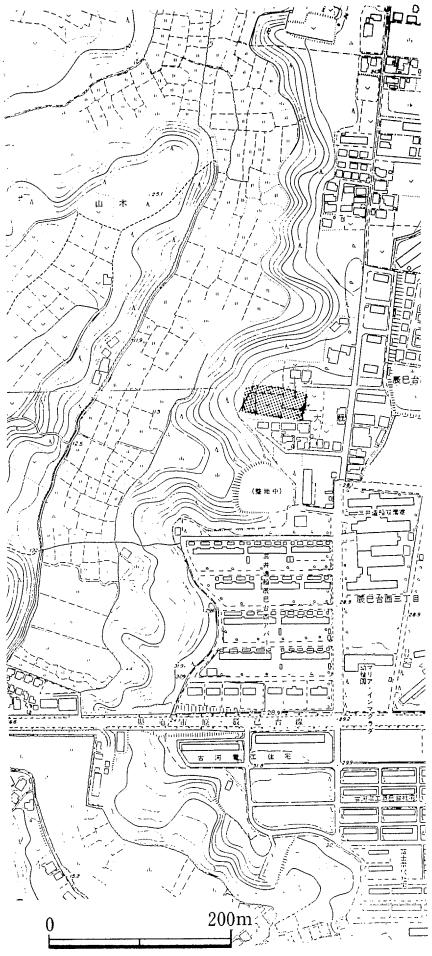
(註６)「(大厩)浅間様古墳」浅利幸一　市原市文化財センター年報　昭和59年度　(財)市原市文化財センター

(註７)「No.935」(註４)と同じ

第72図　辰巳ケ原遺跡調査地区地形図　※スクリーントーンが調査地区

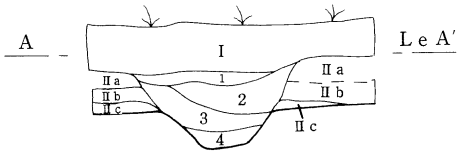


第73図　辰巳ケ原遺跡調査状況図



第74図　辰巳ケ原遺跡位置図

※スクリーントーンが調査地区



土層説明

I　表土。

IIa　黒褐色土。

IIb　暗褐色土。

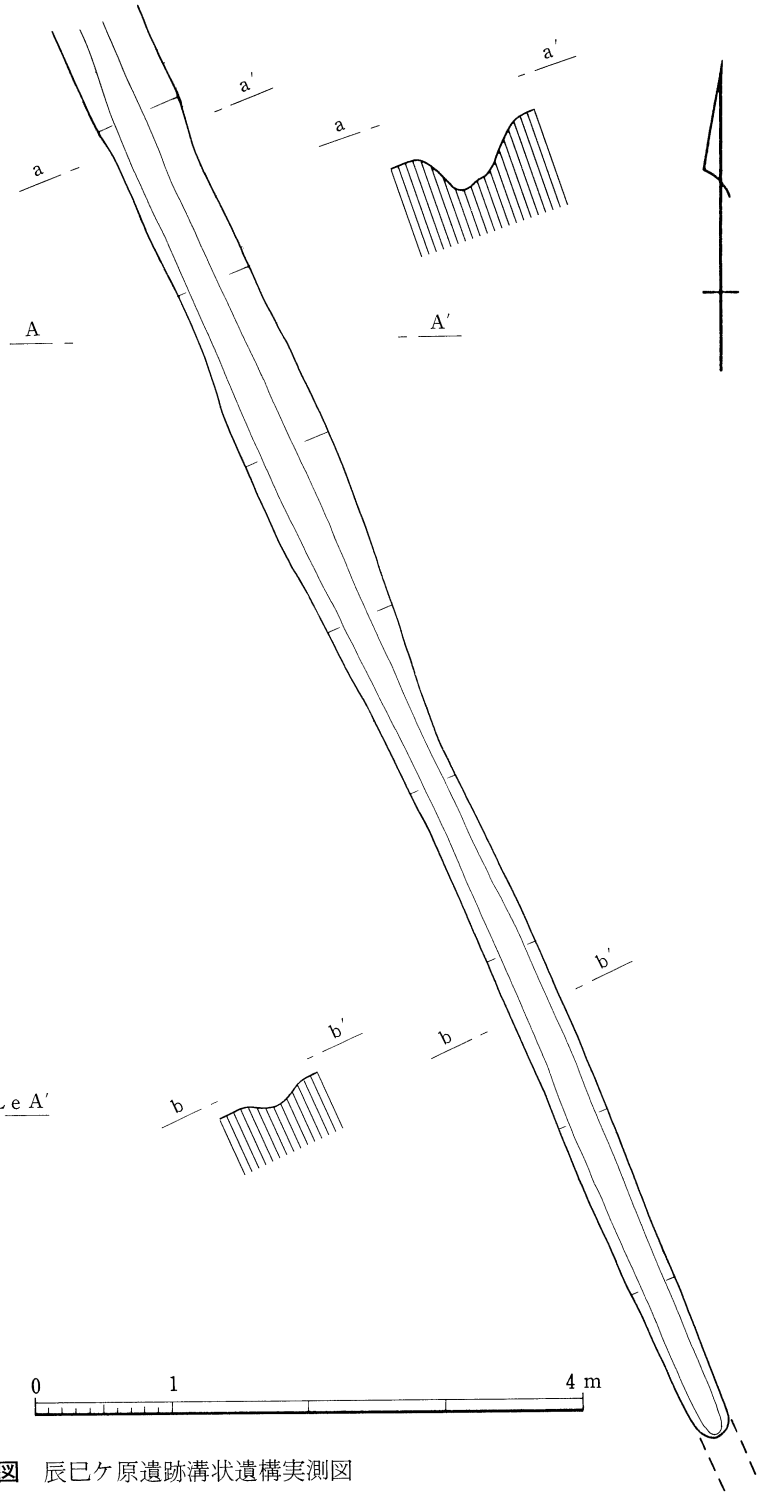
IIc　ローム漸移土。

1．黒褐色土。ローム粒を含む。

2．黒褐色土(明るい)。ローム粒を多く含む。

3．黒褐色土(明るい)。ローム土塊を含む。

4．暗褐色土。ローム土塊を含む。



第75図　辰巳ケ原遺跡溝状遺構実測図

(註８)「No.921」(註４)と同じ

(８)原遺跡

a. 遺跡の位置と周辺の環境

原遺跡は、千葉県市原市姉崎字原350－１地先に所在する。当地は、房総半島から東京湾に注ぐ養老川下流域の左岸台地上に位置し、付近は、台地に小谷が樹枝状に入り込み複雑な景観を呈する。調査地は、東京湾の旧海岸線より約1.5km入った地点で、西側と北東側より小谷が入り、尾根状に似た地形である。台地の標高は約42mで、この台地の東側端部付近である。周辺には、縄文時代後期頃の鬼子母神(台)貝塚(註1)、弥生時代後期から古墳時代前期を主とする毛尻遺跡(註2)や六孫王原遺跡(註3)、古墳時代では、上海上国造の奥津城といわれる姉崎古墳群(註4)など多くの遺跡が存在する。原遺跡は、原１号墳が上層に築造されており、昭和46年に確認調査が実施され(註5)、主軸長約70mの前方後方墳(当時)と考えられ、木棺直葬の主体部から直刀、刀子、鉄鏃が、また周囲より形象、円筒埴輪が出土している。その後、造成により上部が削平されたが、昭和56年に宅地造成に伴ない下層の残存遺構について発掘調査が実施された(註6)。その結果、弥生時代後期を主とする竪穴住居跡22軒や原１号墳の北側部分の周壕などが検出された。調査は、部分的ではあったが、原１号墳については、前方後円墳の可能性が大きくなり、また、前方部墳丘下の旧表土中より一括して出土した土器群などより６世紀第１四半期後半から第２四半期前半と推定されている。

b. 今回の調査内容

調査は、昭和56年に調査した東側端部隣接地で、昭和58年４月18日に実施した。宅造による土留め工事に先行する緊急調査であり、調査面積は、わずかな範囲で、昭和56年の調査遺構との関連も不明な点が多い。検出された遺構は、溝状遺構１条である。溝は、ほぼ南北方向に延び、東側に弧を描いた形体を呈し、断面は、逆台形状である。規模は、幅が上端46～64cm、下端22～33cm、深さは、最大で45cmを測る。底部のレベルは、北側ほど若干低く、検出された北側と南側のレベル差は約30cmである。溝の位置は、台地端部の東側に傾斜をはじめる変換点付近である。溝内の覆土は、自然堆積で上位にいわゆる宝永期の火山灰を含んでいる。また、出土遺物は、検出されていない。当溝は、覆土の状況などから判断して、江戸時代の所産と考えられるが、昭和56年の調査との関連では、おそらく９号溝の続きと推定される。この他に、第78図１～４の遺物が出土している。１～３は、土師器片で、３は、外面に刷毛目調整痕が認められる。４は磁器碗で、体下位に草木を具象化した様な文様が施されている。

(註１)「千葉県市原市埋蔵文化財分布地図(－北部編－)」昭和63年　市原市教育委員会

(註２)「千葉県市原市毛尻遺跡発掘調査報告書」武部喜充他　昭和58年　毛尻遺跡調査会

(註３)「六孫王原遺跡」木對和紀　『昭和63年度千葉県遺跡調査研究発表会発表要旨』 昭和63年　千葉県文化財法人連絡協議会

(註４)山谷遺跡等を参照

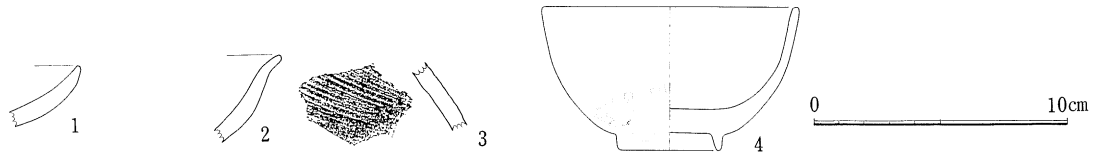
(註５)「原一号墳発掘調査概報」石井則孝他　市原市教育委員会　昭和46年

(註６)「原遺跡」越川敏夫他　原遺跡調査会　昭和59年

第76図　原遺跡周辺地形図

土層セクション説明
1．黒褐色土。黒砂(いわゆる宝永の富士火山灰)を含む。
2．暗褐色土。
3．黒褐色土。ロームブロックを含む。
4．暗褐色土。ロームブロックを多く含む。
5．暗褐色土。
6-1．暗褐色土。ロームブロックを含む。
6-2．暗褐色土。(全体的にロームブロック)

第77図　原遺跡検出溝状遺構実測図　(右は、ハードロームまで下げた面)



第78図　原遺跡出土遺物実測図

3．あとがきにかえて

以上、8遺跡について説明してきたが、簡単にまとめてみたい。

棒ケ谷遺跡では、縄文時代の土坑や陥穴が数基、古墳時代前期と考えられる土壙墓1基、弥生時代後期から古墳時代前期の竪穴住居跡が11軒、墳丘の無くなった円墳1基(古墳時代後期前半)、中世と考えられる溝状遺構等を検出している。この溝については、「高坂砦」との関連性が推測される。

永田遺跡は、台地周辺の斜面に奈良時代から平安時代の須恵器窯跡が存在しているが、今回の調査では、台地上に、竪穴住居跡を1軒検出している。竪穴は、略台形で、床面直上から炭化物、また、土師器、須恵器、陶土と思われる粘土塊などが出土している。筆者(田所氏)は、永田窯跡群の工房施設の一つと考えている。

海士有木遺跡は、溝2条と土坑3基の検出であるが、土層や出土遺物から、周辺に位置する蟻木城跡の関連施設と推測している。

北旭台遺跡は、確認調査で、対象面積に対する発掘の割合は少なかったが、縄文時代前期から後期、古墳時代前期の土器片などが出土しており、同時期の竪穴住居跡や土坑、さらに古墳の存在も確認されている。調査地区は、市原交通刑務所によって管理され、現在は、調査時よりも約50cm前後盛土され、畑等に利用されている。

姉崎山谷遺跡は、沖積低地上の遺跡であり、いわゆる、後背湿地部にあたる。調査は、確認調査であり、遺構は、検出されていないが、11層の土層をサンプリングし、花粉分析を行っている。1層から4層は、池沼又は、水田のような環境、5～11層は、aグループ(ハンノキ属が多産する試料)とbグループ(コナラ亜属が多産する試料)に分かれ、いずれも池沼の存在が推定されている。

高沢遺跡は、台地西側斜面上に、竪穴住居跡を1軒分(調査は約半分)を検出した。出土遺物は、カマドに利用される土製支脚片のみで、形体から古墳時代後期後葉の所産と考えられる。

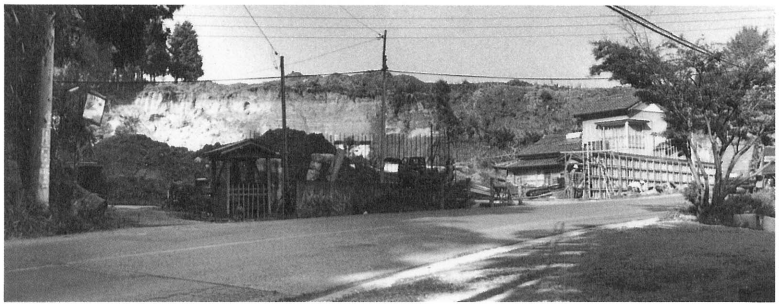
辰巳ケ原遺跡は、全域にトレンチを設定し、1条の溝を検出している。台地上より北西方向に、谷田へ向う小溝である。出土遺物は無く、覆土により、中世以前と推定される。

原遺跡は、台地端部のわずかな調査で、溝1条を検出した。西側は、昭和56年に調査を実施した部分の隣接地で、この溝が第9号溝と呼称される江戸時代の溝と連結すると考えられる。

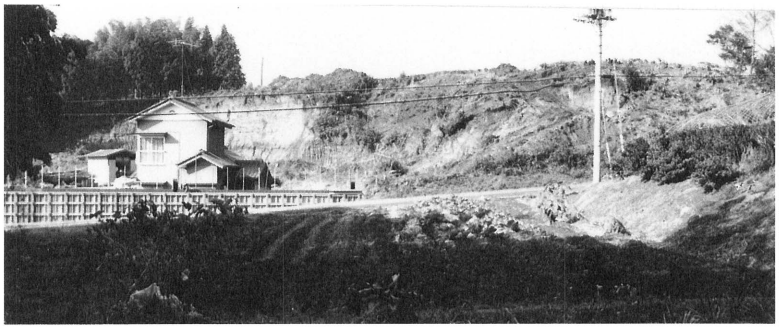
このように、当報告書に記載した遺跡は、小さな規模ばかりであるが、このような未報告の調査遺跡も、歴史資料として不可欠であり、こうした形で発表したものである。

なお、永田遺跡についての整理、原稿執筆等は、田所真氏が担当している。また、姉崎山谷遺跡の現地調査については、山武考古学研究所の平岡和夫氏にご苦労をおかけしている。

図版１　　棒ケ谷遺跡（１）

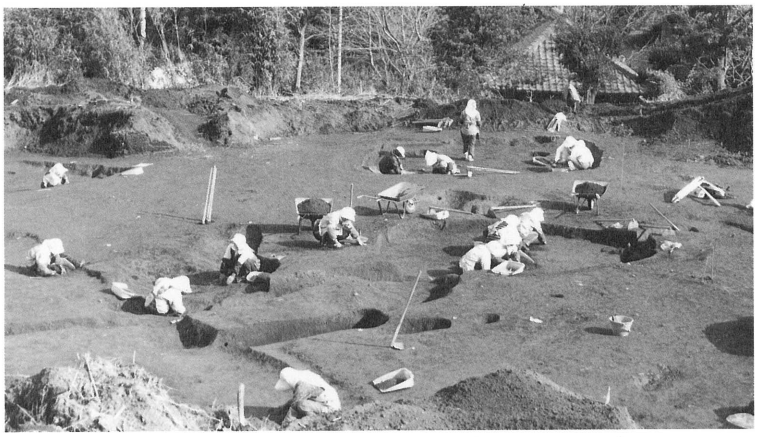


棒ケ谷遺跡
近景　東側より
台地上が遺跡
手前は土採取により削除



近景　北東側より

北東側に隣接する
薬王寺境内の石仏

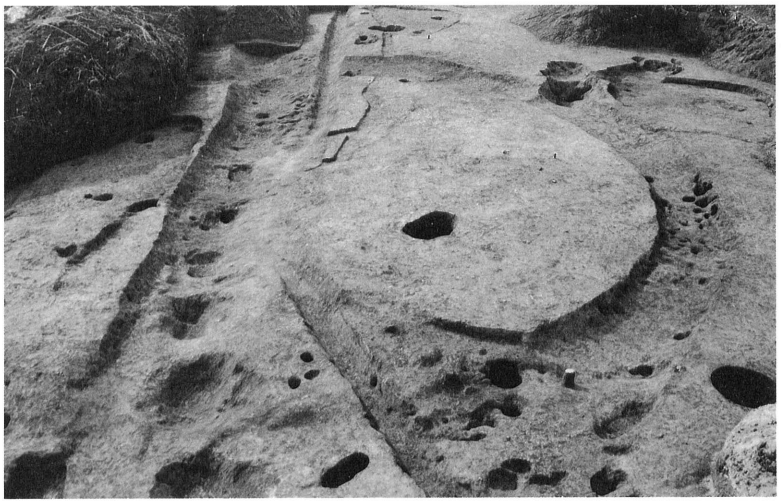


調査状況

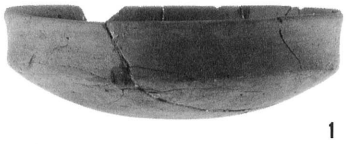
図版２　棒ケ谷遺跡（２）

第１号古墳全景　西側より

第１号古墳遺物出土状況



第１号古墳等　北東側より



1

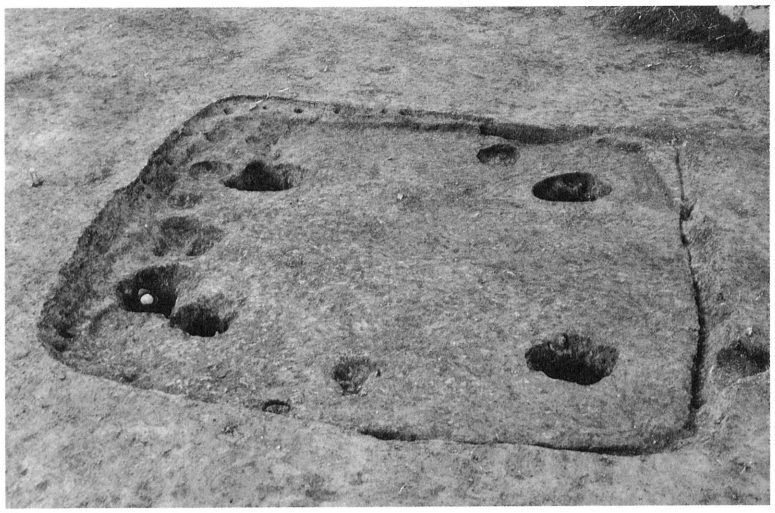
第１号古墳出土遺物

第３号住居跡及び第１～３号溝付近の状況　東側より

図版３　棒ケ谷遺跡（３）

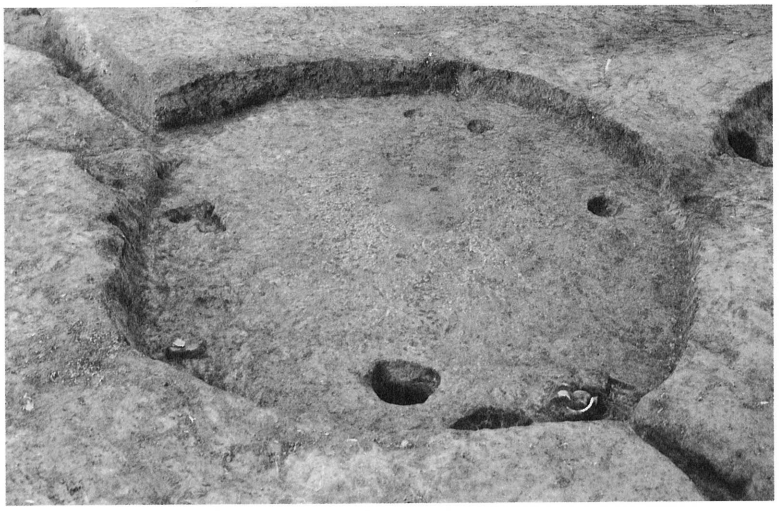
第１号住居跡全景　北西側より

第１号住居跡遺物出土状況



第２号住居跡全景　東側より

第２号住居跡遺物出土状況

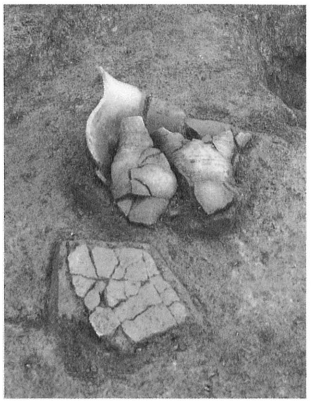


第３号住居跡全景　南東側より

第２号住居跡遺物出土状況

図版４　棒ケ谷遺跡（４）

第５号住居跡全景　東側より

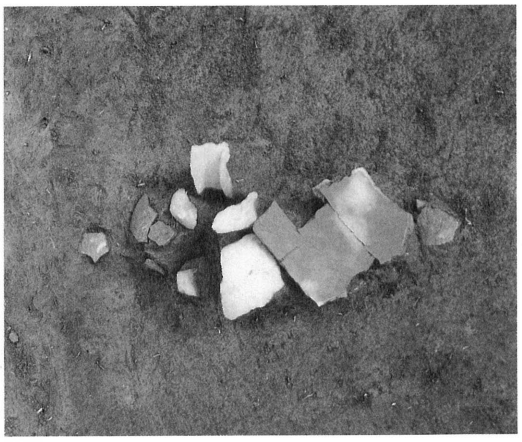


第３号住居跡遺物出土状況

第６号住居跡全景　西側より

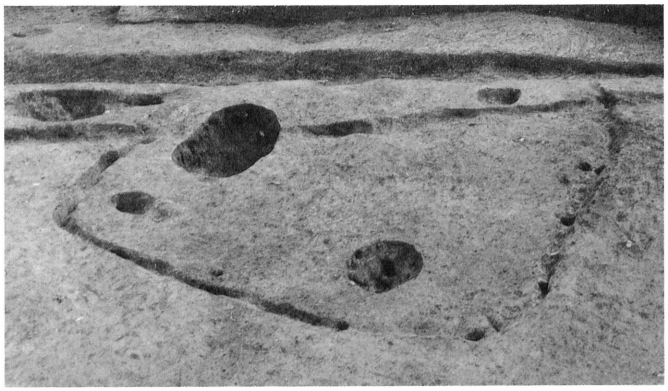
第４号住居跡全景

第７号住居跡全景　北西側より

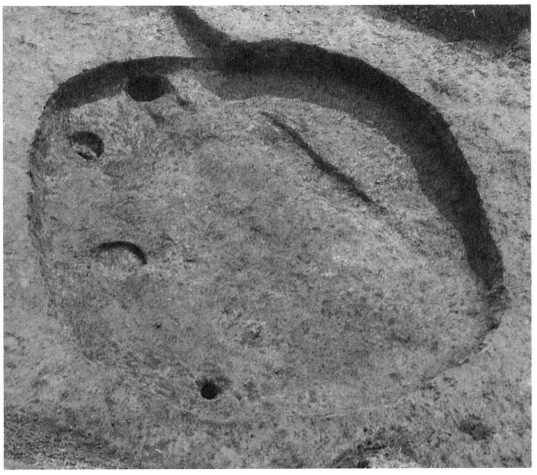


第４号住居跡遺物出土状況

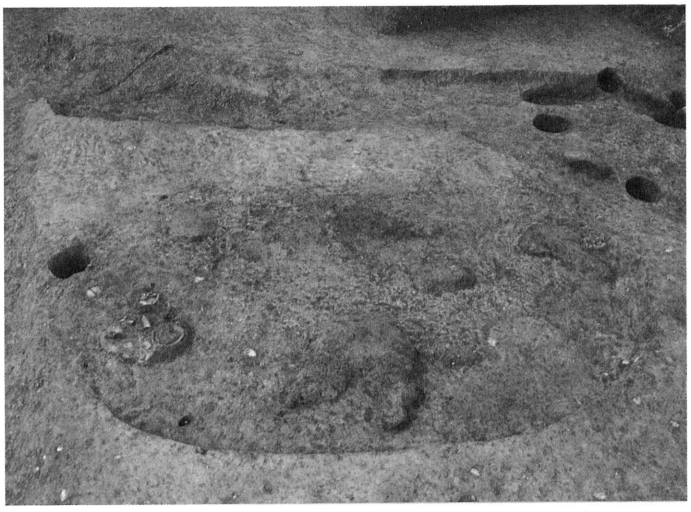
図版 5　棒ケ谷遺跡（5）



第８号住居跡全景　西側より



第９号住居跡全景　南東側より



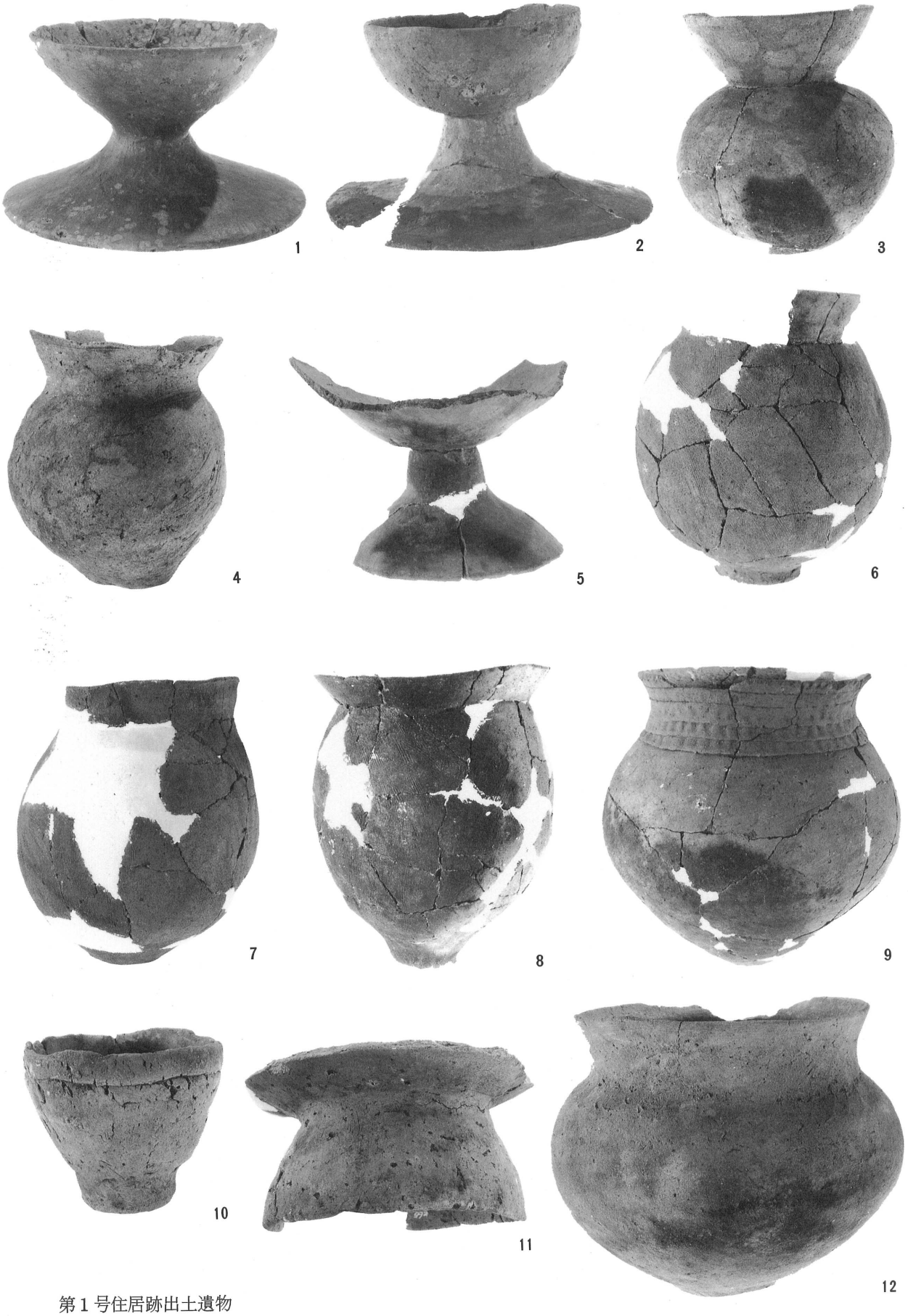
第11号住居跡全景　西側より

第11号住居跡遺物出土状況

第10.11号住居跡全景　北西側より

第10.11号住居跡全景　南側より

図版 6　棒ケ谷遺跡（6）



第１号住居跡出土遺物

図版７　棒ケ谷遺跡（７）

1

2

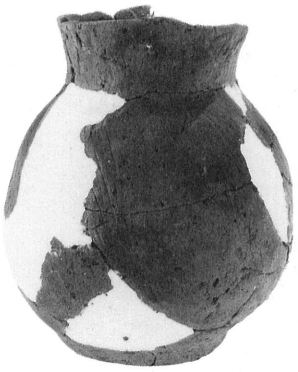
3

4

5

6

7



8

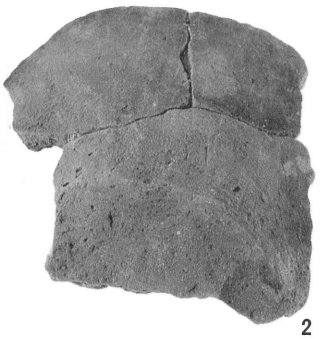
9

10

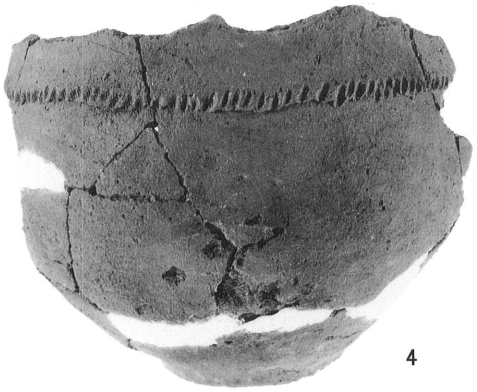
第２号住居跡出土遺物

図版 8　棒ケ谷遺跡（8）

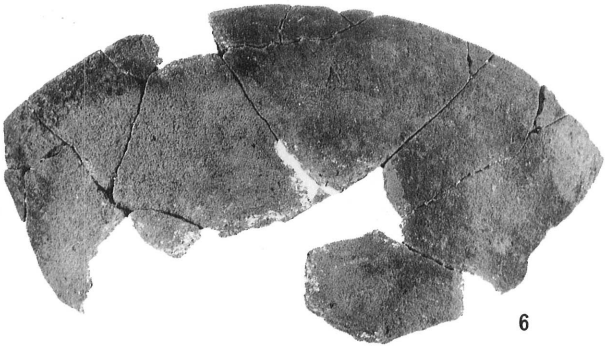
1


2

3


4

5


6

7

8

9

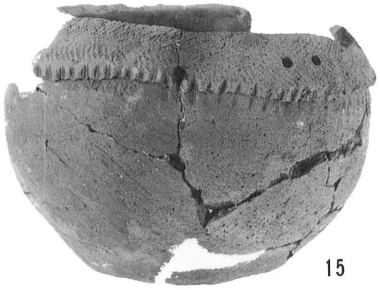
10

11

12

13

14


15

1～4　第3号住居跡
5　第4号住居跡
6　第5号住居跡
7、8　第6号住居跡
9～15　第7号住居跡

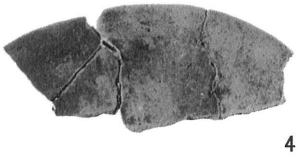
第3.4.5.6.7号
住居跡出土遺物

図版 9　棒ケ谷遺跡(9)

1

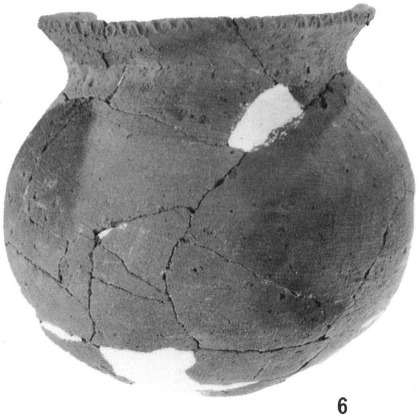
2

3



4

5



6

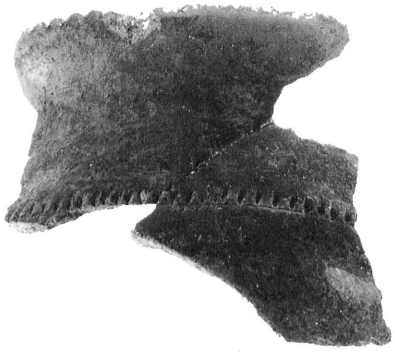
7

8

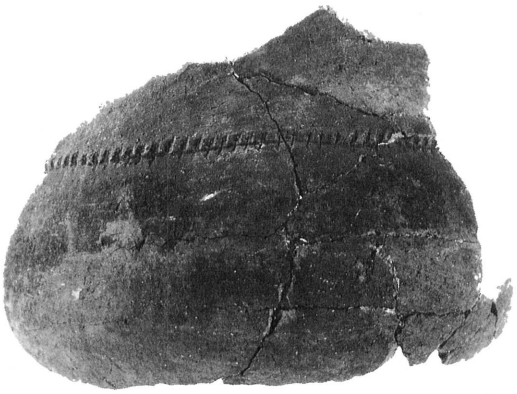
1～2　第7号住居跡
3～8　第8号住居跡

第7.8号住居跡出土遺物

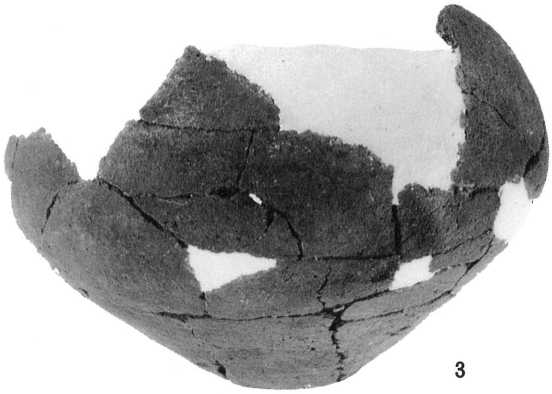
図版10　棒ケ谷遺跡(10)



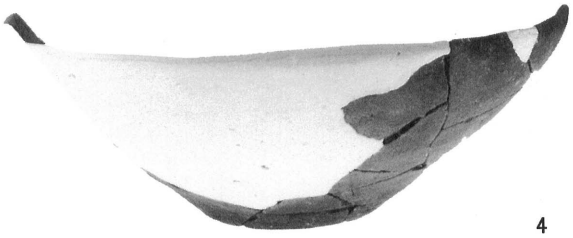
1



2



3



4

5

6

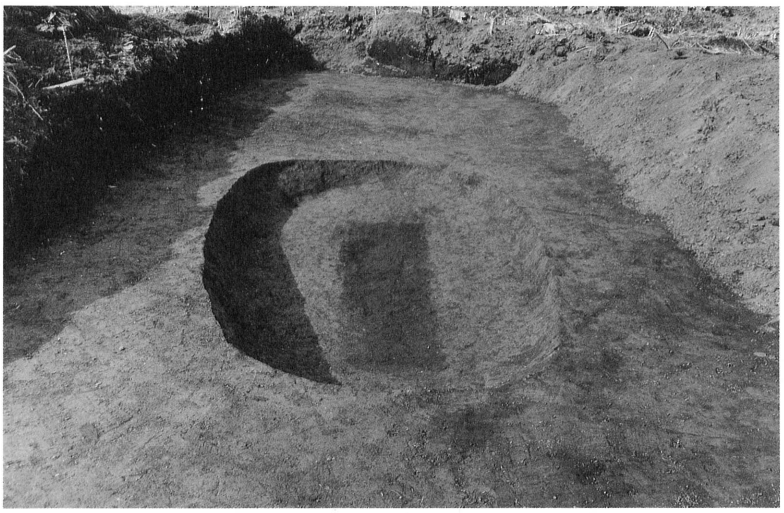
7

8

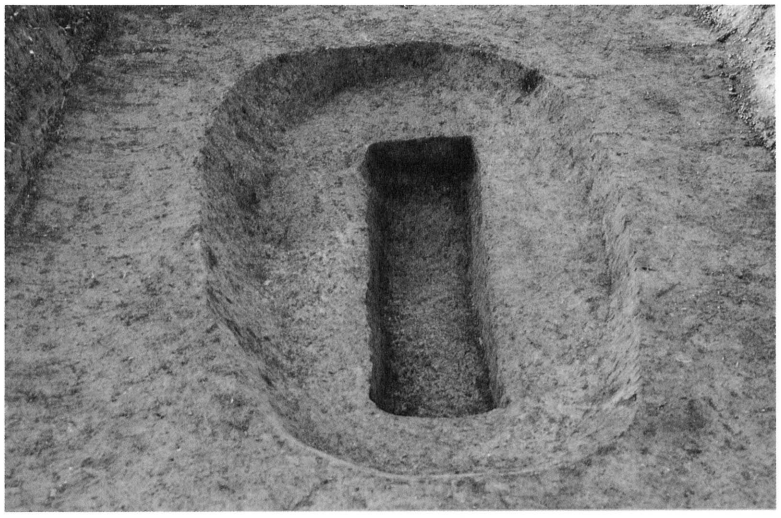
1～3　第９号住居跡
4～6　第11号住居跡
7～8　第10号住居跡

第9.10.11号住居跡出土遺物

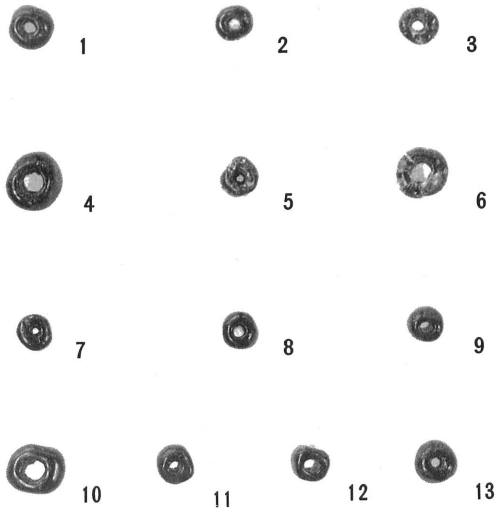
図版11　棒ケ谷遺跡(11)



第１号土坑 木棺痕 南東側より

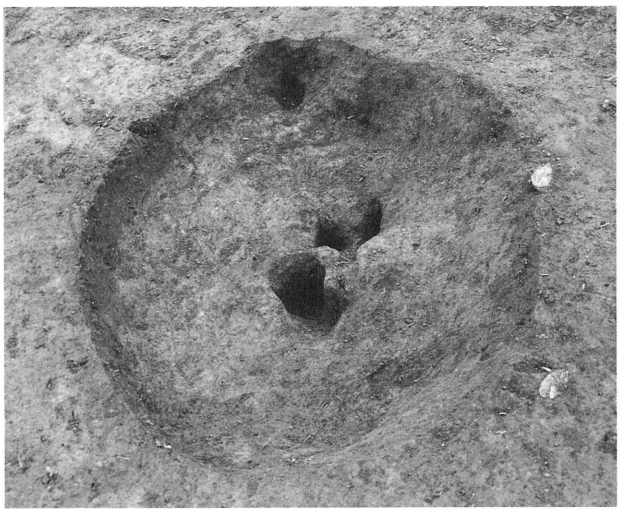


第１号土坑 完掘状況 南東側より

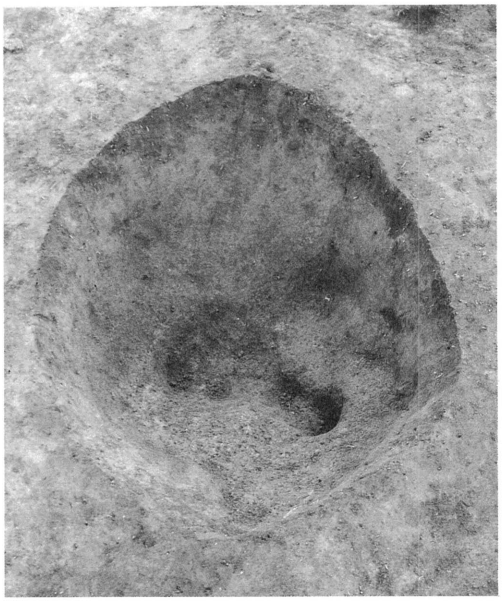


第１号土坑出土ガラス玉(１～13)

図版12　棒ケ谷遺跡(12)

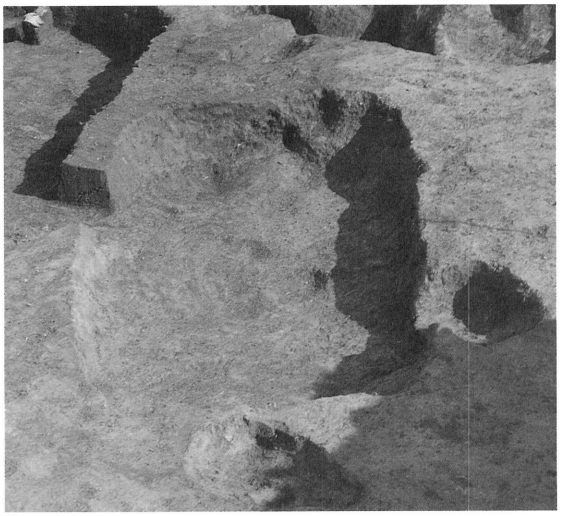


第11号土坑全景　西側より

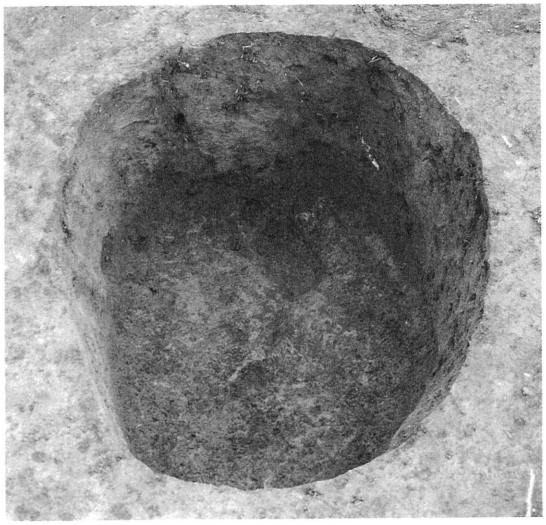


第16号土坑全景　南西側より

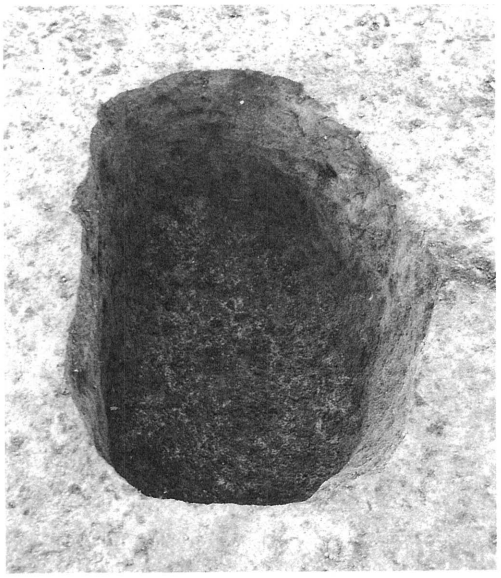
第22号土坑全景　東側より



第18号土坑全景　西側より



第４号土坑全景　南東側より



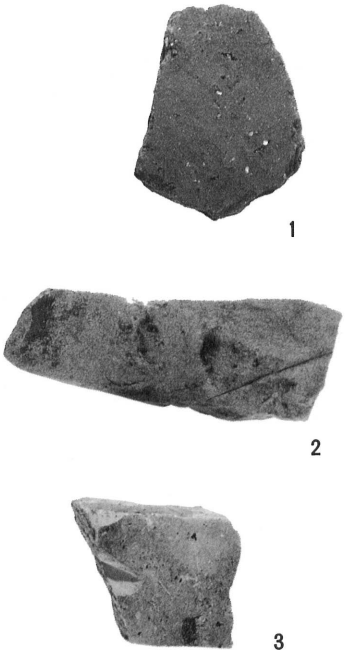
第21号土坑全景　北側より

図版13　棒ケ谷遺跡(13)

第9.10.11号溝状遺構　東側地点 南東側より

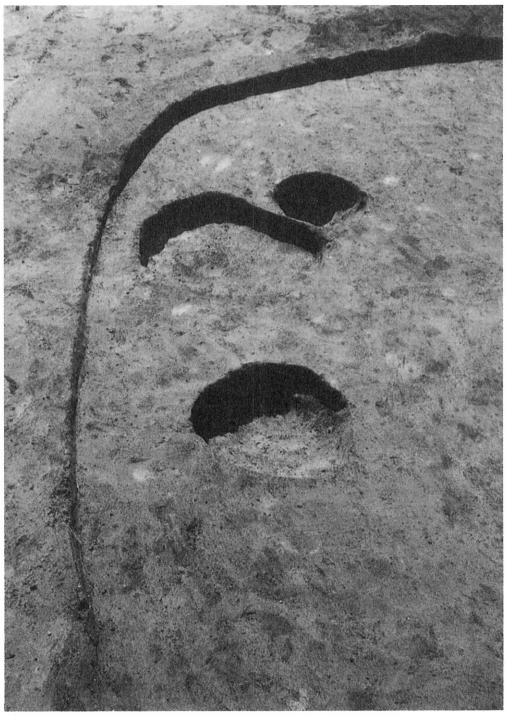
第9.10.11.12.13号溝状遺構　北東側より

第7.8.9.10号溝状遺構　北東側より

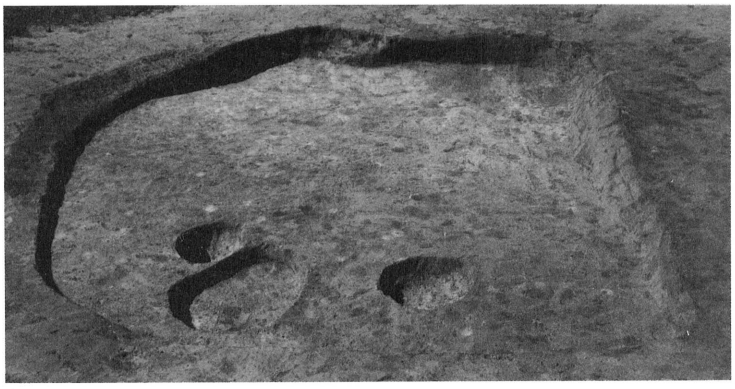


第9.10.11.12号溝状遺構出土遺物

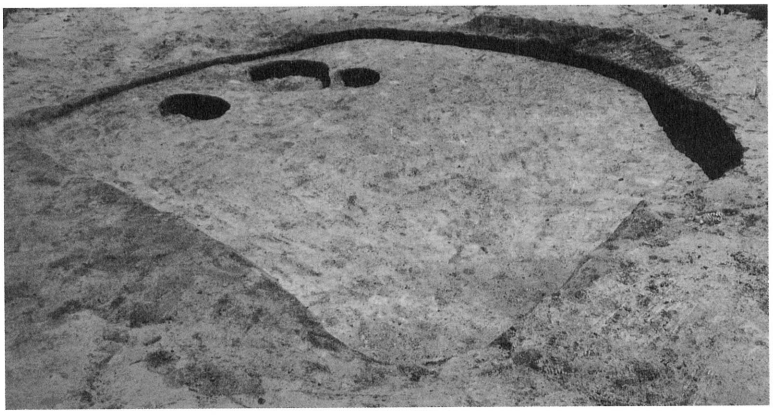
図版14　永田遺跡（１）



床面内ピットと検出状況 北側より

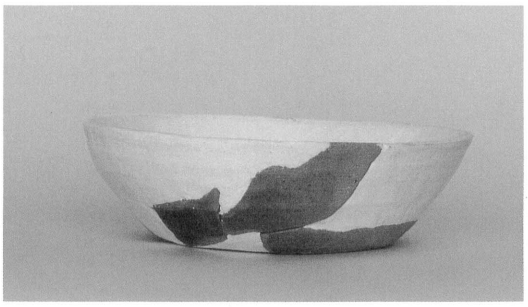


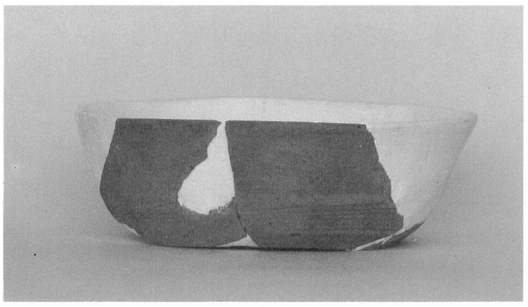
竪穴住居跡全景（１）東側より



竪穴住居全景（２）北西側より

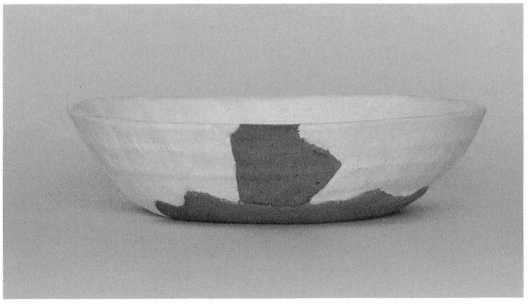
図版15　永田遺跡（２）

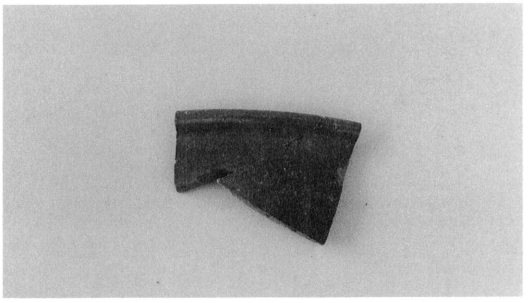




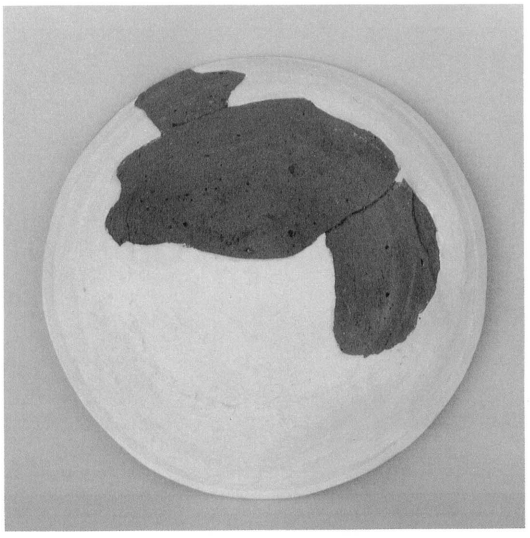
1

2

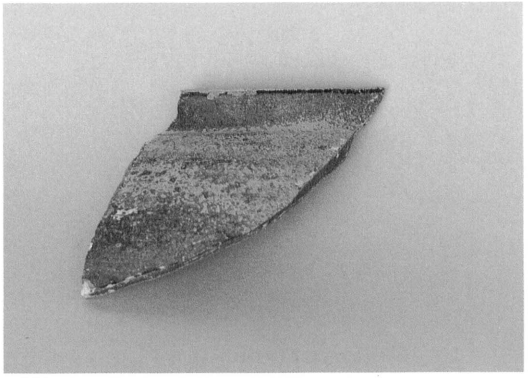




4



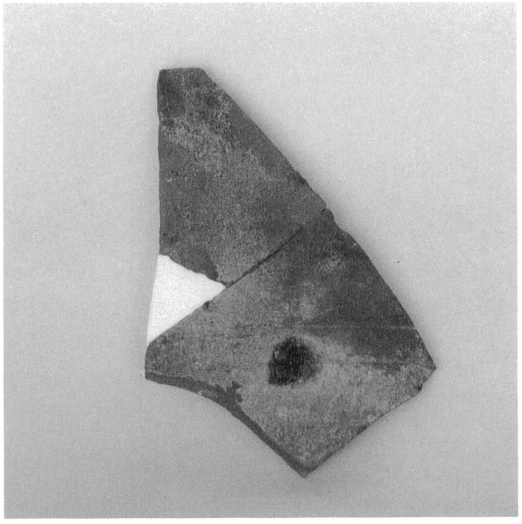
3



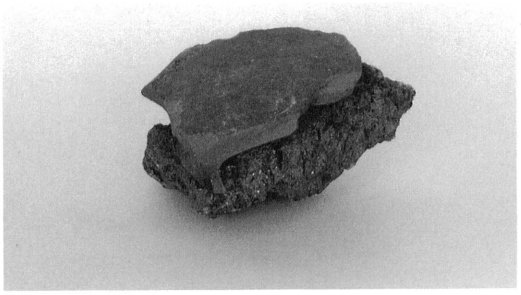
5

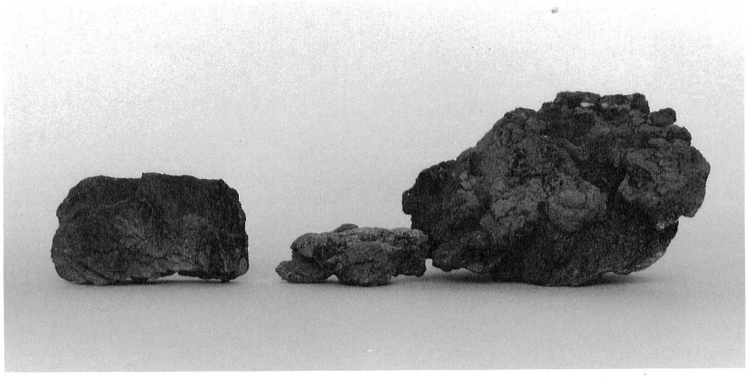
図版16　永田遺跡（３）

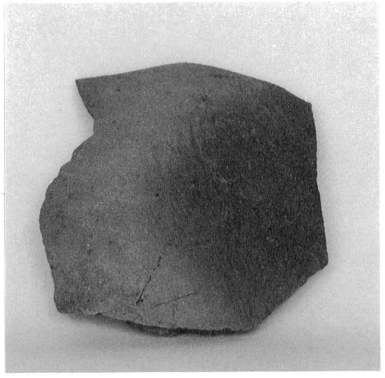
6

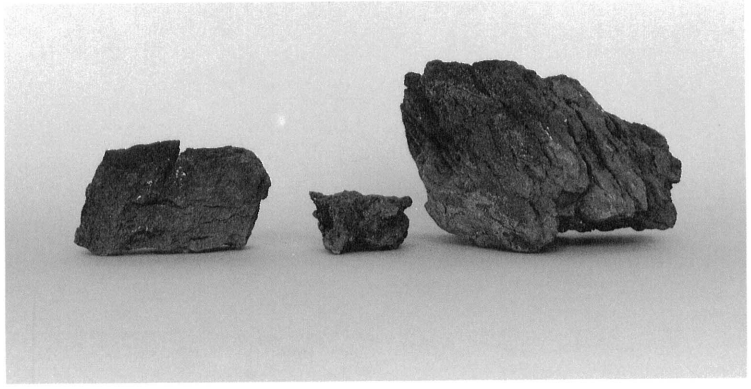

7

8


9




10


11

図版17　北旭台遺跡（１）

遺跡の状況（１）　東側より

遺跡の状況（２）　南側より

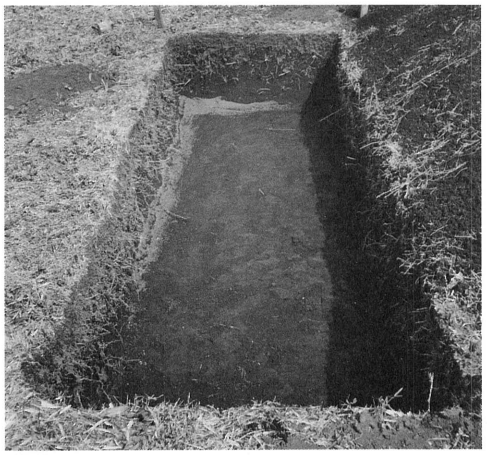
遺跡の状況（３）　北側より

遺跡の状況（４）　南側

遺跡の状況（４）　南側

図版18　北旭台遺跡(2)　北旭台遺跡トレンチ設定状況(1～8トレンチ)

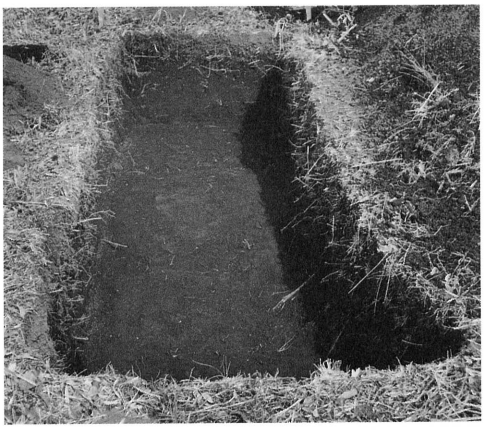
1トレンチ



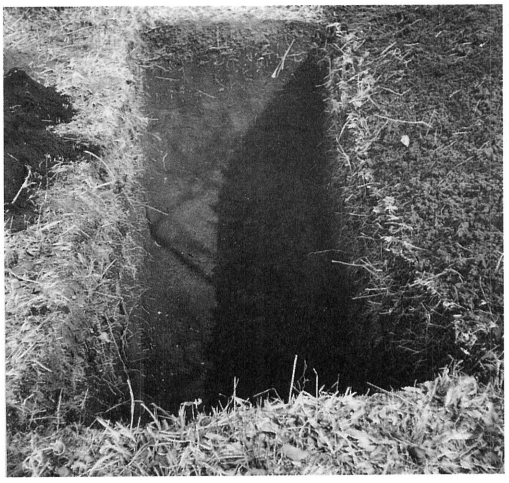
2トレンチ

3トレンチ

4トレンチ



5トレンチ



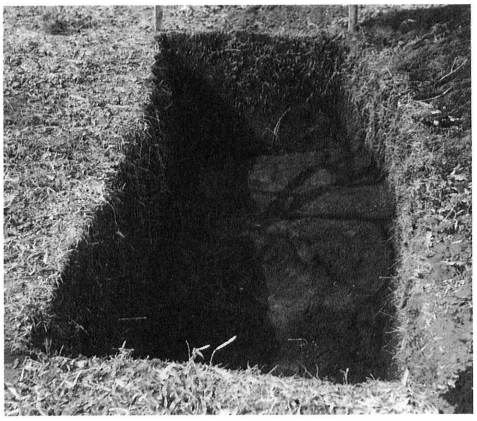
6トレンチ

7トレンチ

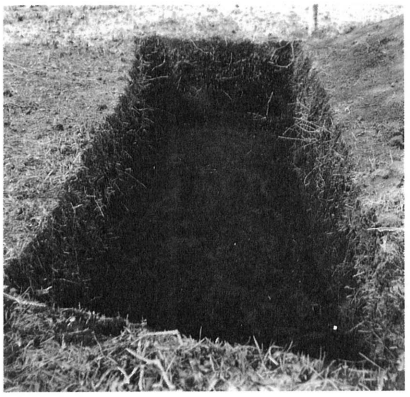
8トレンチ

9トレンチ

10トレンチ



11トレンチ



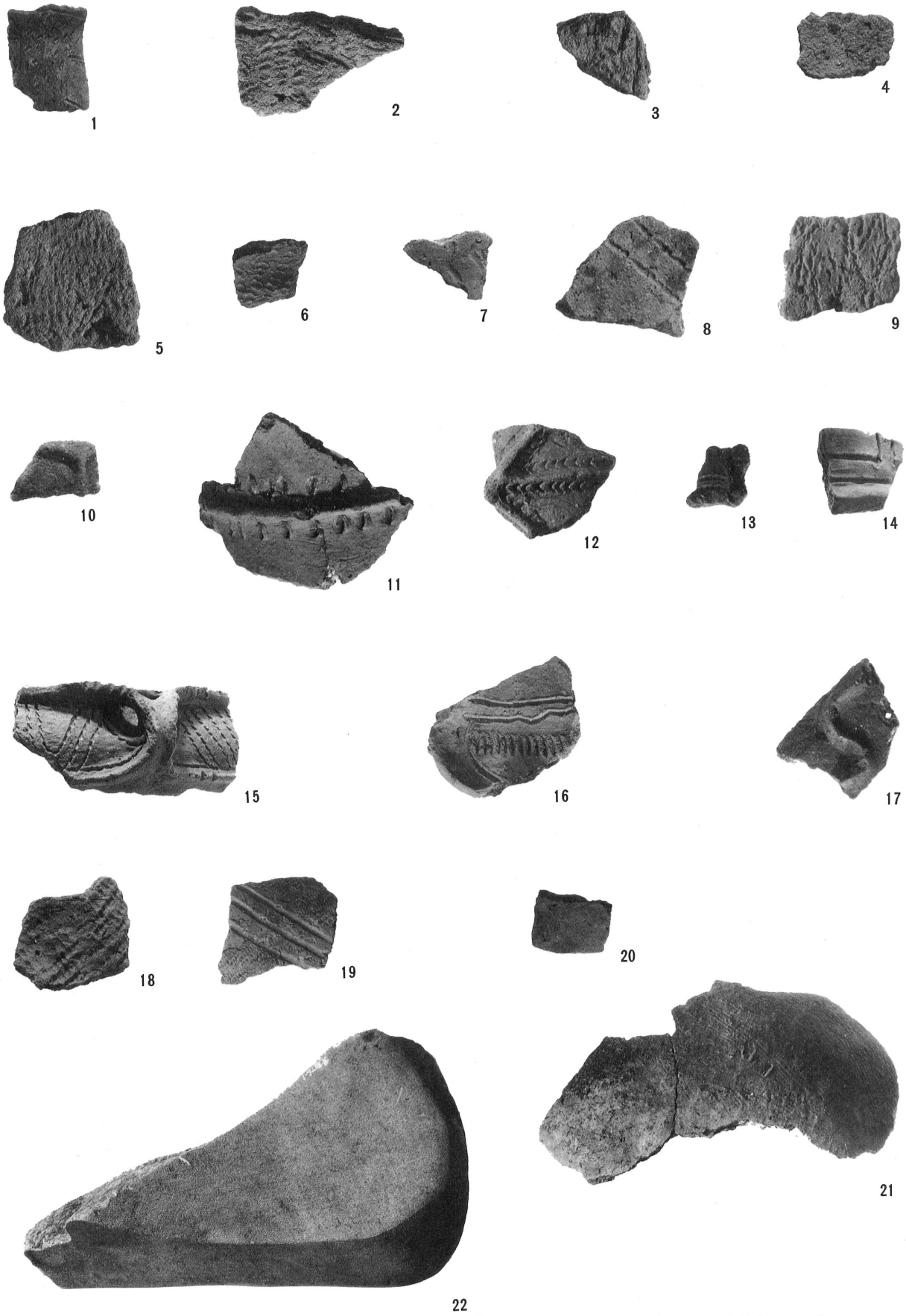
12トレンチ

13トレンチ

14トレンチ

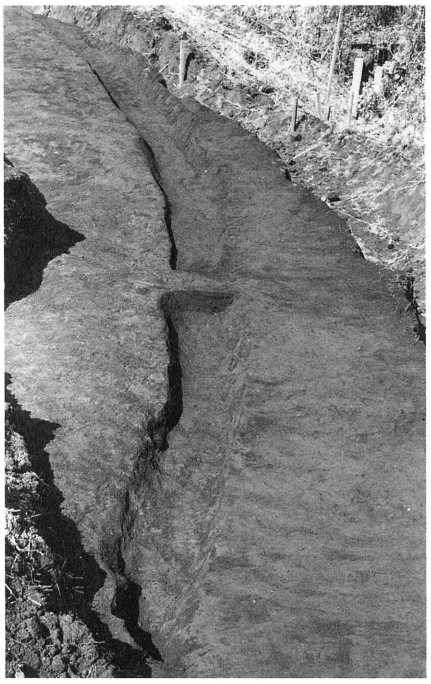
北旭台遺跡トレンチ設定状況（９～14トレンチ）

図版20　北旭台遺跡（４）



北旭台遺跡出土遺物（１～22）

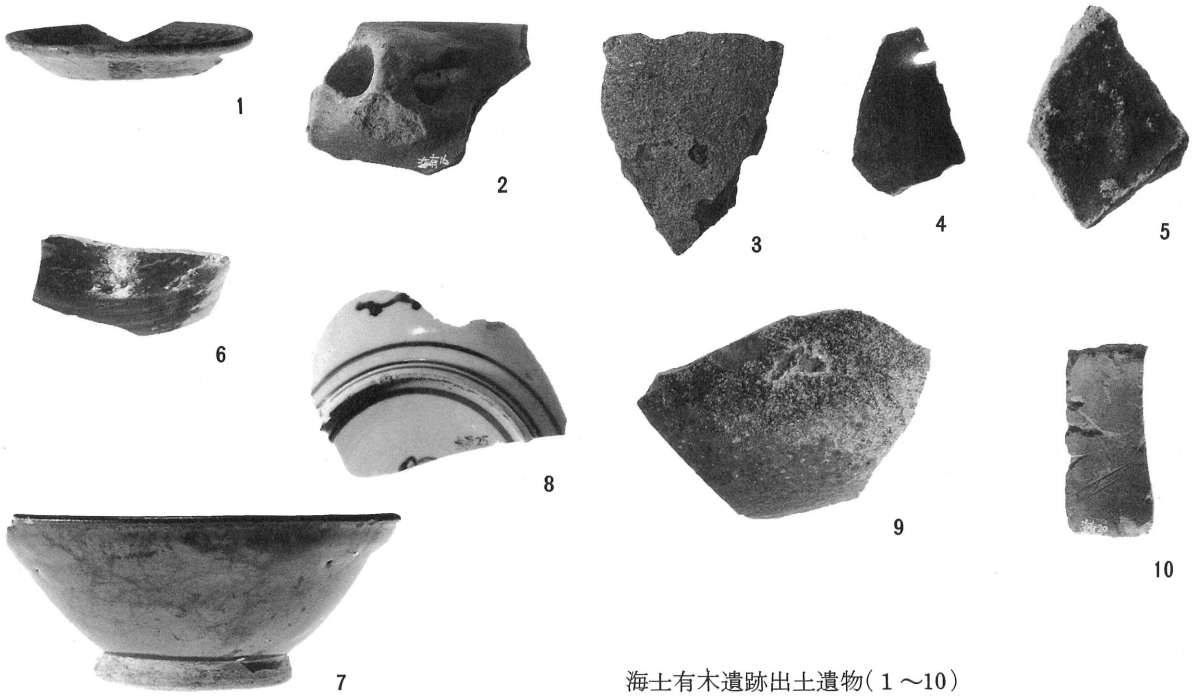
図版21　原遺跡　高沢遺跡　海士有木遺跡



原遺跡検出溝状遺構（その１）南側より

原遺跡検出溝状遺構（その２）南側より

高沢遺跡検出
竪穴住居跡
南側より



海士有木遺跡出土遺物（１～10）

財団法人 市原市文化財センター調査報告書 第32集

市原市棒ケ谷遺跡・永田遺跡・海士有木遺跡・北旭台遺跡
姉崎山谷遺跡・喜多高沢遺跡・辰巳ケ原遺跡・原遺跡

平成元年3月20日　印刷
平成元年3月26日　発行

編　集　財団法人　市原市文化財センター

発　行　市原市教育委員会
財団法人　市原市文化財センター
〒290　千葉県市原市馬立817番地
Tel　0436(95)2755

印　刷　三陽工業株式会社
〒290　千葉県市原市五井5510-1番地
Tel　0436(22)4348